
明日へと続く物語

カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日へと続く物語

【Nコード】

N0425S

【作者名】

カノン

【あらすじ】

小さい頃から大富豪の娘として育てられたメアリーは、外の世界を知りたくて冒険者のテッドと共に旅に出る

その過程でメアリーは世の中の広さや、自分の秘密に気づいていく

友情 愛情 真実 絆

そして裏切り……

すべての気持ちがあざわらう、そんな物語が今幕を開ける

第1話 セントリアの少女

この世界には2つの脅威がある

それは、人の心を弄び魂を喰らう「悪魔」

そしてもう1つは、人間よりも遥かに強い力を持つ「鬼」という生き物の存在だ

その2つの存在を恐れた人間は、脅威に立ち向かう為、研究を重ね「機械人形」を創り出した

しかし計画は失敗し、機械都市「ヘルズ王国」は「機械人形」の暴走により壊滅した

その後「機械人形」に関する実験は禁止とされ、【失われた科学技術】とな……………。

……………

「メアリー様、メアリー様！もう閉店時間が過ぎていますよ」

「あ…………すみません」

セントリアの中にある図書館で、閉店時間を告げられた少女『メアリー』は、ハっとした。

「本当にメアリー様は本が好きなのですね。ですが、早くお帰りにならないと『ライタ』が心配して・・・ほら、来た」

バタバタと慌しい足音が近づいてくると、乱暴に図書館の扉が開かれた

「メアリー！まだ図書館にいたのかっ！！」

ボタンと扉をたたきつける音と共に入ってきたのは、黒く短い髪と鋭い三白眼な目つきが特徴の『ライタ』という少年だった。

「ライタ、ごめんなさい・・・つい本に夢中になってしまっ

「っついて、いつものことだろ！？本なんて借りて読めばいいじゃないか」

ライタはため息を吐くと、身につけている腕時計を指さした

「ほら、5時を過ぎると怒られるんだろ？早く帰るぞ」

「うん、ありがとう。じゃあおじ様、又明日もきますわ」

「ああ、いつでもおいで」

図書館のおじさんに挨拶をすると、メアリーは急いでライタの後を追いかけた。

第1話【セントリアの少女】

ライタと別れたメアリーは、家の前に立っていた

「5時5分・・・お父様、怒ってるかしら」

少し不安になりながら家の中に入ると、メアリーの父親である『ジョン・リアンス』が玄関に立っていた

「た、ただいま、お父様」

メアリーが家に帰った瞬間、ジョンは鬼のような顔で娘を睨みつけた

「メアリー！こんな時間まで何をしていた？門限は5時だといつただろう!？」

ジョンに怒鳴られ、メアリーはビクツと肩を震わせた

「ごめんなさい、お父様!..!」

怯えながら必死に謝る娘を見降ろし、ジョンは鼻で笑う

「遅くなった原因はあのライタやらというガキのせいか」

「ち、違うわ！ライタは関係ない、私が本に夢中になっていてそれで・・・」

「あんな炭鉱で働いているような貧乏人なんぞ庇わなくていい！」

メアリーの弁解を遮りジョンは続ける

「友達を選べ！お前は『リアンス』家の長女なんだ、自分の立場をわきまえる！！」

『リアンス家の長女』

聞きあきる程いわれてきた言葉・・・

・リアンス家はセントリアの中で1番の大富豪で、私はそのひとり娘として生まれ、幼い頃からその肩書によっていつもまわりから一目置かれていた・・・

『ねえ、ドッチボールしようよ』

『いいね、やるうー!』

『あの・・・わ、私も一緒に』

『え・・・メアリー様も?』

『うん、駄目・・・かな?』

だから小さい頃はいつも外で楽しそうに遊んでいる同級生が羨ましくて、ずっと部屋の窓から眺めていた

『いいな、凄く楽しそう』

そうしているうちに私も皆のように外で遊んでみたくて、一度だけ屋敷をとびだしたことがあった

『メアリー様アウト、外野行き決定!』

『あはは、当たっちゃった』

普通の子供のように遊び、友達が出来た・・・それだけで十分だったのに・・・

『君達、私の娘にボールをぶつけてただで済むと思っているのか!』
『?』

『お父様!?!』

私はただ普通の子供のように遊んだり皆と友達になりたかった・
ただ、それだけなのに・・・

『やめて、お父様！皆で遊んでただけよ！！』

『お前は黙ってる、この件に関しては君達の両親に報告させて貰う
！今後一切私の娘に関わらないでくれ！！』

「リアンス家の長女」というせいで皆が私を特別扱いし、避けるよ
うになり始めたのはこの時からだ

けれど、皆が変わっていく中、ライタだけはリアンス家の肩書や、
お父様のことを知っても、今までと変わりなく私と接してくれた。

『友達は選べ、自分の立場をわきまえる!』

その言葉を聞き、メアリーは昔の出来事を思い出した

その上、ライタを侮辱するような父親への言い方に腹を立てたメアリーは、ぐっと唇を噛みしめた

(私が何をいってもお父様は聞こうともしない・・・わかっていても、たったひとりの大切な友人を侮辱されたことが悔しい!!)

メアリーはぎゅっと拳を握りしめ「私が誰と仲良くしようと自分の勝手でしょ!?!ライタのことを悪く言わないで!!!」と叫ぶと父親の横を通り過ぎる

「待つんだメアリー!まだ話は終わってないぞ!!!」

(話って何よ、お父様が一方的に自分の意見を押し通そうとしている

だけじゃない！！）

気が付くとメアリーは父親の前から逃げ出して、自分の部屋に引きこもっていた

「お母様…」

メアリーはベッドへダイブすると、側にあつたクッションに顔を埋めた

「会いたいよ、何処にいるの？」

消え入りそうな声で囁いていると

ドンドンッ

と乱暴に部屋の扉が叩かれた

「メアリー、ここを開けなさい！！」

「……………」

部屋の外から聞こえた父親の声にメアリーは竦み上がった

「部屋にいるのはわかってるんだ！開けなさい！！」

「嫌……………お願い、ほっといてよ！！」

執拗に部屋の扉を叩く音にメアリーは頭痛がした

「そついう訳にはいかん、早く開けなさい！！」

ド
ン
ド
ン
ド
ン
ッ

「これ以上何を話させていうの！？お願いだから私のことはほっといてよ……………」

ド
ン
ド
ン
ド
ン
ッ

「お前の話など、どうでもいい！私の話を聞くんた！！」

ドンドンドンドンドンッ

「もう嫌…ひとりにさせて」

メアリーは両手を耳にあてると、ふとんの中に潜った

(これ以上お父様の声なんて聞きたくない、怖いよ…)

いつからお父様はこんな風になってしまったのだろう

12年前はお母様がいて、お父様も優しくて、凄く幸せだったはずなのに

あの事件…お母様が行方不明になって以来、お父様は変わってしまった

(きっとお母様がいなくなって気が動転してるのね、しばらくして落ち着いたら又、優しいお父様に戻ってくれるかもしれない)

そう思っていたが、日が経つにつれ父親からの拘束がきつくなっていき、メアリーは疲れ果てていた

今だ扉を叩き続け、部屋の前で叫ぶ父親の声を遮るようにふとんの中で丸くなると
メアリーは眠りについた

- - - -

その頃、セントリアの図書館の前で、ひとりの少年が管理人に話かけていた

「なあおっさん、ここに『失われた化学技術』に関しての本は置いてないか？」

「悪いね、もうとつくに閉店時間が過ぎてるんだよ。又明日に来てくれないかい？」

「明日か…わかったよ、サンキューな」

少年はふうつとため息をはくと、近くのベンチに腰かけた

(この街も、手がかりは無しか…あと、調べてない所は…)

少年は顔を上げると、そこにはとてつもなく大きな屋敷があった

(あとは、あの屋敷だけだ……玄関前に警備をつけている事態が怪しい)

少年はじつと屋敷を見ていると、警備の男のうちのひとりが近づいてきた

「さつきから屋敷を見ているようだが何か用か？」

「いや別に、ただ大きな屋敷だと思ってね…つい見ちまった」

少年は愛想笑いを浮かべると、屋敷を指さした

「なあ、あの屋敷には誰が住んでいるんだ？」

「お前、知らないのか？まあ、この街の人間ではないのなら仕方が

ないか……」

警備の男はため息をはくと、面倒くさそうに答えてくれた

「あれは、リアンス様の屋敷だ……見ての通りこの街のお偉方が住んでる所だよ。」

「リアンス……どっかで聞いたような名前だな」

「何か言ったか？」

「いや、何も！」

少年はちらりと屋敷を見ると、警備の男は言った

「俺も仕事に戻るが、又あんなに見てると怪しまれるぞ……気をつけろよ」

「おう、忠告有り難く受け取っとくぜ」

少年はひらひらと手を振り警備の男を見送った後、ちらりと屋敷を盗み見た

(なるほどな、ここがリアンスの屋敷か……)

少年はふと、屋敷の2階の窓が開きっぱなしなのを見て、ふっと笑う

(警備をつけてる癖に無用心だな…これなら簡単に忍び込めそうだぜ)

(リアンスの屋敷、ここならあれの手掛かりになるものが見つかるかもしれねーな…悪いが少し調べさせて貰うぜ)

こうして俺はあの屋敷に忍び込む事を決意したが、まさかその行動があ的事件に巻き込まれ俺の運命や人生を大きく変えることになるなんて、夢にも思っていなかった

第1話

セントリアの少女（後書き）

こんにちはカノンです。昔からいろんな想像にふけるのが好きで、それを形にしたいと思い

「人生初の小説創り」にチャレンジしてみました

国語が苦手で文章が変かもしれませんが、又アドバイスや感想などを頂けると凄く嬉しいです！泣いて喜びます！！ここまで読んでくれた読者様！本当にありがとうございます！！

第2話

真夜中の出会い（前編）

「ん……」

真夜中、喉が渴き目を覚ましたメアリーは小さく欠伸をする

「私、あれから寝てしまったんだ」

時計を見ると3時過ぎ……

（この時間ならお父様も寝ているはず）

メアリーはベッドの傍に置いていた懐中電灯を持つと、台所へと向かった。

第2話『真夜中の出会い（前編）』

（うつ、自分の家だけど夜はこわいなあ……）

だからといって真夜中に電気をつけると使用人だけでない、お父様

も起きてしまっただろう
私にとってそれは避けたい状況だった。

幸いトイレは自分の部屋にあるものの、台所にいくまではかなりの
距離があつた。

廊下を懐中電灯の光で照らしてみるが、長い廊下の為暗くて先が見
えないほど真つ暗な闇が続いている

(やっぱり戻ろう・・・朝まで我慢すれば済む話だし)

先が見えないことに恐怖を感じたメアリーは、部屋へ戻ろうと振り
返ると・・・

「何をしている」

「・・・ひっ」

突然頭上から男の声が聞こえ、メアリーは小さく悲鳴をあげた

「とつくに消灯時間はすぎて・・・!!あなたはメアリー様？」

「・・・え」

名前を呼ばれ、おそるおそるその男の顔を光で照らしてみると、何
故か帝国軍人である【イオス】さんが光をつけて眩しそうに立っ
ていた

「こんな時間まで起きていたのですか・・・」

「イ、イオスさん」

何で軍人の人がここに？

そう訪ねたかったが、正直私はイオスさんが苦手だった

初めてイオスさんを見たときは端正な顔をしているから見とれてしまったけれど、それと同時に怖いと感じた

黒が混ざったような青い髪に、冷たい光の放つ青い瞳が印象的で、感情を表に出さず常に無表情

それが私から見たイオスさんの印象である

「遅くまで起きていると、リアンス様に叱られますよ。」

「はい……」

メアリーは諦めて部屋へ戻ろうとした時だった

「お待ち下さい」

イオスさんは、私を呼びとめた

「何か用でもあったのですか？」

「えっと・・・」

思いがけずイオスさんに訪ねられて、私は「水を飲みに行きたかった」ことを伝えると納得したように頷いてくれる

「わかりました。それなら私が部屋に飲み物をお持ち致しますので部屋へ戻っていて下さい。」

「あ、ありがとうございます」

思いがけない展開に驚きながらも、私はイオスさんにお礼を言った。

.....

その後、イオスさんが部屋まで送ってくれたおかげで私は安心して暗闇を歩くことができた

（イオスさん、こんな暗い所で仕事してて恐くないのかな）

そんな事を思っているうちに部屋へ着き、扉を開けてくれたイオス

さんにお礼を言う

「では、また後で伺います」

イオスさんがお辞儀をして扉を閉めてくれた瞬間、肩の力が抜ける気がした

（ああ、緊張した・・・でも途中で会ったのがお父様じゃなく、まだイオスさんでよかった）

そう思い、ほっとしてベッドへ腰かけた瞬間

がさっ

「・・・え？」

何かの物音がして、私は（何の音だろう）と思い窓へと近づいた

がさっがさっ

(やっぱり窓の方からだ・・・窓が開いてるから外の音が入ってきたのかしら)

私は窓が開きっぱなしで寝ていたことに気づき、閉めようと近づき手を伸ばした瞬間だった

「「・・・・・・・・・・・・・・・・え」「」

声が重なったと同時に、窓の枠にごつくて骨ばった手がかったと思つと金色の髪にエメラルドグリーンの瞳を持つ少年と目があつて

しまい、私は固まってしまっ

「だ・・・誰!?!」

「やべ、人がいたのかよ!」

少年は驚いたようにそう言って、慌てて下に降りようとしたするが・

「うおっ!」

「あ、危ない!?!」

足を踏み外したのか少年の体が後ろへ傾き、バランスを崩しかけてしまっ

(こんな時間に何で子供が起きてるんだよ!?!くそ、このままじゃ落ちる!!!)

少年は何とかで仰け反った身体を元に戻そうと腹筋を使い、目の前にある窓の枠を再び掴もうと手を伸ばした瞬間・・・

「つかまって!!!」

「・・・!?!」

メアリーは窓から身を乗り出して少年に手を差し出した

少年は目の前に手を差し出され目を丸くしたが、とっさに差し出された手を掴むと後は自分の腹筋で上体を起きあがらせることで何とか下へ落ちずに済んだ

- - - - -

「あ、危なかった・・・いくら俺でも三階から落ちたら怪我する所だったぜ」

少年はほっと息をつくと、目の前でポカンとしている少女を見た

「それにしてもお前、普通助けるか・・・？部屋に忍び込もうとした人間だぞ」

「だって、落ちると思ったから」

少年はあきれたようにため息をはくと、窓に足をかけて部屋の中に入ってきてメアリーを見おろした

「あのな・・・もし俺じゃなかったらお前まで落ちてたかもしれないんだぜ！何を考えているんだ！？」

確かにこの人が腹筋を使って自力で上体を起こしていなければ、男

の人の体重で私も落ちていただろう

メアリーはそのことを考えるとぞっとしてしまう・・・

「ごめんなさい…身体が勝手に動いてしまっただけ」

謝った瞬間、男の人は驚いた顔をして私を見た

「何で謝る必要があるんだよ！？別にお前、悪い事はしてないだろ
……」

少年はあぜんとしながらそう言った時だった

トントントン

「メアリー様、水をお持ち致しました」

イオスさんが来た瞬間男の人は「げ…」っと言った

「悪い、ちよいと隠れさせてくれ」

「あ、ちよつと！」

男の人は勝手にクローゼットを開けると、その中に入って扉を閉める

(隠れられてっっていわれても・・・)

そう思ったが、何故かその人が悪い人ではないような気がしてかくまっってあげることにした

ガチャッ

「……………」

「あ、ありがとうイオスさん…わざわざ持ってきてくれて」

部屋の扉を開け、私はイオスさんから水の入ったグラスを受け取ると、お礼だけいってさっさと扉を閉めようとドアノブに手をかけた

「メアリー様」

「え……………何？」

扉を閉めようとした瞬間に名前を呼ばれ、私はびくりとする

「先程は誰かと話しておられましたか？声が聞こえたような気がしたのですが」

「ぎくっ（まさか、この部屋に人がいることばれてる！？）あの、気のせいだと思いますよ…そもそもこんな夜中に……あっ！」

イオスさんは「失礼します」と言うはずかさと部屋の中へ入ってきて、クローゼットの前に立つ

（やっべー…俺がここにいること、気づいてんのか）

少年はハラハラしながらクローゼットの隙間から様子を伺っていた

「メアリー様…」

「は、はいっ（どっしよっ）」

メアリーと少年が覚悟を決めた時だった

「いくら暑いとはいえ、窓を開けて寝るのは無用心ですよ」

（（え………？））

イオスさんはそういつてクローゼットの横にある窓に手をかけると、静かに窓を閉めた

（な、何だ…窓を閉める為にクローゼットの近くまで来たのか…紛らわしいぜ）

少年はホッと心の中でため息をはくと、再び外の様子を見ることにした

「あ、ありがとうイオスさん」

メアリーはお礼を言うと水を一口飲んでぎこちなく笑う

「……それともう一つ、先程、台所でリアンス様と会ったのですが」

「…え、お父様と？」

まだ起きてたんだお父様

やっぱりイオスさんに行って貰っておいでよかった…

そう思ってホッとした私に、イオスさんは信じられない言葉を口にした

「あなたに水を持っていくついでに伝言を頼まれました」

「な、何…？」

私は嫌な予感がした

けれど、聞いておかないといけない内容のような気がして、私はイオスさんに尋ねる

「二週間後、ホルビー様と貴女のお見合いが決まったそうです…
…明日から花嫁修行の為に訓練をして貰うとリアンス様がおっしゃ

っていました」

「え、ホルビー様ってホルビー・ブリングの事でしょ!？」

メアリーはイオスの話を聞いた瞬間、手に持っていたグラスを落と
してしまう

「何でよりもよってあんな人が……」

メアリーは目眩がした

ホルビー様とは、新帝国の王様の息子で

いつも自分の地位を鼻にかけているような人だ

きつとお父様は、リアンス家をもっと大きくする為にお見合い話を
飲んだのだろう

実は昔、ホルビー様に交際を申し込まれた時があった

その時、丁寧にお断りしたはずなのに……

「ねえイオスさん……そのお見合い話の件、取り消すこと出来ないか
な？」

私は自分の落としたグラスを片づけている、イオスさんをすがる思
いで見つめていたが、イオスさんは坦々とむごい言葉を言い放つ

「リアンス様はホルビー様とお見合いに、深く賛成をしておられます…おそらく取り消すのは無理な話でしょう」

「そんな……」

メアリーは頭を誰かに殴られるような衝撃が走った

心臓がドクンドクンと鳴り響き、身体に冷や汗が走る

「嫌よ！絶対あんな人とお見合いなんてしないんだから！！」

私は思わず苦手な人だということを忘れイオスさんの腕を掴んでしまふ

「メアリー様、落ち着いてください」

「落ち着いてなんていられないわ、冗談じゃない！お見合いなんて嘘よ！花嫁修業という言葉がでた以上、お父様は私をその人と結婚させる気ね！？」

「……………」

そこでイオスさんが黙るということは、おそらくそうなるんだろう

私はその瞬間、自分の人生が終わったような錯覚に陥った

「私はお父様の操り人形でもないし、一族を大きくする道具でもない！」

「メアリー様……」

「もうその話は聞きたくない!!!出て行って下さい!!!」

イオスさんは私に何か言おうと口を動かしたけど、これ以上何も聞きたくなかった

「……………。わかりました、私が預かった伝言は以上です。

」

「……………」

イオスさんは何も悪くないってわかってる。

お父様に伝言を頼まれて、真面目に仕事をしただけなのに…………

八つ当たりをしてしまった

「ごめんなさい……………」

イオスは部屋から出て行く瞬間、消え入りそうな声の謝罪が聞こえたようなきがした

「とりあえず、今日は遅いのでおやすみになってください。失礼しました」

……………

ガチャッ

「……………」

イオスさんが部屋の扉を閉めた瞬間、頬に涙がつつた

（何で私がお父様の勝手にいつも振り回されなければならないの？）

お父様なんて嫌いよ……でも

「う……ひっくっ」

（関係のない人に八つ当たりをして、お父様に何もいえない自分の方がもつと嫌いだ……）

メアリーはベッドの上にあるクッションに顔を埋めると、声を押し殺して泣いた

その時の私は、決められた運命に逆らうことも出来ず、いつもこうして泣いてばかりだった……

クローゼットの中にいる人の存在すら忘れ、私はひたすら泣き続けた

第2話

真夜中の出会い（前編）（後書き）

カノンです。

いまだ（主人公）の名前が出てきません・・・

次の話で名前が明らかになります。

メアリーがなぜ新帝国の王子と結婚したからないのかは、いずれ明らかにするつもりです・・・

ここまで読んで下さり、ありがとうございました！

第3話 真夜中の出会い（後篇）

俺の名前は【テッド】

職業は旅人で、一応この物語の主人公になる人物だ

チャームポイントは愛嬌がある寝癖と、このつぶらな瞳だ

好きな食べ物はハチミツ、そして嫌いなものはスズメバチだ！

なぜハチミツは好きなのにハチは嫌いなんだと聞かれるが、別に深い意味はない

ハチミツが好きでハチは嫌い・・・ただそれだけだ！！

これはそんな俺が18歳の頃、ある目的の為セントリアの大富豪といわれる「リアンス家」に潜入した時の話になる・・・

第3話 『真夜中の出会い（後篇）』

「ひっく…っ、ぐすっ」

（参ったな、このお嬢さん…すっかり俺の存在を忘れてるな）

少年はクローゼットの中で本日数回目のため息をはいた

あのイオスとかいう、見るからにくそ真面目そうな兄ちゃんが出て
いたらすぐにここを出ようと思ってたのに……

何か、今ここから出るのはタイミングが悪いと言っか……

つか、かなり出にくいぞ！この状況！！

少年は、声を押し殺してひとり泣いている少女の様子をしばらく
見ていたが、このままここにいるわけにもいかないので、恐る恐る
クローゼットの扉を開けた

「……………っ！」

メアリーは、少年がクローゼットから出てきて少し驚いたそぶりを
見せると、すぐに手で涙を拭った

(やっぱ、俺がいることを忘れていたのか…ま、あんなだけ衝撃的な
話をされたんだ、仕方ないか)

メアリーは少し気まずそうに目を擦るとを、少年から目をそらした

「ごめんなさい、何だかみっともない所を見せてしまったわね……」

「いや、別に俺は……」

少年は泣き腫らした少女の目を見て、いたたまれない気持ちになる

「それにしてもひでー話だな、好きでもない奴と結婚させれるなんてよ！こんな年頃の女の子に、いきなり結婚を申し込むなんざホルビーとかいうおっさん…野暮にも程があるぜ」

「え、あなたホルビー様を知っているの？」

「ああ、これでも一応旅人でね…ホルビー様とかいう奴の情報も入ってくる訳だ」

「旅人？」

メアリーは目の前の少年をまじまじと見てしまう

昔、色んな世界を旅する本をよんで旅人に憧れた事があった

まさか、本の世界以外で本物に会えるなんて……

「凄い、私一度本物に会ってみたかったの！」

「え……？」

さっきの悲観的な雰囲気はどこに……？

そう思われる程、少女の目の輝きが変わり少年はギョツとした

「小さい頃から旅人に憧れてたんだ！凄いね、ひとりで旅をしてるの？」

「あ、ああ…まあな」

あまりにも少女に感動されて、少し照れてしまいが、途中でハッと我に返る

(そついや俺、この家に不法侵入してるんだった!!)

このお嬢さんと話していると調子狂うぜ……

少年は今だ感動の眼差しでこちらを見ている少女にあきれたように言った

「あんた変わってんな、普通夜中に見知らぬ男が部屋に入ってきたら普通ビビるだろ…」

「え?」

キョトンとする少女を見て少年は脱落した

「(いい所のお嬢さんにしちゃ、ちと危機感がなさすぎる…少し恐がらせてみるか) あんた危機感というものがなのか? ま、あのイオスとか言う奴に俺の居場所を話さないこと事態、無いのかもしれないな」

「…………え?」

少女は突然少年の声と雰囲気が変わったのを感じてギョツとした

「こついう時は普通、助けを呼ぶべきだと思っぜ…不審者なんかと呑気に話している場合じゃないはずだ」

「……はっ」

不審者…

その言葉を聞き、メアリーはハツとした

そうだこの人、普通に会話してたけど
不法侵入者だ！！

でも……

メアリーは少年の目をじっと見た

「くっくっ、このままだとあんた可愛いし誘拐されちまうかもしれ
ないぜ？」

ここまで恐いことを言われて学ばない馬鹿はいないだろう…

さて、この娘さんが助けを呼ぶ前に俺はずらかる事にするか…

何故か当初の目的を忘れ、悪役になりきる（？）馬鹿な少年を見て
メアリーは恐がる所か、とんでもないことをいい放つ

「それなら是非、誘拐して下さいっ！」

「……………は？」

少年は耳を疑い、今言われた言葉を理解しようとした

「お前今、何だった？」

「誘拐してくれと言いました」

「……………はああ？」

少年は思いがけない返答にマヌケな声を出した

「こんな家にいて、ホルビー様と結婚して暗い人生を送る位なら、旅人さんに誘拐されて色んな世界を回ってみたいわ！」

！（これはは世間知らずとかいうレベルじゃねエ、かなりの馬鹿だろ！）

目を輝かして言う少女を見て、俺は目眩がした

こいつ、本気で言ってやがる！目がマジだ！！

「おい、待てよ！お前、知らないお兄さんについていくなと習わなかったのか！？」

「…え？」っと警戒心がない目で見つめられ、俺は参ってしまった

「誘拐されて、暴行されて殺されるかもしれないんだぜ？お前、そのことをわかって言ってるのか！？」

流石にここまで言ったら、馬鹿なお嬢さんでも理解出来るだろう

つか不法侵入者の俺が何やってんだ！？

少年は頭を抱えていた時だった

「確かに、誘拐されたらそんな目に会うかもしれないね……でも」

少女に顔を近づけられ、少年はギョツとした

「あなたはそんな事、しないでしょ？」

「……………な！？」

こいつ、何の根拠があつてそんな風に言えるんだよ

少年は少女に真っ直ぐな瞳で見つめられ、思わずたじろいでしまう

「だって本当に悪い人なら、私が手を貸した時に身を案じて叱ってくれなかったと思うし、知らない人が入ってきた時に助けを呼ぶ事を教えてくれなかったと思うわ」

(「う、このお嬢さん…そういう事に関しては頭がいいんだな」)

少年が変な事で感心していると、メアリーに手を捕まれる

「ということで、まわりくどい言い方は止めて単刀直入に言っわ！
私を旅に連れて行って下さい」

「はあああああっ？」

少年は、自分が不法侵入をしている事を忘れ、屋敷の中で叫んでしまった

これが後に

『光の魔導師』と呼ばれるようになる

メアリー・リアンスとの出会いだっ

第3話

真夜中の出会い（後篇）（後書き）

こんにちは、カノンです！

読んでの通り、主人公のテッドは馬鹿で、ヒロインのメアリーは世間知らずのお嬢様という設定です。

又各キャラクターの設定も載せていきたいと思っています！

それでは今回はこの辺で

後書きまで読んでくださってありがとうございます！

第4話

家出騒動（前編）

「お前、自分が何をいつてるのかわかってんのか!？」

少年は自分の耳を疑い、もう一度メアリーに聞きなおす

「ええ、わかってるつもりよ!大丈夫、あなたの足手まといにはならない程度にはついていけると思うし」

「俺が言いたいの、そういう問題じゃねー!嫁入り前の娘が何寝ぼけた事言ってるんだ、駄目に決まってるんだろ!！」

「な、ちょっと待ちなさいよ!！」

メアリーは少年の両肩をガシツと掴むと、クワツと目を見開いた

「あなた、さっき私を誘拐するとかいったくせにそれはないんじゃないかしら!？」

「……………!？」

少年はメアリーの剣幕に思わずたじろいでしまう

「自分の言った事でしょ、責任を取りなさい!!」

「責任取れっっていわれても…! あれはお前があまりにも危機感がな
いから…」

言い訳する少年を、メアリーはじろりと見た

「まさか、さっきの言葉は本気じゃなかったって事!? 酷い! よく
も私の心をもて遊んでくれたわね!?!」

第三者から見れば痴話喧嘩に聞こえるような発言に、少年はギョッ
とした

第4話『家出騒動（前編）』

「おい、人聞きの悪い事を言うな! 俺がいつお前の心を弄んだって
いうんだ!?!」

「弄んだじゃない！まさかとぼける気！？冗談じゃないわ！」

「だーかーらー」

「だから何！？言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ！！」

このお嬢さん、見た目は大人しそうに見えるのになかなか言っじやねーか

少年は心の中でため息をはくとまっすぐメアリーを見て言った

「とにかく、何を言おうと俺はお前を旅には連れて行く気はねーよ！そんなに行きたきゃ自分で行きな！！」

そう言って少年が窓から出ていこうとした瞬間だった

「待ちなさい！」

「ぐえっ、まだ何かあるのかよッ！？」

再びマフラーを引っ張られ、少年はしぶしぶ振り返る

「それが出来ないから旅人さんに頼んでるんじゃない!」

「ちょ、離せッ!引っ張るなよ!?マジで首が絞まってるって!」

少年は振り払うようにメアリーからマフラーを引きはがすと、ぜえぜえと肩で息をしながら呟いた

「また死ぬかと思ったぜ…とにかく!」

少年は息を整えると、不機嫌そうにメアリーを見た

「何て言おうと俺はお前のような女を連れていくことはねえ、いい加減諦めなッ!」

少し強めの口調で断られ、メアリーは「う……」っとなるが

負けじと少年を睨み返した

「何よ、別にそんな言い方しなくてもいいじゃないっ!私ただ、旅に連れていってと言ってるだけなのに!」

「だから、それが無理だから断ってるんじゃないかねーかよー!!」

「何だよ！やってみなきゃわからないじゃないっ!？」

「やってみなきゃわからないだど？結果は目に見えてると思うがな
」!

「勝手に決めつけないで、私のことをロクに知らない癖に！」

あまりにしつこく食い下がるメアリーに対し、だんだんと腹が立った少年はギロリとメアリーを睨んだ

「いい加減にしるよ…」

「……………!!」

突然少年の声と雰囲気ガラリと変わり、今度はメアリーが驚きで目を見開く番だった

「ひとりでいくのは無理だから旅に連れていけだあ？お前、人任せなのも大概にしろっ！そんな奴と旅をするなんて俺は真っ平ごめんだッ!!」

「…………ッ」

きつめの言葉を言い放った後、少年はメアリーの顔色を見てハツとした

(やべ、俺言い過ぎた?)

黙って下を向く少女を見て、少年は少し反省をしていると、メアリーは蚊が鳴くような声で呟いた

「…あなたの言う通りよ、思い返して見ると、私は今まで人任せで生きていたんだと思う」

さっきまでの勢いは何処へ行ったのか、少女の雰囲気が変わり、少年はギクリとする

「今だってそう…ホルビー様との結婚だって私の問題なのに、あなたまで巻き込もうとしてしまったわね」

「巻き込むつもりだったのかよ…なるほどな、もしお前が家出をしたら親父さんが諦めてくれるかもしれないと思った訳か」

「……………」

黙ってしまつメアリーを見て、少年はため息をはいた

「お前はアホか！？家出をして諦めてくれる程度の話なら、まず家出をする前に親父さんを説得すりゃいいじゃねーか！」

「それが出来たらそうしたいわよ…でも、お父様は今まで私の意見なんて聞いてくれた事ないし」

「じゃあお前は、その親父さんと向き合おうと思った事はねーのかよ？」

「…！」

少年に言われ、メアリーはハツとした

(そついえば私、お父様と向き合う所か逃げてばかりだ…)

「お前は親父さんに嫌だという意志を伝える前に、俺に旅へ連れて

いけと言ったな！それって自分の楽な方に逃げようとしているだけに見える」

「……………」

「そんな真似をする位だ、俺はお前も親父さんと向き合っ
てねーよ
うに思うぜ！だからよ……」

少年は押し黙るメアリーに言葉を選びながら言った

「お前と親父さんの事情なんざ俺には知ったこっちゃねーが、いい機会なのかもしれないぜ！一度腹を割って話をしてみるよ！本当に娘の事を考えてくれてる親なら、少しは考えてくれるかもしれないぜ！……」

「……………考えてくれるかな、私が本気で嫌だといったら」

突然肩をバシンツと叩かれ、メアリーは「痛っ」と言った

「そんなに弱気になってると、伝わるもんも伝わらねーぞ！さっき俺に食ってかかってきたような女だ、お前なら大丈夫だって……！」

この人はお父様のことを知らない

しかも、人の家に勝手に入ってくるような人なのに

何故かこの人が大丈夫だと言って笑ってくれるだけで、本当に勇気が出たような気がした

「旅人さん……」

「あ？」

不思議な人、この人といると普段押し込めていた自分の気持ちが引きだされてしまう

「ありがとう……」

「……………！？」

お礼をいわれ、少年は驚いた顔でメアリーを見た瞬間だった

ドンドンッ

「メアリー、先程部屋から男の声が出たが誰がいるのか!？」

部屋の扉が乱暴に叩かれ、メアリーはギョツとした

「お父様だ!」

「やべ!結構声を出してしまったからな!!!んじゃ、俺行くわ」

「あ……………」

少年が窓に脚をかけた瞬間、メアリーは思わず引き止めてしまった

「待って！最後にあなたの名前を教えて！？」

きつと二度とこの人とは会えないだろう

けど、何故だか最後に旅人さんの事を知りたいと思ってしまった

「最後につて…もう会うこともない奴のことなんて普通聞くか？まさか俺の名前を聞いて、指名手配をする気じゃ……」

「そんなんじゃないわよ！私はただ…あッ！？」

気が付くと、そこには旅人さんがいなくて

私は思わず窓から身を乗り出した

「え……！？」

しかし窓の外を見ても、いつもと変わらぬ風景が広がり、旅人の姿が何処にもなかった

「き、消えたッ!？」

嘘……ここ、3階だよね？

メアリーはボー然としていると、風と共に声が聞こえたような気がした

「俺はテッドだ、頑張れよ、メアリー！」

「テッド…さんっていうんだ、あの人」

メアリーはぼんやりと誰もいない窓を眺めていた

第4話

家出騒動

(前編)

(後書き)

第1章で漢字間違いを発見し、訂正させてもらいました！

なるべく注意をして読み返しをしておりますが、読んでいるうちに、漢字間違えやおかしな点がございましたら、お手数かも知れませんが知らせて頂けると助かります (<|>)

また、シビアな感想も是非お待ちしております!!

最後になりましたが、後書きまで読んでくださりありがとうございます！
ました！

第5話

家出騒動（後編）

定められた運命の中で、私は今まで生きてきた

セントリアで一番の大富豪の娘と、自由に生きる旅人だからこそ全く異なった世界に私は小さな頃から憧れていたのかもしれない

いつかこの家を出て、色々な世界を見ることが夢だった
知らない土地へ行けば『リアンス家』の娘ではなく、一人の【メアリー】として生きていけるはず

そう思ったのに、運命は残酷で……

「ホルビー様とお見合いが二週間後にあります」

家を離れる所か、16歳の誕生日でお見合いし、結婚させられることになってしまう

(何で…私はただ、自由に生きたいだけなのに)

運命から逃げようとする私に旅人は言った

「そんなに結婚が嫌なら家族と話すりゃいいだろうっ!？」

きつとテッドさんじゃなくても、あのやり取りを見た人なら誰だっ
てそう言うだろう

お父様は私の意思とは関係なく、家の都合で物事を決める人だとい
うことはとくに知っていたはずなのに……

何故だかテッドさんに「頑張れよ」と言われただけで、本当に頑張
れるような気がしたの

今ならお父様と話が出るかもしれない…

さっきの事もあって少し恐いけど私、頑張ってみるよ!

ありがとうー!テッドさん

私は覚悟を決めると、部屋の扉の鍵を開けようと近づいた

第5話 『家出騒動（後篇）』

（怖い…）

私はドアノブに手をかけるが、乱暴に扉を叩く音により引き下がってしまいそうになった

（でも開けなくちゃ何も始まらないよね、テッドさん…私、この扉を開けるよ！）

メアリーが覚悟を決めて鍵を開くと、それと同時に扉が開けられた

「メアリー！何かあったのか！？」

お父様は慌てて部屋に入ってくると、ぐるりと回りを見渡した

「何でもないわ、そんなに慌ててどうかしたの？」

しばらく回りを見渡したり、部屋のクローゼットを開けたりしていたが、何も無い事に安心したのかお父様はため息をはいた

「先程、男の奇声がお前の部屋から聞こえたんだ！さっきまで誰かそこにいたのか？」

お父様の鋭いツツコミに私はドキリとしたが、なるべくそれを態度には出さないように、私は冷静に言う

「私の部屋にイオスさん以外は誰も来ていないわ、窓が開いてたから外の音じゃないかしら」

お父様はちらつと窓の方を向くと、納得したようにうなづいた

「なるほどな、紛らわしい！嫁入り前の娘が窓をあけて寝るとは、はしたないぞ！イオスは何をやっているんだ…」

イオスさんの名前が出てきて私は思わずギョツとしてしまう

(窓を開けて寝るのは無用心ですよ)

そうだ、さつきイオスさんがそう言っ閉めてくれたのに、テッドさんが出て行く時に開けたんだ

どうしよう、弁解しなくちゃイオスさんに迷惑がかかってしまう！

「あの、これはイオスさんのせいじゃなくて、私が勝手に又窓を開け…」

「ところで、メアリー」

お父様は最後まで私が話し終わらないうちに、遮るように言葉を続けた

「イオスから聞いたかもしれないが、改めて言うぞ！」

まさかお見合いの話！？
それとも……

私はごくりと唾を飲んで、窓を閉めなおすお父様の言葉を待つ

「再来週にお前とホルビー様とお見合いが決まった、明日からお前を花嫁修行としてルイエナ修道院に行つて貰う」

「お父様、その事で話があるの」

恐る恐る言つと、お父様は眉間にシワを寄せてじつと私を見た

「何だ、何か言いたい事があるのか？」

「うん…」

私はごくりと唾を飲み込むと、お父様の目を見て言った

回りくどい言い方だと絶対に伝わらない、だから単刀直入に言おう！

「ホルビー様とお見合いの件の話…イオスさんから聞いたわ」

「それはちょうどよかった、で…もちろん断ったりしないよな？リアンス家の命運はお前にかかってるんだ」

お父様の鋭い眼光を受けて、思わず「はい」と返事をしてしまいそうになったけど、私は負けじとお父様を見つめ返した

「何だ、その反抗的な目は…？まさか、断る気じゃないだろうな」

「ごめんなさい…」

謝った瞬間お父様の目が見開かれたような気がしたが、私は続ける

「私と彼が結婚をすることで、リアンス家が今よりも大きくなる事はわかってる…今まで私を育ててくれた事にも感謝してるわ」

「だったらなぜ…」

「それでも私はホルビー様と結婚したくない、せめて結婚相手ぐらいは自分で選びたいの！本当にごめんなさい！」

私はお父様に頭を下げた時だった

「小娘の分際で生意気な！！」

バシンッ

「……………ッ!？」

頬に鈍い痛みが走り、私は突然の事に目を見開いた

自分が殴られたことに気づいた時には、お父様に胸倉を捕まれ、地面から足が浮いてしまう

「う、ぐ…くるし…」

「もう一度いってみろ、そんな自分勝手な我が儘が儘が通用すると思ったのか!？」

「う、めんなれ…」

胸倉を捕まれているせいで上手く息が出来ない…

苦しいッ!!

メアリーは意識が朦朧とする中で、もがいていると今度は床に叩きつけられる

「きゃあああッ」

痛いッ!!

こんな目にあう位なら余計なこと、いわなければよかったのかな

そついう考えが一瞬頭を過ぎったが、ここで負けてはいけない!そんな気がした

「ホルビー様は帝国の王子だぞ!リアンス家の未来はお前の返答

にかかっているんだ!!」

まるで自分を道具としてみているようなものの言い方に腹を立てた私は、思わず強気な言葉を口にしてしまう

「何よ！お金に困ってる訳でもない癖に・・・リアンス家の未来？ふざけないで！私はお父様の道具じゃないわ!!」

小さい頃から、お父様のいうことを聞いて生きてきた

でも、お母様が行方不明になった以来、お父様が男手一つで私を育ててくれた事にはいつも感謝していた

だから本当はそんな言葉なんかいいいなくなかったのに

どうしてこんな風にしか私は言えないのだろう…

「く、ハハハッ」

しばらく沈黙が続いたと思うと、お父様の笑い声が部屋に響いた
何故こんな時に笑うことができるのか疑問に思っていると、ジョン
は可笑しそうに笑いながらメアリーに言い放つ

「何を反抗するのかと思えば、道具じゃない・・・か」

「何がおかしいの!？」

ジョンはメアリーを上から見下ろすと、鼻で笑った

「私はお前の父親なんだ、今まで手塩にかけて育てた娘をどう扱おうが私の勝手ではないかっ!」

「……………!？」

その言葉を聞いて、メアリーは少なからずショックを受ける

「そんな…じゃあ、お父様が私を育ててくれた理由って……」

「決まってるだろう、お前をホルビー様と結婚させる為だよ！」

私は思わず、口を手で覆った

「そんな…」

まさかお父様は、その為に私を育てたの！？

昔から嫌がる私をホルビー様の屋敷に連れていき、ブリング様と結婚話をしていたのは覚えてる

その時は、大人の冗談だと思ってた……

まさかその時からもう、私とホルビー様との結婚は決まっていた

なんて

私は衝撃のあまり固まっていたが、お父様に手を捕まれハツとした

「痛い、離してッ!!」

腕が折れそうな程強く捕まれ、あまりの痛さに思わず叫んでしまう

「だがお前は、私の申し出を断った…親不孝な娘だよ、私もあまりこつという真似はしたくなかったのだが……」

「ひっ……」

父親の懐から出てきたものを見て、メアリーは声にならない悲鳴をあげた

「まさか自分の娘にこれを使う日があるとはな…でもお前が悪いんだ、お前が快くホルビー様とのお見合いの申し出を受け入れてさえすれば」

「嫌、止めてッ」

お父様を取り出したのは、赤黒くドロツとした液体の入った注射針

まさか、こんな得体のしれない液体を私にうつ気!?

そう思うとぞつとする…

だが私の嫌な予感が当たり、お父様は私を押さえつけ、注射針を首筋に近づけてきた

「やだ、何よこれ!?!やめて!怖いわッ!?!」

必死に抵抗をしているとお父様の手を弾き、注射針の先から液体が少し零れた

「ひ……………」

零れた液体が手につき、みるみるうちに赤黒い液体が蒸発していくのを見てぞっとしたメアリーは全身に鳥肌がたった

「大丈夫だ、辛いのは数日間だけで、何も怖がることはない……」

「辛いつて何？これは一体何なの！？」

「打てばわかる」

お父様は私の両手首を近くにあってたタオルで拘束すると、注射の針を首筋に近づけた

「嫌あああ！恐いわッ、やめてお父様っ！！」

メアリーは恐怖で顔を歪ませ泣き叫ぶが、ジヨンは嫌がる娘を無視して、首筋に針を近づけていく

「私を信じろ、大人しくさえすれば悪いようにはしない」

「嫌あああッ！！」

首筋に針をあてられた時、一瞬優しかった時のお父様とお母様の姿が頭に浮かんだ

嫌！誰か助けて！！

お母様！！

メアリーは覚悟を決め、ギョツと目を瞑った時だった・・・

パリーーーンッ

突然私の耳に窓が割れるような音が入ってくると同時に、お父様の怒鳴り声が聞こえた

「な、何だ！貴様は！？泥棒か？」

「うおッ！？恐いおっさんだな！！大丈夫か、メアリー？」

「・・・・・・・・え？」

耳元で、なつかしい声がして目を開けると

「テッド・・・さん？」

私の目に映ったのは、輝くような金色の髪にエメラルドグリーンの瞳

嘘・・・何でテッドさんがここに？

「メアリー、その汚らしい男と知り合いか！？」

遠くでお父様の声がして、気がついた！

(顔の距離近ツ・・・！?)

小さい頃、かつこいい男の人にお姫様だっこをしてもらうのが夢だった

それなのにテッドさんは、荷物のように私を担ぎあげると窓に足をかけた

「汚らしくて悪かったな！！ちなみにこいつとはさっき知り合ったばかりだね・・・旅に連れて行けといわれたんだわ、俺」

「……………え？」

何で？さっきどんだけ頼んでも連れて行ってくれなかったのにッ！

メアリーは驚きのあまりに固まってしまいが、ジョンの怒鳴り声によってハツとした

「何だと！？メアリーがお前のような男にそんな事を頼むわけがないだろうー！！」

「あっそ……じゃ、お宅の娘さんに確認を取ったらどうだ？」

テッドさんは軽々と私の体を持ち上げ、お父様と向き合う形にさせられてしまっ

「……………ひっ」

お父様のあまりの形相に私はひるんでいると、お父様は口を開いた

「メアリー、本当なのか？」

鋭い瞳で射抜かれ、私は怯みつつも口を開く

「う、うん……」

「決まりだな……んじゃ、そういうことでおっさん！ホルビーイー様とやらには上手く説明してくれよな！」

テッドさんはひらひらとお父様に手を振ると、私を抱えたままで窓から飛び降りた

「え……ここ、三階ッ！きゃあああああああッ！……」

「うるせえ！黙ってなきや舌噛むぜッ！……」

テッドさんは近くの木の枝に、銀色の糸を絡めボタンを押した瞬間、
ものすごい勢いで木が目の前に迫ってきた

「きゃあああああ、ぶつかるーーーーっ!？」

意識がなくなる前に私が見たものは、金色になびく髪と、目の前に
迫ってくる大きな木だった・・・

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

「よいしょっと」

テッドは見事木に着地をすると、得意げな顔でメアリーを見た

「すげーだろ、この糸！こうやって先についてるボタンをおすとだな、巻きついた方向に行くことが……ってあれ？」

テッドが気がついたときには、メアリーは白目をむいた状態で気絶をしていた

「おい、メアリー？大丈夫か！？しっかりしろ！！」

これが、私の冒険の始まりの日……

私を家から連れ出してくれたのは、白馬に乗った王子様とはかけ離れた存在で

。口が悪く、ぼろぼろの服をきているさすらいの旅人だった……

第5話

家出騒動(後編)(後書き)

自分で書いていながら、酷い・・・
文才が欲しいです(泣)

第6話 始まりの朝

「申し訳ありません、リアンス様……」

「ふん、所詮帝国軍といっても役たたずではないか……!」

「……………」

「屋敷に忍びこんだ化け物と戦っていたとはいえ、何て様だ!? 盾変わりにしかなれなかつた無能な隊長はどこにいる!？」

メアリーがテッドに連れ去られてすぐに、遅くも駆け付けた帝国軍隊長補佐の『フウヤ』は拳を握り締めた

まさか、こんな事になるなんて……

（フウヤ、ここは俺が引き受ける! お前はリアンス様の護衛を頼む）

（はい! …… あ、ジョン様、あまり先にいかれては……）

（五月蠅い、帝国騎士風情が俺に命令するな!）

（ジョン様、敵が……）

(ひ……)

ザシュッ

(……………っ)

(イオス隊長！？大丈夫ですか！？)

(うるたえるな、任務中だ……)

(しかし……)

(お前の仕事はジョン様を無事にメアリー様の部屋に送りどけることだ、早く行け)

(は、はい！立てますか？)

(お前の手を借りなくとも、立てる！)

しかも、この男はイオス隊長に助けられておいて、お礼のひとつを言う所か危なくなったら僕を盾にしようとするし……

(早く目の前のこいつを倒せ、今メアリーの部屋から人の声がした！)

(はい、おそらく男の叫び声ですね……)

(とにかく化け物退治は任せたまぞ！)

(あ…ジョン様)

(先にメアリーの部屋へ行く、いいか！間違えても化け物の話はメアリーに報告しなくていいからなっ！！)

くそ…あの時、化け物と遭遇さえしなければメアリー様が誘拐されずにすんだかもしれないのに

イオス隊長……申し訳ありません

フウヤは悔しさで唇を噛み締めていると、後ろから肩を叩かれた

「待たせたな……」

「イオス隊長、もう起きてても大丈夫ですか!？」

「ああ」

イオスは短く返事をする、ジョンに頭を下げた

「申し訳ありません、この責任は全て私の監督不届きにあります……」

「イ、イオス隊長のせいじゃありません！そもそも僕が………っ
!?」

最後まで言葉を言う前に、イオスの鋭い眼光を受けてフウヤは黙っ
てしまう

「ならば、責任はお前が取って貰うぞイオス!!」

ジョンは窓に指を指すと、イオスに命令を下した

「隊長になったお前に初任務を下す!! 『メアリーを保護しろ!!』
そして………」

ジョンは少し考えるしぐさをした後、イオスの腰にある剣を指さした

「誘拐犯……もしくはお前の邪魔をするものは、全て殺せ!!」

「……………」

「隊長……………」

フウヤはイオスを見上げると、感情が見えない瞳と瞳があいぞつと
した

「……………御意」

「……………ッ」

そういつて、誓約を交わす隊長の横顔をフウヤは悲しそうに見つめ
ていた

第6話 『始まりの朝』

ピチチチッ

「う……………んんっ」

森の中で、自分の顔を照らす光で私は目を覚ます

「あれ、何でこんな所で寝て……ハッ!!」

隣であぐらをかいて寝ているテッドさんを見て、今度こそ私の意識は覚醒した

「そっだ! 3階から飛び降りた後、木にぶつかりそうになって気絶をしたんだ……!!」

メアリーは喜びで両手力いっぱいを上にあげた

「よかったあ、もう死んじゃうのかと思ったよ! すっごく恐かった
く!! 本当に生きててよか……」

「よくなーッ!!」

突然テッドさんが顔をあげ、私はギョツとした

「テ、テッドさん! ごめんなさい、ひょっとして起してしまいました?
した?」

「もともと起きてたから問題はねーよ、そんなことよりも」

じろりとテッドに睨まれ、メアリーは首を傾かせた

「お前のせいで、一睡も出来なかったじゃねーか！マジで昨日の晩は地獄だったぜ……」

「え………?」

何の事？地獄って何！？私が寝ている間に何があったのっ!？

メアリーはじっと、テッドのを見ると

黒ずんで腫れた目に、清々しい朝とは裏腹に、疲れて死にそうな顔をしていた

「全く…自覚がねーのかよ！たちが悪いな、こりゃ」

テッドは「ふああつ」と欠伸をすると、

森の奥へと歩き出した

「ちょっと、何処へいくのっ!？」

メアリーは慌てて、テッドの後を追うと、ぶっきらぼうに言った

「この森を抜けた先に、ある炭鉱が盛んな村で…何ていう名前だったかな…」

「わかった！『ガンジス村』ね！！それなら、こっちの道を真っ直ぐ行った方が近いわよ」

テッドは驚いたようにメアリーを見ると、感心したように言った

「詳しいな、お前の住んでる屋敷からもそんな距離はねーし、よく行くのか？」

「えっと、あまり言ったことはないけど、そこに友達が住んでるの」
「！」

「なるほどな！じゃ、近道の方での案内頼むわ」

テッドは納得したようにうなづくと、メアリーの後を追いかけた

.....

「ねえ、テッドさん」

「何だ？」

道案内を始めて、あれから5分

沈黙に堪えられず、メアリーはテッドに話かけた

「あれだけ私を旅に連れていこうとしなかったのに、どうして心変わりなんてしたの？」

「.....」

テッドさんは考えるように顎に手をあてるしぐさをすると、きっぱりとこういい放った

「そういえば、何でだろうな.....」

「何でだろうって...自分でも解らない訳？」

あきれた人...

さっきまでは、私が何を言っても連れて行ってくれなかったのに
心変わりをした理由すら曖昧だなんて

「それに……」

「え……？」

テッドさんが先程と打って変わったような真剣な表情になり、私は
ドキリとする

「いや、何でもねえ……ま、何だ、一言で言っと成り行きってやつだ
な」

「ふ、ふーん」

何事もなかったように、いつものぼけっとした表情に戻り、私は唾
然とした
何、今の！？

先程の真剣な顔は何処に言ったの？

「おい、自分から聞いといてそっけねー返事だな……」

「そっけないって……どういふ返事を期待してたのよ！それともうひ

とっ、お前に言いたいことが」

メアリーは憎まれ口を叩きながらも、昨日の夜の出来事が頭の中に残っていた

お父様、私の話に全く耳を貸そうともしてくれなかった

テッドさんが助けくれなかったらあのまま私、どうなっていたんだろう

「おい」

そう考えるとぞっとする

「おい、お前人の話…」

それに、昨日のお父様、何だか様子がおかしかった

あの赤い液体は一体何だったのかな

「おい、メアリー！聞いているのか…！」

「え…？」

突然名前を呼ばれ、私はハッとすると

テッドさんは、少しあきれたように言った

「ったく、話の途中でぼけっとしやがって…最後まで人の話を聞け
つての」

「あ、ごめんなさい！で、何の話でしたっけ？」

「あのかな……」

テッドさんはがくつとするけど、再び私に話をしてくれた

「さっき俺が言いたかったことは、名前の事だよ」

「……名前？」

私は首を傾げた

「ああそつだ、お前、俺のこと」さん『づけで呼んでるだろ！」

「うん」

「別に」さん『づけで呼ばなくていいし」テッド『でいいから」

テッドさんはそう言うけど、年上の人を呼び捨てで呼んで大丈夫な
のかな……

そんな考えが頭を過ぎるが、本人が呼び捨てでいって言うてるし

私は好意に甘え、テッドさん、いや…テッドの名を呼んだ

「わかったわ、じゃあこれからはテッドって呼ぶわね！」

「ああ、そっちの方が自然でいい」

そういつて笑うテッドを見て、私もつられて笑顔になる

会って間もない人なのに、何故かこの人の笑顔を見ているとホツとする

本当に不思議な人…

「ほら、ぼーっとするな！ガンジス村まであと少しだろ、行くぞ」

「ちょっと、待ってよ！こっちの道じゃないってば！！」

メアリーは慌てて首のマフラーを掴むと、テッドは「ぐえっ」と苦しそうな声をあげた

「お前、俺の首を締めるの好きだな……何でマフラーを引っ張るんだよ」

「う、ごめんなさい…なんだかつい」

引っ張りやすい位置にあるから……

少し申し訳ない気持ちになり、マフラーから手を離すと、テッドは身を整え咳ばらいをした

「じゃあ、引き続き道案内を頼む」

そういつて隣を歩くテッドを見て私は思う

何でテッドが心変わりをしたのかよくわからないけど

昨日、助けに来てくれたんだよね

まだお礼、言っていないや

「テッド」

「ん？」

振り返るテッドに、メアリーはお礼を言った

「ありがとう…」

テッドは頭を掻くと、ぶっきらぼうに答えた

「別に、礼なんて言わなくていい…行くぞ」

「うん」

この時の私は、テッドの本当の目的を知らず、いつも彼の後を追いかけていた

これは、始まりの朝の出来事でした…

第6話 始まりの朝（後書き）

第一章「セントリアの少女」がおわりました。

ここまで読んでくれてありがとうございます！第二章へと続きます・・・

【第2章 プロローグ】

「ふう…やっと着いた」

「遅い！あまりぼやぼやしてると、置いていくからな」

「待ってよ、テッド」

【ガンジス村】

セントリアから少し東へ行った所にある小さな村で、ライタが住んでいる所だ

（ライタはこんな所から毎日迎えに来てくれていたんだ）

メアリーにとって、ライタが毎日のように迎えに来てくれるそれが日課となり、当たり前だと思っていたので、ライタに対して申し訳ない気持ちになった

「とりあえず、宿を取らなきゃな！場所はわかるか？」

「うん、まかせて！」

後でライタには事情を説明して、お別れの挨拶をしなくちゃ

しばらく会えなくなると思っから…

寂しくなるけど仕方ないよね

メアリーは物思いにふけっていると、テッドから鍵を渡された

「先に部屋に入ってる、俺は飲み物と朝食を買ってくる」

「ありがとう」

私は鍵を受け取ると、テッドにお礼をした

「確か、近くに自販機があったな…！何がいい？」

テッドに言われ、私はハッとする

「あの…お金」

昨日、いきなりだったからお金はおるか、何も持ってきてない

テッドはメアリーの言葉を聞くと、キョトンとした

「お前、変な所で律儀だな！一緒に旅をするんだ、自分の分だけって訳にはいかないだろう」

「でも……」

遠慮をするメアリーを見て、テッドは苦笑した

「金のことなら心配するな、朝から何も食わず飲まずで倒れられた方が迷惑だからな」

「迷惑って……」

迷惑という言葉が私の胸に突き刺さる

確かにそうだ

このまま遠慮して、何も食べなければ余計テッドに迷惑をかけてしまう

そう思った私は、テッドに甘え、奢って貰うことにした

「わかったわー！じゃあパンと飲み物は…甘めのやつを頼んでいいかしら」

「よし、わかった！じゃあ買ってくる」

そう言つてテッドが出ていくのを見送ると、私は椅子に腰かけ、窓の外を眺めた

(今更だけど、テッドは何をしに炭鉱の村へ来たのだろうか…)

私がぼんやりとしている中、村の中で騒ぎが起こっているなんて夢にも思っていなかった

【第2章 人生の選択肢】
第1話 『プロローグ』

「まじかよ…」

朝食を買いに外へ出た俺は、帝国騎士に遭遇し、質問を受けていた

「この娘を捜しているのですが、心あたりはありませんか？」

やべーぞ、この写真…どっからどう見てもメアリーじゃねーか！

この雰囲気からして、メアリーを連れ戻しにきたのか!?

テッドが冷や汗をかいて、固まっていると

後ろからバタバタと騒がしい足音が聞こえた

「イオス隊長、目撃情報が入りました!!」

「!?!」

銀色に輝く髪をなびかせながら、こちらに走ってくる部下に向かってイオスと呼ばれた男はうなづいた

「ご苦労だったな、フウヤ! その場所へ案内しろ」

「はい! あと、もうひとつ報告が……あ!」

「……………?」

フウヤはテッドを見た瞬間、目を見開き声をあげた

「隊長、この男です! こいつがメアリー様を誘拐したんだ」

「なっ……」

フウヤに指を指され、テッドはギョツした

「それは確かなのか？」

イオスにじつと見つめられ、俺は咄嗟に否定をした

「おいおい、そりゃねーだろ……つかいきなり人に指をさした上犯人扱いするなんざ失礼だな、お前……」

「失礼も何も、お前が犯人だろ！イオス隊長、今すぐこいつを……」

「よせ、フウヤ」

今すぐにも、テッドに向かって斬りかかってきそつな勢いの部下に向かってイオスは制止をかけると、フウヤは目を見開いた

「何故ですか！？犯人は目の前にいるのに、このままこうしてる間にもメアリー様は……」

「まだこの男が犯人だと決まった訳じゃない……」

「う……」

フウヤは罰が悪そうに、イオスを見るとじろりとテッドを睨んだ

「しかし隊長、目撃情報でメアリー様と一緒にいた男は金色の髪とエメラルドグリーンの瞳をもった天然パーマの男だと宿主から聞きました」

それ、俺の特徴と全部一致してんじゃねーか！

テッドは冷や汗をかきながら、慌ててフウヤの言葉を遮った

「待てよ、だからって何で俺なんだ！？金髪で緑色の目のやつなんざそこらに沢山いるだろ！？」

「ムキになって否定する事態が怪しいんだよ！それに、僕は金髪で、緑色の目を持った男は貴様が初めてだ！！」

「うるせーよ、白髪！ムキになってんのはお前の方じゃねーか」

「誰が白髪だつー！！」

フウヤが腰に手をかけ、刀を取り出そうとした瞬間だった

「いい加減にしろ……」

地の這うような低い声が聞こえ、フウヤの肩が震えたと同時に、テ
ツドもぞつとする

「イ、イオス隊長……」

フウヤは青い顔をして振り返ると、イオスは静かな声で言い放つ

「私闘をしたいなら帰れ、任務中だ」

「…申し訳ありません」

フウヤは刀から手を離すと、ぐつと拳をにぎり締めた

「実際お前は、この男がメアリー様を誘拐した現場を見てはいない
のだろうか？特徴が一致するからだといって犯人だと決めつけるのは

早いと思うが…」

イオスは言葉の途中でちらりとテッドを見ると

「フウヤ、特徴以外にも情報はないのか？」と言った

「あります、確かりアンス様が犯人の似顔絵を書いて下さりました」
フウヤは懐から紙を取り出し、イオスに差し出す

(似顔絵って…そんなもので犯人が見つかるのかよ！何だか面倒な
ことに巻き込まれる前に、立ち去るか)

「似顔絵…か、とりあえず見せてみる」

イオスはフウヤから紙を受け取り広げた瞬間、目を見開いた

「これは……！」

- - - - -

「何だかやべー事になったな……」

イオスとフウヤという奴らの前から立ち去れたのはいいが

「こうなりゃ、メアリーが見つかるのも時間の問題だな」

村中に張られたメアリー搜索の為の写真を見て、テッドはため息を
はいた

「こうなりゃ、やつらより先に宿に戻らきゃならねーな」

面倒くさそうなことになりそうだぜ

テッドはメアリーのいる宿へ向かって走り出した

(間に合うか、それとも、もう既に……)

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

その頃

自分のまわりでそんなことが起こってるなんて夢にも思ってたなかった私は、椅子に座り呑気にくつろいでいた

「テッド遅いな…お腹すいちゃった」

ひとりで呟いていた時だった

ド
ン
ド
ン
ミ

「…え」

突然扉が乱暴に叩かれ、私はビクリと震えてしまった

ドンドンンッ

「び、びっくりした…テッド、そんなに叩かなくても鍵開いてるわ
「よ」

私は鍵を開いてる事を話した瞬間、乱暴に扉が開かれた

「……………え」

「見つけた！」

ずかずかと中へと入ってくる人物を見て、メアリーは驚きで目を見
開いた

- - - - -

「フウヤ……」

「はい、隊長」

イオスは似顔絵の紙をフウヤの手に渡す

「確かにこの絵を見ると、さっきの男の特徴と一致しているな」

「さっきって……あ！そういうば、あいつ！何処に行きやがったんだ！？」

辺りを見回すフウヤを見て、イオスは心の中でため息をはいた

「慌てなくても先程の男の後をつけるよう、グランに頼んでおいた」

その言葉を聞き、フウヤは目を見開いた

「いつ、そんな事してたのですか？」

「…あの男がここから立ち去る瞬間だ」

ああ、だからあの時紙をみながら一人でぶつぶついつてたんだ

でも、まだひとつ納得が出来ない部分がある

「では何故みすみす、あの男を行かせたのです？隊長も疑っていたなら、あの場でもっと尋問をする必要があったのでは？」

「……………」

確かにフウヤの言うことも一律あった

しかし、犯人が確定しない以上、むやみに取り押さえる訳にもいかない

それに……

「捕らえた所で、あの男が犯人ではなかった場合……どうするつもりだ」

「それは……」

イオスの言葉で口ごもるフウヤにさらに続けた

「あの男が犯人ならいずれ、メアリー様と接触するだろう……」

「あ！」

イオスの言葉でフウヤは声をあげた

「成る程、ここで捕まえるより奴がメアリー様と接触した所を二人
まとめてって作戦ですね？さっすが隊長！考えることが違いますね
！！」

「だから奴が犯人かどうか確定してないと言っただろう……」

イオスはあきれたように心の中のため息をはく

しかし、逃げる瞬間のあの身のこなし……

ただものではない事は確かだ

おそらく……

「そついえば隊長！」

フウヤに声をかけられ、イオスは「何だ」と振り返る

「僕達はあの男を見つけなくても、いいのですか？ グランだけでは不安です」

「ああ、お前は自分の仕事をしろ……グランとは別に宿にも隊員をおくった、時期に連絡がくるはずだ」

「わかりました！」

フウヤは元気よく返事をする、自分の部隊へと戻っていった

「頃合いだな……」

イオスは口元にある無線に向かって話をした

「グラン、聞こえるか？例の男が不審な動きをしたら連絡しろ」

【イ、イオス隊ちよ…すみません、奴の…速過ぎて…見失…】

「…どこへ向かったかわかるか？」

【北の方で見失いました】

「北といえば、炭鉱場と宿しかないな…ご苦労だった！お前は俺と村の入口の警備を頼む」

【はい！】

イオスは無線を切った後、視線を感じハツとする

「お母さん、あの人が何でマントで顔を隠しているの？」

「みこと、見てはいけません！」

「それに、一人でぶつぶつ何か呟いてたよ？」

「関わっては駄目、行くわよ！」

「えー」

「……………」

ガンジス村の入口付近で、自分から逃げるように去っていく親子を見守りながら、立ち尽くすイオスの姿をグランが目撃してしまうのは、数分先のことだった

【第2章 プロローグ】（後書き）

帝国軍人メンバーも実はお気に入りです！

また番外編で【イオスside】とか書きたいなあ・・・（いつか）

第1話 幼なじみ

「見つけた！」

「な、なんで…?」

メアリーは勢いよく扉を開けた人物を見て、目を見開く

「何でライタがここにいるの？」

【第2章】

第1話 『幼なじみ』

イオスは自分よりも一回り体格がある男を見上げ、眉間にしわを寄せた

「グラン、この張り紙をつくったのはお前か？」

イオスやフウヤとは対象に、筋肉質な身体を持つ【グラン】と呼ばれた男は自慢気に言った

「はい、フウヤと一緒に作りました!!」

人選ミスだ……

イオスは目を輝かせて言うグランを見て思った

【グラン】は【フウヤ】の弟で、観察や尾行に対しては天才的だが、兄と同じ天然である

フウヤと同様、銀色の髪に、青い目を輝かせて自分を見る【グラン】に向かって、イオスは残酷な言葉を言い放つ

「今すぐ張り紙を剥がせ」

「な……!?!」

その言葉を聞き、グランは絶望的な顔をした

「隊長酷いです!俺、徹夜でこれをつくったんですよ!?!」

ああ、だからグランの目の下が黒いのか

確かフウヤの目の下も黒かったな

イオスは兄弟の目の下が黒い理由にひとりで納得した後、グランに張り紙を差し出した

「これを見る」

突然剥がした張り紙を渡されグランは首を傾げた

「確かこの部分は俺が担当しました、ここがどうかしましたか？」

「ここに、メアリー様の本名が載っている」

イオスが指した所に【メアリー・リアンス】と記されている

何故それがいけないのか、グランは首を傾げた

「リアンス家は、セントリアの大富豪…その娘が誘拐されたと世間に知られては、問題になる…もう遅いが…」

村の人が張り紙を見てひそひそと話をしているのに気づき、グラン

はハツとする

「それに大富豪の娘なら、狙われる可能性もある…我々の任務はメアリー様の保護だ、ゆめゆめ忘れるな」

「はい、申し訳ありませんでした！」

素直に頭を下げて謝る部下に「終わったことだ」と告げると

張り紙をぐしゃりと丸めた

- - - - -

「くそ、宿の周りが完全に包囲されている…！」

軍人を避けながら宿まで辿りついたテッドは、宿を取り巻く軍人を見て舌打ちをした

「こりゃ、メアリーが連れ戻されんのも時間の問題だな」

いつかこうなるとわかっていたし、俺とメアリーは赤の他人だ

（下手をすれば俺まで捕まり牢獄行き、それにあのわがまま娘をそこまでして助ける義理もねーしな）

「悪いがお前の旅はここまでだ、あばよ！」

そう言って去ろうとした瞬間、ふと昨日に見た、殴られて泣き叫んでいるメアリーの姿が頭を過ぎる

（助けてッ!!）

「やめだやめ、俺には関係ねえ!!あれはメアリーの問題だ」

昨日の出来事を頭から打ち消すようにテッドは呟く

(もう、あんな思いをするのはごめんだぜ！あの時、ずるくても賢く生きようと決めたじゃねーか)

テッドはぐっと拳を握りしめると、走って乱れたマフラーを直してその場から立ち去った

- - - - -

「うう…見渡す限り、軍人だらけ！」

メアリーは窓を覗くと、泣きそうな顔をしてライタを見た

「ライタ、一体どうなってるの!？」

ライタから外に張ってある張り紙の事や、村に広まっている話を聞いて私は啞然とした

どうやら私は、誘拐されたという事になっているらしい

(確かに、リアンス家の娘が家出をしたというよりも、誘拐にしておく方が、聞こえがいい……それにしても)

私はちらりと窓を見るが、テッドの姿が見当たらない

おそらくテッドは軍人を見て逃げたのだろう

その事に対しメアリーはホッとした気持ちになる

あのままテッドが宿にいれば、確実に彼は捕まっていた

(よかった、これ以上テッドに迷惑をかけずにすんで)

後は私が自分から出ていけばいい話だ

「ライタ、仕事の途中なのに来てくれてありがとう！私のことは大丈夫だから、早くあなたもここから離れて！犯人だと間違われるわ」

張り紙を見た後、メアリーが宿にいと噂で聞いてここまで来てくれたらしい

テッドに迷惑をかけた上にライタにまで心配をかけてしまった

これ以上、自分のわがままで周りに迷惑をかける訳にはいかない

メアリーが決意をして椅子から立ち上がった時だった

「待てよ」

ライタに声をかけられメアリーは振り返った

「ライタ？」

「戻るつもりか？あの屋敷に」

「うん、こうなることは運命だったんだよ、私が戻らなければ余計

誰かに迷惑をかけ……………」

メアリーの言葉を最後まで待たずに、ライタはメアリーの腕を掴むとじつと顔を覗きこんだ

「真っ青な顔しやがって…そんな状態のお前を一人置いて逃げれるかよ！腕だつて震えてるじゃねーか！！」

「ライタツ、痛いよ！」

ぐつと腕を強く捕まれメアリーは顔を歪めると、ライタは慌てて腕を離す

そして、一瞬ばつの悪そうな顔を見ると「悪い」と言った

「ううん、いいの…気にしないで」

昔からライタはそうだった

不器用で荒々しくて、恐い印象を持たれがちだったけど、本当は人の気持ちには人一倍敏感で優しい人だった

お父様はライタを悪く言うけど、私はそんなライタが大好きだった

お見合いが成立すると、おそらくライタとは会えなくなるだろう
お父様が許してくれる訳がない

「ありがとうライタ、でも私…行かなくちゃ」

私はライタに背を向けると、急ぎ足でドアへと向かった

「……………」

後ろで名前を呼ばれた気がしたが、私は振り返ることが出来なかった

「（泣いては駄目……せめて最後までいい笑顔でさよならをしたい）
…ごめんねライタ、本当にありがとう！こんな私なんかと友達にな
つてくれて」

そう言って立ち去ろうとしてドアノブに手をかけた瞬間
再び声をかけられ、私は一瞬立ち止まる

「いいのかよ、お前はこれで……」

「うん、もう決まったことだから」

私はライタの顔が見れなかった

本当はいいはずがない、でもリアンス家に生まれてきた以上……
お父様の娘である私にはどうしようもできないこと

「本当に、これでお前はいいのかよ！？こんなに顔が腫れるまで殴られて、したくもないお見合いをさせられて……」

「ライタ……」

ライタに、昨日の夜の出来事を話した時、自分の事のように怒ってくれて嬉しかった

でもこれ以上この場にいるとライタの優しさが余計に辛くなる

「ふざけるな、メアリーは道具なんかじゃねえ！自分の娘を道具として見ている親父の所に帰って、お前は幸せなのかよ!？」

「それは……………」

口ごもる私に腹を立てたのか、ライタは私の肩を後ろから掴んだ

「メアリーがお見合いをして幸せになれるのなら俺は何もいわねーよー!」

ライタは鞆から、仕事着とマスクを取り出すとメアリーの正面へ回った

「俺に考えがある！ほぼ賭けに近いがな……………」

「……………?」

メアリーは仕事着とライタを交互に見て首を傾げた

「このまま屋敷に戻るか戻らないかは、メアリーの人生だ…お前が

選べ」

ライタは立ちふさいでいた道を開けると、最後に付け足した

「自分のしたいようにすればいい……どっちを取るにしろ、俺はお前の味方だ！」

「……………っ」

メアリーは顔をあげライタの顔を見た瞬間、今まで我慢していた分の涙が込み上げてきた

「お、おいつ！？」

自分の顔を見て泣いたメアリーを見てライタはぎょっとすると、消え入りそうなメアリーの声が確かに耳に届いた

「ライタ、私は……………」

-
-
-
-
-
-

「フウヤ先輩、そろそろ突入した方がよろしいのでは？誰も出てきませんし、もしかすると逃げたのかも……」

フウヤは少し考える仕種をすると

「確かこの宿は裏口もないし出てくるとすれば正面しかない、確か宿主はメアリー様の写真を見て我々に知らせてくれたのだな？」

「はい、確かにこの写真のおなごだとおっしゃってました」

フウヤは部下から写真を受け取ると、ため息をはく

「やれやれ、人騒がせなお嬢さんだ…これでは、らちがあかないな」

フウヤは片手をあげると、周りのものに指示を出した

「突撃だ、この写真の方を保護しろ！犯人探しはその後だ」

フウヤの掛け声と共に、宿の中へと軍人の群れが入っていった

確か宿主殿の話では、客はメアリー様達だけだといっていた

思ったより早くにこの事件が片付きそうだ

フウヤは口元に笑みを浮かべると、イオスに連絡を取る

「隊長、今宿の中へ突撃しました！」

【ご苦労だった、フウヤ！しばらくしたら俺もそちらへ向かう、それまで待機をしている】

「はい！」

フウヤは返事をした後、無線を切り、自分も宿の中へと入っていった

【次回予告】語り：メアリー

今まで私は、お父様のひくレールの中で生きていた
このまま屋敷に戻っても、お父様から逃げ続けても
私に待ち受ける運命は残酷なもの……

だから後悔しない道を選びたい！

「ごめんなさい……やっぱり私は……」

第2話 『人生の選択肢』

これからも、人生で重要な選択肢があるだろう

その時も、後悔をしない道を歩き続けたい……

第1話 幼なじみ（後書き）

イオスを書くのが最近面白いです（笑）

第2話 人生の選択肢（前編）

「それが、お前の答えか？」

「……………」

返事はしなかったが、メアリーは確かにうなづく

「お前が選んだ道だ、止めはしない……」

ライタはぐしゃりとメアリーの頭を撫でると、ちらりと窓を覗いた

「じきに奴らがここへ乗り込んでくるが、覚悟は出来てるか？」

「うん」

「よし……」

今度は確かに返事が聞こえ、ライタはにっと笑う

「それじゃ、行くぞ！」

第2話

【人生の選択肢（前編）】

「だから、さっきから知らねえっていつてるじゃねーか！」

ライタが目の前にいる軍人を睨みつけると、その眼力で2・3人の隊士が怯んでしまう

「しかし宿主は今日の客は一組だけだと……」

「それがどーした？俺がそのメアリー様とでもいいてーのか？」

「どう考えたかってあんたではないだろ！？どっちかっていうと犯人寄りの顔してるじゃねーか！？それよりそっちの顔を隠してるあんた、マスクを取ってくれないか？」

「やめろ！」

ライタはマスクを取ろうとする隊士の手首を掴むと、ドスの効かせた声で言った

「こいつ、重度の花粉症なんだよ！それに、犯人みてーな顔だつて失礼だな！お前もそう思うだろ！？」

突然自分に話が降られ、メアリーは驚きながらもこくこくとうなづいた

（だからあの時、作業着とマスクに着替えるっていったのね……）

こんなんで大丈夫かしら？

ライタには悪いけど、私はハラハラしていると

「何事だ」

「あ、フウヤ先輩」

とフウヤと呼ばれた男が、隊員の中をを割り込むようにしてライタ達に近づくとメアリーはギクリとした

どうしよう、フウヤさんがきてしまった！この人感が鋭いし、ごまかしきれないかも・・・

メアリーはちらりとライタを見るが、彼は顔色ひとつ変えずにフウヤを正面から見た

「あんたが、この軍団の支配者か？」

(支配者って……)

メアリーは心の中でつつこんでいると、フウヤは小さくうなづき自己紹介をする

「はい、私は帝国軍団特攻部隊副隊長の、【フウヤ・リバルダ】と申しま……」

「名前まで聞いてねーよ」

最後まで自己紹介をさせて貰えなかったのが気に入らなかつたのか、フウヤは一瞬ムツとした表情になるが、すぐにいつものポーカーフェイスに戻ると周りの隊士をちらりと見渡した

「ところで、メアリー様は見つかったのか？」

「それが……」

隊士はちらりと私達の方を見ると、フウヤさんは「なるほどな」といって更にこっちへ近づいてきた

「すまないがあなた達に何個か質問させて欲しい、時間を頂けないだろうか！」

「……………」

よくそんな嘘が瞬時に思いつくわね……

メアリーは関心していると、フウヤは驚いた顔をしてライタを見た
「花粉症で人は死ぬものなのか？だとすると僕は危うく人を殺しかけたのでは……」

この人、本気で信じてる……

あと一息だと思ったライタは深刻な顔をしてフウヤを見た

「だからマスクの件に関しては勘弁してやってくれ、こいつも好きでこんなものを付けてる訳じゃねーんだ」

「…そうか」

フウヤは罰の悪そうに私を見ると「済まなかった」と言った

「……………」

声を出したら、私だとバレるかもしれないからこくこくとうなづく

よかった、ライタのおかげで助かった……

メアリーはホッと息をつくが、安心するのはまだ早かった

「では何故、あなたたちはここへ残っていたんだ？無関係のものは外に出るようにと指示を出した筈だ」

(う……………)

確かさつき外から、避難命令をしてたな……

どうしよう、今度ばかりはさすがにごまかせないんじゃないか……………

「……………」

メアリーは不安になってライタの手を握ると、キツく握り返してくれた

力強いライタの手に、私は少し不安が和らいでいく

「悪い、寝てて気づかなかった!」

「え……………」

まさかの答えに、フウヤ達だけでなく、メアリーまでもがぽかんとする

「なるほどな……………ん?待てよ、確か宿主殿は宿泊客は一組だけだと言っていた」

フウヤはハツとしたような顔を見ると、今度は敵意の含んだ目ですと私達を見てきた

「まさかお前達も、メアリー様と関わっていたのか!??」

「うわ、何だよ!」

突然の敵意に、ライタは驚きつつも

相手の言葉の意図を読みこみ、慌てて反論した

「はあ？何訳のわからねーこと抜かしてやがるんだ！！俺達が何を
したっていうんだよ！！」

いや…私達、嘘ついてるじゃない

フウヤは片腕をあげると、いっせいに部下達が私たちの周りを囲んだ

「何のつもりだ!？」

ライタが怒鳴るのに対し、フウヤは不敵に笑い手を差し出した

「悪いが我々と共に来てもらおう、もし君達がメアリー様と無関係な
らばすぐに釈放してやるよ」

「な……」

フウヤの言葉に私たちは啞然とする

(これってかなりまずい状態なんじゃ……)

「俺たちをどうするつもりだ!？」

ライタは、メアリーを自分の後ろに隠すと目の前のフウヤを睨みつける

「安心してくれ、君達を隊長の元へ連れていくだけだ・・・悪いがもう少し我々に付き合ってもらおう」

(まずいことになってしまった！)

ライタはちらりとメアリーを見ると、青い顔をして目に涙をためながらわなわたと震えていた

くそ・・・こいつら、隙がねえ！このままだどこいつがメアリーだということがバレちまう！！

ライタは、ぐっとメアリーの手を握ると、周りにいる軍人の数を数えた

(8、9・・・最低でも10人以上はいやがる・・・)

相手の数が5、6人なら俺が注意を引きつけている間にメアリーだけでも逃がすことができただろう
しかし・・・

(さすがの俺でも、10人以上の相手はきついか)

ライタは、拳を握りしめると喧嘩の構えをとる

「俺は今からひと暴れするからよ、お前は隙を見て安全な所へ逃げろ」

「……え」

ライタの言葉にメアリーが驚いて声をあげた瞬間、フウヤがピクリと反応する

「この声は、メアリー様？」

(はッ！)

メアリーはハッとしてマスクごしに口を押さえたが、時はもうすでに遅し、フウヤが疾風のごとくこちらにかけ寄ってきて、マスクを外そうと腕を掴んできた

「いやあ、離して!!」

「(いつの間に!?)おい、こいつを離せよ!!」

ライタはメアリーの腕を掴んでいるフウヤに殴りかかるうとするが、彼が指を鳴らした瞬間、ライタは3人がかりで取り押さえられた

「くそ、離せ!!--」

あっという間に事態は悪い方向へすすみ、メアリーはあっけなくフウヤによってマスクを取られてしまう

「いやああああああ」

「やはりメアリー様だったのですね。さあ帰りましょう、ジョン様がお待ちです」

メアリーは手を振り払おうと暴れるが、軍人である彼の前では無力に等しいとも簡単に壁に縫いとめられてしまう

「あまり暴れないで下さい」

フウヤが耳もとでなにかを呟いた瞬間、メアリーは脚の力が抜けがくつとフウヤの腕の中へと崩れ落ちてしまった

「メアリー! 貴様、メアリーに何をした!？」

「静かにしろ、この!!--」

「ぐああああッ」

腕を捻られ、ライタは顔を歪ませつつもフウヤを睨む

「ライタ！」

メアリーはフウヤの腕から逃れようとするが、体に力が入らず声を出すのが精一杯だった

その様子を見ていたフウヤは呆れたようにいう

「無駄ですよ、暴れられてはかなわないので呪式をかけさせて貰いました。しばらく動く事は不可能です」

「そんな……」

その言葉を聞いて顔面蒼白にさせるメアリーを担ぎ上げると、今度はライタの方を見た

「さて……次は、お前の番だ」

フウヤが息を吸い込んだ瞬間、隊士達はあわてて耳を塞ぐ

「後でお前聞きたいことがある……しばらく眠ってもらおう」

「畜生っ！！」

何をするつもりだ！？ライタはギョツと目をつぶる

メアリーが俺の名前を呼んでいるが、だんだんと遠くに感じる

(これが…フウヤとやらの、能力……か)

フウヤの声を聴いてはいけない

しかし、両腕を抑えつけられている為、耳すらふさげない

そういえば、俺を抑え付けてる奴らの拘束が解けている気が…

眠たい頭で、ライタは必死に考える

(この方法を切り抜ける方法はねーのか！？このままだとメアリーはまたあの家に連れ戻されちまう……)

駄目だ、意識が朦朧としてきた

もう前すら見えやしねえ……

「忍耐強い奴だ…この術にここまで堪えられる人は隊長だけだと思っ
てたのに……」

フウヤは感心したように呟くが、今のライタには何も聞こえてはいなかった

「ライターッ!!」

メアリーは叫ぶが、ライタには声が届かず

意識を手放しかけた瞬間だった……………

「ぐぶぶっ!!」

突然隊員何人かが悲鳴をあげだすと、その場に倒れこんでしまう

「!?!」

その声を聞き、フウヤが慌てて振り返ると

3人程、自分の部下が後ろで気絶をしていた

「何事だ！」

フウヤが振り返った瞬間、呪式が解けたのか、ライタの意識が覚醒する

「何が起こったんだ？それにもう眠くねーぞ」

ライタはメアリーの方を見たが、彼女の方の呪式は解けてないらしい…フウヤに大人しく担がれたままだった

俺の呪式は解けたのに、何でメアリーの方は解けてねーんだよ

ライタはクリアになった頭で考えると、ひとつの仮説が生まれた

（そうか、俺に呪式をかけていた途中だったから効果が切れたのか！）

おそらく、あの時完全に意識を手放していれば、メアリーのよう
に呪式が解けていなかっただろう

「とりあえず何があったかは知らねーが助かったぜー!!」

ライタはフウヤに飛び蹴りをすると、メアリーを担ぎ片腕が無防備
になっているフウヤはバランスを崩す

「うわっ……」

突然の反撃でよろけている隙に、ライタはメアリーを奪い取ると、
一瞬勝ち誇った顔で彼を見下ろした

「今のこいつらは隙だらけだ、逃げるぞー!!」

「え、ライタ?」

ライタは隊士達の間を器用にすり抜けると、メアリーを担いだまま
走り出した

「待てッ…貴様っ!!」

バキイツ

「ぐ……………」

「お、悪いな！手が滑っちまったみたいだ」

「フウヤ先輩！？」

何者かに後ろから殴られ、フウヤは意識を手放すと、周りの部下達は殺気を立てて、剣を引き抜いた

「何者だ！？」

自分達の上司を気絶させたその人物は、面倒くさそつに頭をかいた

「ひいふう、みい…むさい男共ががんくび揃えて何やってんだ？ここは廊下だぜ、通行人の邪魔になるじゃねーか」

「俺達の上司を殴つといて何をいいやがる！？」隊員のうちの一人がそう叫んだ瞬間、少年が振り返ると、全員があつと目を見開いた

「金色の天然パーマに緑色の目の男!？」

「先輩の仇だ、全員かかれえッ!!」

自分に向かって走ってくる隊員を見て、少年はため息をはく

「ち…面倒くせえ」

そうばやいたと同時に、鞘に入れたままの剣を手にとると、ヒュンツと空を切った

「くそ、向こうの階段も駄目か」

逃げる途中、軍隊の人と出くわしそうになった私達は、間一髪で鍵

の開いていた部屋に隠れていた

逃げる途中で、一瞬だけ見えた金色

一瞬テッドかと思ったけど、まさか…ね

「メアリー、まだ脚は動きそうにないか」

気づかうようにベッドへ下ろされ、寝転がっていた私は身体を動かそうと力を入れてみる

「駄目、まだ動かない」

「ち…フウヤとかいう奴、ひでえ事しやがる！痛みはねーのか？」

「うん、全然痛くはないけど身体が重たいかも」

「そうか、ならよかった」

ライタのホツとした顔を見て、メアリーの胸はちくりと痛む

どうして？私に巻き込まれたせいで、沢山酷い目にあったのに……

それなのに何で一言も文句をいわずに、一緒にいてくれるの？

「ライタ……」

「何だよ？」

扉の向こう側の様子を伺うように、耳をすませていたライタは、ちらりと目だけでこちらを見る

きっと彼は優しいから私の側にいてくれているんだ

その優しさに甘えて私は、彼を巻き込んでしまった……

このままだとライタの人生までめちゃくちゃになってしまう

そうなってしまつ位なら私……

「ごめんなさい、やっぱり私……」

.....

「思ったよりてこずったぜ……下つ端だと思ってナメてかかったらひでー目にあつな」

少年は、金色の髪をなびかせながら
無惨にも倒れている隊士達を跨ぐと、剣を腰へと戻した

「ぐ……貴様」

「お、もう起きたのか？安心しな、あなたの部下は誰一人殺しちゃいねーよー！しばらくの間そこで眠って貰うがな」

「お前はさっきの・・・」

目を覚ましたフウヤは起き上がろうとするが、手足に力が入らず、唇を噛みしめた

「やめとけ、しばらくは動けねーよ」

少年はフウヤに背中を向けると、すたすたと歩き始めた

「貴様、何者だ？さっきの逃げ足といい、帝国騎士を相手にこころま
で・・・」

少年は、一瞬ぴたりと足を止めると

「ただのさすらいの旅人だ・・・」と答えた

【次回予告】語り：メアリー

嬉しいときや悲しいとき、一緒にいてくれたライタ・・・
私を外の世界に出してくれたきっかけをくれたテッド・・・
二人には悪いけど、私はこれ以上あなた達に迷惑はかけられない

第3話 【人生の選択肢（後編）】

この選択をしたことに、後悔する日が来るかもしれない・・・

けれど、今は前を見て歩き続けるだけ・・・

第2話 人生の選択肢（前編）（後書き）

花粉症で、亡くなる人は実際にいるみたいです・・・

第3話 人生の選択肢（後編）

「く、こいつら意外に手強かったぜ……」

少年は刀を腰へと戻すと、悪態をついた

（ずるくても賢く生きようと決めたはずなのに……）

どうしても昨日の夜の出来事が頭に焼き付いて離れねえ

本当はあの夜も、さっさと立ち去るつもりだった

・
・
・
・

・あのお嬢さん、ちゃんと親父と向き合えたのだろうか・

そう思って昨日の夜、様子を見に行き俺はあぜんとした

（な、何でこんな事に!?!）

メアリーは親父に殴られ、泣き叫んでいて、あげくの果てには、何かを打たれかけているではないか

あの液体の中身は何かわからなかったが、何故だか嫌な予感がした

(くそ……)

あれを打たれるとまずい

何故だかわからないが、俺の本能がそれを告げている

気がつく、俺は親父からメアリーを引きはがしリアンス家のお嬢さんを肩に担いで、窓から飛び降りていた

-
-
-

「一度関わってしまったんだ、途中で自分だけ尻尾を巻いて逃げる訳にはいかねーよな……」

少年は、剣を抜くと再び構えの姿勢をとった

「く、まだいやがるのか……仕方ない」

少年が金色の髪をなびかせ、走り出したと思った瞬間、次々に隊士たちを斬り伏せていく

「とにかく、メアリーを探すのが先だ」

少年は気絶した隊士を跨ぎながら、更に奥へと進んでいった

「悪い姉貴……俺、やっぱり馬鹿なままだ」

去り際に少年の呟いた言葉は、誰の耳にも届くことはなく、風の中へと消えていった

第3話 【人生の選択肢（後編）】

「……………」

イオスは宿に到着すると、必死に何かを探しているフウヤと遭遇する

「く、客がない癖に無駄に広いな、この宿……………おかしいぞ……………確かこっちにいったような」

「何をしている？」

いきなり声を掛けられ、驚いたのか、フウヤの肩は跳ね上がった

「うわ、隊長!？」

「これは一体どういう事だ、説明をして貰おう」

隊長にそう言われ、フウヤはちらりと倒れている隊士に目を向けると、イオスに頭を下げた

「隊長、申し訳ありません！僕達が頼りないばかりに…」

「謝罪はいい、俺は状況を説明しろと言っている」

きっぱりと謝罪の言葉を斬られ、フウヤは言葉を詰まられつつもイオスに状況を報告した

「…成る程、まだ見習いの隊士達とはいえてこざる程の相手か」

「はい、あともうひとつ報告があります」

イオスは黙ってうなづく、フウヤは再び口を開いた

「僕の班を全滅させたのは、先程疑っていたあの金髪の男でした」

「やはりな……」

逃げる時の身のこなしといい、あの男はただ者ではなかった

やはり、フウヤの予想は当たっていた

（もっと奴に注意を払うべきだった）

顎に手を沿え、考えるような仕種をするイオスに向かってフウヤは言った

「ですが好都合な事に、その男もメアリー様もまだ宿の中へいる筈です！ 包囲をするなら今ですよ」

フウヤの意見に対し、イオスは渋い顔をして首を横に振ると淡々とした口調で言い放つ

「気配を探ってみたが、宿から人の気配が感じ取れない……おそらく

逃げたられたのだろう、それに部隊は俺達の班とグラン意外戦闘不能だ」

「……………くっ」

フウヤはぐっと唇を噛み締めると、悔しそうに言った

「やっぱり、僕の思った通り金髪男も関わっていた…あの時やつの邪魔さえ入らなければ…」

「……………」

確かに俺の作戦ミスだ…フウヤの言う通り、あの男をもっと注意する必要があった

荒れるフウヤに対し、イオスは冷静に無線を取り出すと、グランにメールをした

「フウヤ、お前の班は撤退だ…今すぐ本部へ戻り援軍の要請を頼む」

「な……………」

イオスの言葉にフウヤは目を見開くと、慌てて講義する

「隊長！何故です！？まだメアリー様は近くにいるはずですよ！……」
うしている間にも……」

「落ち着いて今の状況を考える、今の状況でやつらと接触をするつもりか」

冷静な言葉に、フウヤはハツとする

そうか、僕の班はほぼ全滅した

金髪並の程のやつが何人も犯人の中にいたとすれば……

フウヤはゾクリとする

それに、あの目つきも口も悪い少年もメアリー様と一緒にいた

下手をすれば犯人は複数かもしれない……

あれほどの力を持つやつが複数もいるのなら、確かに僕の班がつい

ていった所でまた全滅するのがオチだ

フウヤは、ぎゅっと拳を握りしめると

「わかりました…僕達は一旦戻り、本部から援軍を呼んできます！」

と悔しそうに言った

そして、去り際にフウヤは思い出したような顔を見ると、イオスをちらりと見た

「そつえば、何故隊長はあの時現場へ来なかったのですか？」

「……………」

その問いに対し、イオスは難しそうに顔をすると顎に手をあてる

「途中で何かあったのですか？」

「……………」

その言葉にイオスは眉間にシワをよせると、じろりとフウヤを見る

「お前には関係のない事だ、それよりも早く援軍を呼びに行け」

突然強い口調で言われ、フウヤの肩がびくりと跳ね上がった

「は、はいいつ!？」

珍しく感情をあらわにするイオスにフウヤは驚きつつも、ビシッと敬礼のポーズをとると、さっさと自分の部隊に戻って行ってしまった

「言ったな……」

イオスは独り言のように呟くと、自分の率いる部隊へと戻っていった

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「知っての通り、フウヤの班が全滅した！援軍が来るまで俺達がメアリー様の保護にまわる」

「フウヤ副隊長の班が…？」

「嘘だろ……」

イオスの言葉を聞き、隊員達はざわめく

帝国軍の部隊が全滅することは過去に一度しかなかった

確かにフウヤは天然だが戦闘能力は高い

イオスの班の隊員達もそれを知っていた為、全員が驚きを隠せない表情をしていた

「ですが隊長、フウヤ副隊長の隊が抜ければ大幅に戦闘力が低下します！…何か考えがあるのですか？」

隊士の中の一人が質問をすると、イオスはうなづく

「奴らの後をつけるのは、少人数の方が動きが取りやすい…それに」

イオスは顎に手をあてる仕種をすると、難しい顔をして言った

「下手をすれば、犯人は能力者かもしれない」

まだ確定した訳ではないが、イオスの予想が正しければ厄介な任務になる

隊長の言葉に隊士達はざわめき出すが、グランのみは納得したようにうなづいた

「俺もそうなのかもしれないと思いました…」

「何でそう思うのですか？」

隊士に質問をされ、グランはちらりとイオスを見ると、複雑そうな顔をしする

「おかしいと思ってたんですよ、隊長程感の鋭い人が何故あの夜侵入者に気がつかなかったのか……」

その言葉を聞いてイオスも複雑そうに眉間にしわを寄せた

あの夜、確かにメアリー様の部屋から人の声がした

窓が開いていた上、メアリー様以外の気配が全くしなかった。

だから、外の音だと思い俺はあの部屋から立ち去ってしまった。

イオスは、ぐつと拳をにぎりしめる

おそらく誘拐犯の中に、気配を消す能力を持つものがいたとしたなら

……うかつだった

イオスは格蘭に

「確かにそうかもしれん」

とだけ言つと、再び無線を取り出した

「フウヤ、出来れば感知能力のある者も連れてきてほしい…頼める

か？」

【どうでしょう…とりあえず、来て貰えるよう努力します！】

「ああ、なるべく早くきてくれ」

要件のみを伝え、無線を切った後、イオスは再びメアリーの気配を探り出す

「………妙だ」

イオスは目を開けると、独り言のように呟いた

「まだ遠くにいつてないはずだ、しかし」

メアリー様の気配はおるか、金髪の男の気配すら感じない……

「隊長、どうかしましたか？」

「……何でもない、ただの独りごとだ」

俺の予感が正しければ、やっかいな任務になるだろう
事態が悪化する前に早急に片づけなければ！

イオスは右手を握りしめると、隊士達の方を見て言った

「これから何手かに分かれメアリー様を搜索する、見つけたものは
すぐに無線で報告しろ」

「……………はっ」「……………」

イオスの言葉を聞き隊士達は敬礼をすると、それぞれ何手かに散ら
ばっていった

-
-
-
-
-

「ここまでくりゃ、しばらくは大丈夫だろ」

「……………」

ライタはメアリーを下ろすと、ホッと息をつく

(結局…いいそこねてしまった)

あの時、私はライタに伝えたいことがあった。しかし…

.....

(どうした、メアリー？)

(ライタ、ごめんなさい…やっぱり私…)

メアリーは何かを言おうとして口を開けた瞬間、ドアの外から爆発音が聞こえ、ふたりはびくっとする

パリーンッ

・・・みたいな感じで、結局ライターに何もいえないままだった。

宿から出て少し歩いた所にある林の所に私達は身を潜めていると、思い出したようにライターは言う

「…で、お前がさっき言おうとしてたことは？」

突然尋ねられ、心の準備が出来ていなかったせい、私はドキリとするが、大きく息を吸い込むとライターの目を真っ直ぐに見た

「ごめんなさい、私やっぱり屋敷へ戻ろうかと思うの…」

「!?!?」

私の言葉にライターは目を見開く

そうだよね、あんな目にあってまで助けようとしてくれたのに

私、凄く自分勝手だよね

「メアリー」

ライタに呼ばれ、私はびくりと肩を震わせる

ライタ、絶対怒ってるよね…ひよっとして、絶交されるかも

それでも……

「ごめんなさい、自分勝手に…でもこれ以上自分の都合で人を巻き込みたくないの」

「確かに勝手だな…でも、もう遅えよ」

「!?!?」

突然上から声が降ってきて、二人はびくりと身体を震わせる

「誰だ!?!」

ライタは木の上に座り、こちらを監察するようき見る少年を睨みつける

「テ、テッド!?!」

「よう、無事に脱出出来たようだな!」

テッドは木から飛び降りると、ライタとメアリーの間に着地をした

「な、何でここに...?逃げたんじゃ.....」

「ああ、逃げる途中でお前を発見したから声をかけたんだよ」

やっぱり私をおいて逃げたのね.....この人!

メアリーはがくりとしてテッドを見ると、ふと彼の服が朝よりもよれていることに気づく

それだけでない、何箇所か服を斬られたような跡がある

「ねえ、誰かと戦ってたの？」

テッドは、破れた個所を隠すようにして手で抑えると

「お前には関係ねーよ」といってそっぽを向いてしまった

やっぱりあの時に見えた金色の髪は、テッドだったのかな……

そういえば、逃げる時も軍人の人と遭遇しなかった

もしかして、私達が逃げれるように戦ってくれていたのかも……

一瞬そんな考えがよぎるが、メアリーはハツとする

いや…この人に限ってそんなことはないか

多分逃げるときに、慌ててて敵に襲われただけかもしれないし

それに、テッドが戦ってる所なんて想像もつかないしね

メアリーはため息をはいたあとちらりと彼を見ると、なぜかテッドとライタが至近距離で見つめ合っていて、お互いを睨みあっていた

「何だあ？テメーは！さっきからメアリーに馴れ馴れしく話やがって…」

「うわ、顔恐ッ！！お前こそ誰だよ！？」

「…何やってるの？」

睨み合う二人にメアリーは尋ねると、テッドは言った

「おい、」の目つきの悪い奴と知り合いか！？」

目つきが悪いつて……

確かにライタは眼力が鋭い、メアリーはそのことに対しフォローの言葉が浮かばず、オロオロとするばかりだった

テッドとライタの出会い

この頃の運命の歯車はまだ、動き始めたばかりだった

第3話 人生の選択肢（後編）（後書き）

読み返してみると、文がめちゃくちゃ・・・

第4話 彼女の決意

「成る程、メアリーが言ってた友人ってのはお前の事だったんだな
…」

とりあえずお互いの自己紹介を済ませた後、テッドはライタをがん
見をしながら、納得したようにうなづいた

「流石メアリーの友達って感じだな、癖の強そうな奴だぜ！なんか
アクが強いつていうか…何というか…」

「テメエ…俺に喧嘩売ってんのか？コラ」

ライタはピクリと目元を引き攣らせると、テッドにガンをつける

「ライタ、落ち着いて…！」

メアリーは何とかライタを宥めようとするが、次の言葉で、彼の中
の何かがキレることになる

「うわ、いちいち睨むなよ！？おつかねえなあ！五年前の俺だった
ら確実ちびって半泣きになるレベルだぜ、こりゃ…」

「上等だツ！テメー！！あんま舐めた口たたいてるとマジでぶっ殺

すぞー!!」

「ちょ…落ち着いて!!テッドもライタを挑発しないでよ!!」

「挑発?馬鹿言っちゃいけない、こいつが勝手に怒ってるだけだろ」

しれっとライタを挑発するテッドと

怒って、今すぐにでもテッドに攻撃をしかけそうな勢いのライタに、
メアリーはため息をはいた

第4話 【彼女の決意】

「さすらいの旅人…か。メアリー、本当に信用しても大丈夫なんだからっな」

メアリーに宥められ、ようやく落ち着いたライタはテッドをちら見する

「おい、失礼な奴だな…俺が怪しい奴にでも見えるのかよ！」

「メアリーの話によると、お前はメアリーの部屋に忍び込んだそうだな…その時点でかなり怪しいじゃねーか！屋敷に忍び込んで何をするつもりだったんだよ！？」

「そういえば、私もテッドが屋敷に何で忍び込んだのか知らない…」
ライタとメアリーに見つめられ、テッドは「う…」と言葉を詰まらせる

それを見たライタは

「ほら、怪しいじゃねーか！そんなヤローにメアリーをまかせる訳にはいかねーよ」

と言ってテッドを指差した

その言葉を聞いて、テッドは苦笑をするとちらりとメアリーを見る

「お前はそういうが、お嬢さんの方は屋敷に帰りたいみたいだぜ！
あんたにこれ以上迷惑をかけたくないらしいな」

「……………ッ！」

ライタはハツとした顔をしてメアリーを見る

「そうだった！お前が割り込んできたせいですっかり忘れてたぜ」

「……………」

テッドはやれやれというような表情をすると、近くにあった切り株に腰をかける

「今更屋敷に戻ると言い出す程度の気持ちなら、この先の旅でお前がやっていけるとは思えねえ」

容赦ない彼の一言にメアリーの胸がチクリと痛むが、テッドは更に言葉を続けた

「帰りたいのなら今すぐに屋敷まで送ってやる、お前がそれでいいのならな」

「……………」

私はテッドの言葉に返事をせず、下を向いてしまっ

いや、返事をする事が出来なかった

本当は帰りたくない…

でもここで返事をしなければまた一人に迷惑をかけてしまう

下を向いて黙り込むメアリーを見てテッドはため息をはくと、面倒くさそうな顔をした

「お前がそうやって迷えば迷う程、周りに迷惑をかけていることにいい加減気づけよ、お前のうじうじしている態度を見てるといい加減腹が立ってきたぜ…」

「………ッ」

容赦のないテッドの言葉に、辛そうに下唇をぎゅっと噛みしめているメアリーを見て、ライターは二人の間を割って入るようにして目の前の旅人を睨みつけた

「おい、テメー！黙って聞いてりやメアリーに好き放題いやがって！！」

テッドの胸倉を掴み戦闘態勢にはいるライタを見て、メアリーはぎよっとするとあわててライタの腕を掴んだ

「止めてライタ！」

「なんでこんな奴を庇うんだよ！？こいつ、お前のことを…」

掴みかかられたと思えば、今度はメアリーと言い争いをするライタを見てテッドはため息をはく

「おい、いい加減手をはなせよ・・・首しまってんじゃねーか」

テッドはライタの腕を掴み、自分から引き剥がそうとした時だった

「今、向こうメアリー様の声が聞こえなかったか？」

突然向こうからメアリーの名前が聞こえ、テッドとライタの動きがぴたりと止まる

「男の声も聞こえた！もしかすると、金髪の男とフウヤ副隊長が言っていた目つきの悪い小僧も一緒にいるかもしれせん！隊長、どうなさいますか？」

「この林をくまなく捜せ！気配はないが確かにメアリー様の声がした、」

近くの茂みから複数の男の声が聞こえ、メアリーの肩が跳ね上がる
と同時にテッドは舌打ちをする

「やべーな！お前らが大声を出すから居場所がバレちゃったようだ、これじゃあ結界を張っても張らなくても同じだな」

テッドが指を鳴らした瞬間、ライタはハツとしたように言った

「空気が変わった！？お前、まさか結界師……」

「その話は後だ、それよりも」

どんとと茂みをかき分ける音が近づく旅、顔を青くさせるメアリーに向ってテッドは言った

「時期にお迎えがここに来る、この質問が最後だ」

テッドはまっすぐにメアリーを見て、最後の質問をした

「俺たちと共に来るか、それとも……」

「おい、俺たちってどういうことだ？」

テッドとメアリーの間、ライタは割りこむようにして質問する。テッドはため息を吐いた

「お前わかってねーな、帝国に逆らったやつがどうなるか・・・メアリーはともかく、お前はただで村に戻れるとでも思ったのか？」

「「な・・・！？」」

テッドの言葉にメアリーとライタが声をあげた瞬間だった・・・

がさがさ

がさがさッ

「いた、メアリー様だ！金髪の男も、目つきの悪い少年も一緒だ！」

黒い隊服を着た男が自分達の姿を見つけると、声を張り上げた

「げ・・・もつきやがった！メアリー！！」

警戒するようにこちらへ近づいてくる隊士達の前にはばかるようにテッドは立つと、メアリーの名を呼んだ

「さつき、迷惑をかけたくないっていったよなあ！？今更もう遅いんだよッ！お前が屋敷に戻ろうが戻らないが、どっちみち俺達は元の生活には戻れねーことはこれで分かっただろ！？」

テッドの言葉にメアリーはずきりと胸が痛む

「じゅめんなぞ……………」

「謝る位なら今はお前がどうしたいのか言ってみろ！！」

私…？

テッドに言われ、メアリーはどうしようと慌てた様子でライタを見ると、彼はため息をはく

「言っただろ…俺はお前の味方だって！どっちを取っても怒ったりしねーよ」

ライタは苦笑すると、メアリーの頭を撫でた

「俺達のごときは気にせず好きな道を選べばいい…お前はどつた
いんだ？」

「メアリー様を保護しろ、犯人はその後だ！」

帝国騎士が剣を抜き、こちらへとにじり寄ったと思った瞬間

蚊の鳴くような小さな声で、メアリーは呟いた

「…りたくない」

「……？」

何を言ったのか聞き取れず、テッドはメアリーを見た瞬間だった

メアリーは大きく息を吸い込むと、今度はその場にいる全員が聞こえるような大声で叫んだ

「私…本当は帰りたくない！お見合いなんてしたくないし、お父様に振り回される人生なんてごめんだわ！！」

悲痛が混ざったような声でメアリーに叫ばれ、帝国騎士達は驚いたように目を見開く

「お父様に伝えて！私は帰るつもりはないって！お願いだから私のことはほっといてよ！！」

「メアリー」

長年幼なじみをやっているライタだが、初めてみる彼女の姿に驚きつつもいたたまれない気持ちになる

やっぱり俺達に気を使ってまた自分を押し殺そうとしてたんだな…

いたたまれない顔をするライタとは正反対に、テッドは口の端をあげる

「…後悔しねーな？」

先程とは違い、メアリーは大きくうなづく。テッドを見た

「こつなったらもう後には引けないわ！」

「は、なかなか言っじゃねーか！さっきまでの弱気なお嬢さんはどこに言ったんだ？」

テッドの皮肉にメアリーはムカツと腹を立てると口を尖らせる

「弱気で悪かったわね！」

メアリーの目に決意が宿ったのを確認したテッドは腰に手を持っていくと、剣を引き抜いた

「という訳だ、これでわかっただろ？お嬢さんもそう仰ってる訳なんだし早く道を開けるよ」

剣を引き抜くテッドに対し、武器を持っていないライタはメアリーを庇うようにして彼女を自分の後ろへと追いやった瞬間だった・・・

「悪いがその頼みを聞くことは出来ないな・・・」

「!？」

テッドが剣を構えた瞬間、特徴のある低い声が聞こえメアリーの肩が跳ね上がった

「この声は…」

帝国騎士の波をかきわけて一人の男がテッド達の前に姿を現した時、
メアリーは声をあげた

マントで顔を隠していても、私はその人が誰だか一瞬で分かってしまった

「イ、イオスさんっ!？」

その人物は、私のほうを見ると羽織っていたマントを脱ぎ、自分の顔をさらけ出した

「……………」

感情が宿っていないような青い瞳と目があつた瞬間、息を飲むのが自分でもわかつた

そして丁寧に私へお辞儀をした後、イオスさんはテッドを見てすと目を細めた

「…やはりお前が犯人だったのか」

イオスさんはそういつて私達に近づいてくるたびに緊張が走るが、テッドだけはやりと不敵な笑みを浮かべてイオスさんを見ていた

「メアリー様誘拐の容疑者として、お前を連行する」

イオスさんが剣に手をかけたとどろじにテッドも懐に手を入れる

「連行する…か、面白いこと言ってくれるじゃねーか！」

そういつてテッドが懐に手を入れ何かを取り出した瞬間、辺りに鋭い閃光が広がり、その場にいた全員が目を抑え出した

「ぐ、あああつ…目が」

「くそ、前が見えない」

鋭い閃光のせいで次々に隊士達は目を抑えうめき声をあげる中、メアリーは何も見えない目で必死にテッドやライタを探した

（どうしよう…私まで何も見えないよ！二人ともどこにいったの!?!）

そう思って、辺りを彷徨っていた瞬間だった

がしっ

「どこに行こうとしてるんだ！今のうちに早く逃げるぞ！」

暗闇の中で誰かに手を捕まれたと思えば、聞きなれた声がしてメアリーはほっとする

「テッド・・・」

「速く走れ！このままだと、追いつかれるぞ」

「痛えな、あまり強く引っ張んなよ！」

何も見えないが、近くでライタの声がしてメアリーは安心した時だった

「もう追いついているがな・・・」

「きゃあああああああああ」

「なッ!?!」

近くでメアリーの悲鳴と聞き覚えのある声が聞こえテッドはハッとすると、ぐいっその後ろへ引き寄せられる感覚がした

「く・・・」

物凄い力にテッドはメアリーを離しそうになるが、なんとか踏みとどまりゆっくりと振り返った瞬間、彼女の片腕を引っ張る人物を見て驚号する

「嘘だろ・・・あれが効かなかったのかよ」

いや・・・

テッドはじつとイオスを見ると彼が両目を開けていないことに気づく

「お前、目が見えていないのに何故!？」

「簡単なこと・・・お前たちの声をたどってここまで来た、それだけのことだ」

更に強い力でメアリーの腕を引かれ、テッドが反対側の腕を引っ張り返した瞬間メアリーは悲鳴をあげた

「痛いッ!！」

「メアリー!くそ、何が起こっているんだ!？」

メアリーの声を聞き、その声に反応したライタはいらついたように声を荒げた瞬間、イオスはもう片方の手でライタの手首を掴む

「な・・・離せッ!この」

ライタは乱暴にイオスの手を振り払おうとするが、炭鉱少年と軍人との力の差は歴然でびくともしない

今の状況

メアリーとライタの片方の手をテッドが掴み、そして反対側の手をイオスが掴んでいて

いわゆる4人で手を繋いで円が出来ている状態だ

はたから見れば、仲つむまじい状況に見えるが、本人たちは必死で戦っていた

「ええい、離せいオス！！くそ、大人げないぞ！！メアリー！お前も抵抗するんだ！！」

「ええ、わかったわ」

ライタに言われメアリーも手をぶんぶんと振るが、イオスには到底叶わずそうしている内に時間が過ぎていく

(くそ、もうすぐ閃光弾の効力が切れる時間だ！こうなったら……)

テッドは小さく舌打ちをすると、メアリーを掴んでいた方の手を離れた

「きゃあっ!?!」

勿論イオスに引つ張られていたメアリーはバランスを崩し、イオスとぶつかる形になる

「…どういっつもりだ(まさか、自分だけ逃げるっもりか…それとも…)

「ライタ、こいつの手しっかりつかんどけよ…」

「…？おう」

テッドの言葉を聞き、嫌な予感がしたイオスは直ぐさまライタから距離を置こうとするが、時は既に遅し、テッドは術を唱える構えをとっていた

「片手が使えればこっちのmondぜ！」

「……………っ」

目が見えていないイオスは、一瞬何が起こっているか理解が出来なかった

（く、遅かったか）

イオスは慌ててライタの腕を振り解いた瞬間、テッドの一言で術が発動してしまった

「呪縛獄！！」

「……………！！」

辺りに張り詰めたような空気が立ち込めたと思えば、イオスの身体がみるみるうちに重くなるような感覚に襲われる

(く、妙な術を……)

自分の体重を支えることさえ困難になり、自分の体重を剣で支えるようにして立っているのイオスを見て、テッドは驚いたように言った

「驚いた、これをくらって立っていられる奴がいるとは……さすがは伊達に隊長をやってはいねーな」

「……………っ」

イオスは悔しそうに顔を上げた瞬間、閃光弾の効力が消え、メアリー達の視界がクリアになった

「メアリー、ライター！逃げるなら今だ！そいつを振り払って逃げて来い！！」

「う、うん……………」

メアリーは力が入らなくなったイオスの腕を振り払うと、力いっば

いテッドの元へ走った

「……………くっ」

「悪いな、隊長さん」

テッドはパチンと指を慣らすとイオスの身体が崩れ落ち、床に伏せるような形になってしまっ

「……………っ」

それでもかろうじて、片膝をつくようにして立とうとするイオスを見て、テッドの顔は少しずつ青ざめていった

「マジか…これをくらってまだ立てるやつがいるのかよ……………つか普通ありえねえ」

本来なら腕を一本…いや、指を動かすのも困難なはず

それなのに、立ち上がれるだと!?

化け物かよこの男!?

テッドは、ゆっくりと身体を引きずるように近づいてくるイオスに恐怖を覚え、剣を向けるが、それでも彼は止まらず少しずつ近づいてくる

「こいつはやべーわ、この状況で剣を向けられても顔色一つ変えやしねえ」

テッドはライタの肩を掴むと、少し慌てた様子で言った

「おい、村とは反対方向の林の出口ってどこだ？」

「はあ？なんだよ、いきなり……」

テッドの様子にギョツとしつつも、ライタはしぶしぶ南の方角を指さした

「そっちか？よし、走るぞ！……」

「え……あっ、ちょっと」

「うわ、引っ張るなよ」

いきなり腕を引っ張られ、抗議の声をあげる二人を無視してテッド

は南へと走り出した

「は、速いよ！一体どうしたの！？」

テッドに腕を掴まれたまま走るメアリーは、そのスピードで何度も
転びそうになる

しかし、今のテッドにはそんなメアリーを気遣う余裕もなく、林の
中を走り続けた

おそらくあの男は強い…

俺の中の何かがそう告げている

術が解けたら、イオスはすぐ俺とライタに斬りかかってくるだろう

その上、閃光弾がきれたイオスの部下達が応援に来たら俺達は終わ
りだ

テッドは冷や汗をかくと、ちらりと後ろを振り返る

呪縛獄が切れる時間はあと約2分……それまでここから離れなければ

悔しいが今の俺達では、三人が束になってもイオスには敵わねえ

テッドは心中で舌打ちをすると、メアリーとライタの手を引いて南へと走っていった

「くそっ、逃げる事しか出来ねーのかよ！あのイオスとかいうやつ、弱ってんならとどめをさしとけばよかつたんじゃないか？」

隣でライタが悪態をつくのが聞こえ、俺はため息をはく

「お前、過激な奴だな…ま、それが出来れば俺もそうしてたけどな」

「どづいづいと？」

息が耐え耐えになりながらも質問をするメアリーに対し、テッドは
淡々と答えた

「あのままあそこに残れば、イオスの部下達に囲まれてたんだよ…
…そうなりゃ、どう考えたかって人数の少ない俺達が不利になるじ
ゃねーか」

「な、なるほど」

メアリーとライタはそういうことかと納得をすると、テッドはあき
れたような表情をした

「とりあえず今は、やつらと距離を置くことが先決だ！なあ、林を
抜けた所に村や街はあるか？」

「えっと……」

メアリーは少し考えるような仕種をすると、自信なさげに言った

「地図でしか見たことがないのだけど、確か【ウィンディーネ】という名前の街があったわ！

そこなら人も多いし、簡単には見つからないと思う」

「でかした、とりあえずその街を目指すぞ！これからどうするかは、その後だ」

.....

森を抜けた後、テッドはちらりと後ろを振り返ると、ホツとしたように言った

「よし、何とかまけたみたいだ」

テッドが何かを唱え、パチンと指をならすと、ライタはじろりとテッドを見た

「何をしたんだ？」

「何って、俺達の居場所がわからなくなるように結界を張っただけだ！ただ気配を隠すことしか出来ねーからあまり意味はねーことなんだがな」

「そついえば…」

ようやく息が整ったメアリーは不思議そうにテッドを見ると、首を傾げた

「さっきライタ、結界師がどうか言ってたよね！テッドってその、

能力者なの？」

「……………まあな」

テッドの問いを聞いた瞬間、メアリーは目を輝かせると、感嘆の声をあげた

「成る程、だからあの夜イオスさんはテッドに気づかなかったのね！」

納得したようにメアリーがうなづくのに対し、ライタは眉間にシワをよせて、テッドを見た

「だがよ、お前が結界を張った瞬間空気が変わったぜ！隠れたにせよ、それじゃ雰囲気ではれちまうじゃねーか」

「……………え？」

ライタの言葉に首を傾げるメアリーに対し、テッドは驚いた表情をしてライタを見た

「こいつは驚いた……人波外れた六感を持っているやつでも、俺の気配隠しの結界を感じ取り取することは出来ないはずだ……」

「はぁ？何ぶつくさ言ってるんだよ、第六感？何だよそれは！？」

「ま、それはいつか説明するとして……ライタ、ひとつ質問していいか？」

自分の問い掛けを無視した上、逆に質問を返されることに不満を抱いたライタは、返事の代わりに目の前の旅人を睨むが、さほど気にした様子もなくテッドは質問を投げかけてきた

「お前の家族の中で能力者はいんのか？」

「はぁ？」

突然何を質問するかと思えば…

ライタはため息をはくと、ぶっきらぼうに言った

「もの心がついた頃には両親はいかなかった、だからそんなことわかりっこねーよ」

「そうか」

テッドは複雑そうな顔をしてライタを見ると、ライタはムツとした表情になる

「んだよ、そんな顔で見られてもわからねーもんは仕方ないだろ」

こいつも苦労してるんだな

両親のことについては知らないと言われたテッドは、しびしびライタを見るのをやめ、今度はメアリーの方を向く

「じゃあ今度はメアリーに質問だ」

真剣な顔をして言われ、メアリーはドキリとするが、次の一言で彼女はガクリとすることになる

「ウィンディーネまでここからどういけばいいんだ？」

「……………え？」

その言葉を聞き、メアリーとライタはハッとすると、みるみるうちに顔が青くなった

「馬鹿っ！元来た道に戻っでどうするんだよ！？お前、ひよっとして場所がわかってねーのか！？」

ライターに怒鳴られ、テッドはムツとした顔を見ると、一面倒くさそうに答えた

「そつだよ、だからメアリーに今道を聞いたんじゃないか」

「だからって、何で元来た道を歩くんだよ!? 掴まったらどうするんだ!？」

罰が悪そうに頭を掻くテッドを見て、メアリーは少し悪いと思いつつも、自分が思った言葉を口にしてしまう

「ひょっとしてテッド、旅人なのに方向音痴なの？」

「!？」

メアリーの言葉を聞いた瞬間、テッドは冷や汗を垂らす

(やべー、実は俺旅人だけど極度の方向音痴だなんて絶対言えねえ
!!カッ「悪すぎる...」)

テッドは「ほんとわざとらしい咳をすると、メアリーの目をまっすぐ見て言った

「いいかメアリー、俺は方向音痴ではない！この土地は初めてだから少し戸惑っていただけだ」

「戸惑うって…迷ってたじゃねーか、さっき…お前本当に旅人かよ？」

必死になってメアリーに力説をするテッドの姿にあきれつつ、ライタは疑いの目で目の前の男を見た

「何だ、その疑っているような目は！？俺はれっきとした旅人だ！」

「じゃあ今までどうやって旅をしてきたんだよ！？」

「勘だ、勘！長年旅をすれば自然に身につくもんなんだよ！」

ライタとテッドがいい争うのを見て、メアリーはため息をはく

おそらくテッドの張った結界のおかげで、帝国軍は簡単にここまで
は辿り着けないだろう

だが、彼の結界は気配を消す効力しかない訳で、声を聞かれたら居
場所がばれてしまうかもしれない

メアリーはいい争う二人の間に割って入り、慌てて制止をした

「二人とも、声大きい！！私達は追われているのよ、少しは声を
抑えなさい！！」

「わ、悪い……」

メアリーに怒鳴られ、少し戸惑ったように謝るライタとは対象に、
テッドはため息をはく

「お前の怒鳴り声が一番うるせーよ……」

メアリーの一喝でライタは静かになったものの、今度はテッドの一言でかちんときたメアリーがテッドにくっついてかかっていった

「何よ、私だって好きで大声出してんじゃないわよ！そもそもテッドが道もわからない癖に先々行かなければよかつたんじゃない!？」

「……………何だよ、俺が全部悪いみたいな言い方しやがって」

メアリーの言い草に腹を立てたテッドが眉をひそめたのを見て、ライタは呟いた

「俺達よりメアリーの方がうるせーねーか」

それ以前に、無事に俺達はウィンディーネに辿り着けるのだろうか

……

ライタは今だに口論をする二人を見て、この先の旅路の事を考え
ると、疲れたようにため息をはいた

【次回予告】語り：メアリー

海が見える街で、私は一人の少女に出会う

その出会いは偶然か、今はまだわからないけれど

近いうちにまた会える

そんな気がした

明日へと続く物語

【第3章 海が見える街】

誰が敵で、誰が味方かわからないこの世界で

私は裏切りを知ることになる

第4話 彼女の決意（後書き）

新しい章に入ると、なんとなくテンションが上がる自分がいる・・・

【第3章 プロローグ】

あの日、貴方の側にいると誓った

それは遠い日の約束…

第3章【海が見える街】

第1話ープロローグー

くっ、これが限界か…

森の中で少女は木にもたれかかった

このままだとここで野垂れ死ぬか、魔物に殺されるだろう

少女は残りの力をふりしぼって、一歩二歩と歩き出す

諦めては駄目

約束したんだ…

絶対生きる事を諦めない

その為に今、私が今しなければいけない事はただ一つ

少女は杖がわりにして持っていた長い木の枝で、ひゅっと空気を切った

「いい加減に、姿を見せたらどう?…上手く姿を隠せてるつもりでも、バレてるから」

がさつと草を掻き分ける音に少女は身構えた

魔物が、敵か

それとも……

少女は殺気を放つ

どちらにしろ、ただでやられるものか…

もしあいつなら、道連れにしても…

「出てこないなら私からいくよ」

少女は殺気を出しながら身構えていると草むらから何かが飛び出した
てきた

「きゅ…きゅ…」

「……………え」

少女は飛び出してきた生き物をみてぼーぜんとした

何、この生き物…小さくてまるでつぶらな瞳でこちらを見ているけど、これって…

「ま…魔物？」

だけど、この魔物から殺気が感じられない

人を襲うようにも見えないし…敵ではなさそうだ

少女は拍子が抜けたようにその場に座り込む

「まったく、紛らわしい！敵だと思って焦ったじゃないか！」

少女はそう言うと、魔物はびくっと身体を強張らせる

その様子を見た少女は、バツの悪そうな顔をした

「いや、そんな怯えなくても………って私が怒鳴ったからか」

少女は立ち上がると再び木の棒を杖がわりにした

「ごめん、怒鳴って…じゃあ私もういかなきゃ………ッあ!？」

突然襲いかかる身体の痛みで少女はうずくまる

「ッ…」

少女は歯をぎりっと噛みしめた

こんな痛み、あの時の痛みに比べれば…

「なんの…っれしきッ」

少女は立ち上がろうとするが、身体に力が入らず倒れてしまう

こつまで…か

少女は動くことのない身体を動かそうとしたが無駄だった

それにしても全身が痛い

まあ、逃げる時に散々痛めつけられたし当然か

他の仲間は逃げきれたのだろうか…

私のようにこつして死んでいかず、どこかに避難できたのだろうか

まだ気掛かりな事はある

死にたくない…

せめて死ぬ前に、約束を果たしたかった

ごめんなさい……

あれから随分と時間が過ぎた

少女は目を閉じていると、誰かに頭をなでられた

「ん、お前…は」

少女は小さく目を開けると先程の魔物が自分の頭をなでていた

まだいたのか、こいつ…ひょっとして私を心配して…

と思った時だった

「この、魔物め！村にのこのこと入りやがってどこにいきやがったんだ…」

かすかだが、人の声が聞こえた

「あ、あそこにいたぞ…っておい！」

「どうしたんだ、ウィル？」

「あそこに人が倒れてるぜ」

「何？」

「しかもひでーけがだ…ほってたら死ぬな、じいさんどうする？」

少年が少女に駆け寄った時には、すでに少女の意識はなかった

【第3章 プロローグ】（後書き）

カノンです！

最近学校が忙しく、しばらく更新ができませんでしたが、やっと第3章までできました！プロローグで登場した少女は、一体誰なのか！？それは、読んでからのお楽しみです。

ここまで読んで下さりありがとうございます！

第1話 海が見える街

ガンジス村付近にある林を抜け、南へと歩いた所にある街【ウンデイーネ】

水の都と呼ばれたその街を目指し、テッド達は旅をしていた

「おかしいわね、こんなに歩いても着かないなんて…道を間違えたのかしら」

「いや、確かにこっちの方から海の匂いがするんだ！確かその街は海から近いんだろ？もう少し行ってみようぜ」

深く息を吸った後、南を指さすテッドを見て、ライタはあきれたように言った

「メアリー、方向音痴のあいつの事だ、信用してついていたらまた大変な事になるぜ」

ライタの言葉を聞き、テッドはぴくりと目元をひくつかせると、目の前の口が悪い少年をじろりと睨む

「おい、またその話を持ち出すつもりか！？そもそもお前は、何でいちいち俺に突っ掛かってくるんだよ！？」

ギヤーギヤーといい争う二人を止めるのにも疲れたメアリーは、ため息をはいてふと下を見ると、足の下に、貝殻が落ちていた

「ねえ、貝が落ちてるわ！もしかするとここから海が近いのかもしれないわよ」

メアリーは足元の貝殻を拾い二人に見せると、テッドは感嘆の声をあげた

「お！でかしたメアリー！ほれ見ろライタ、俺の言う通りだったじやねーか」

完全にどや顔をする旅人にライタは少しいらっとするが、確かに彼は鼻がいいらしい

「さあ、こつちだ」

完全に先頭をきって、誇らしげに歩くテッドを指さすと、ライタは小声で言った

「なあ、テッドって能力者だったり方向音痴だったり、鼻がよかつたり……凄い奴なのか、馬鹿なのかわからねーよな……」

「しっ！聞こえるわよ!？」

メアリーは慌ててライタを制止すると、テッドはきよとんとした顔で振り返る

「お前ら、何ぼーとつっ立ってるんだ…早く来ないとおいていくぞ」

そういつて、再び背を向け歩いていくテッドを見て、メアリーは息をついた

(鼻はいいけど、耳の方はあまりよくなってよかった…聞こえてたらまた喧嘩になる所だったわね)

そんなメアリーの心情なんて知らないテッドは、息をつく彼女を見て

(帝国軍の奴らも追ってこねーみたいだし、ほっとしてるんだな)

とそんな事をぼんやりと考えていた

「す、凄い!!」

あれから徒歩5分

目の前に広がる光景を見て、メアリーは感嘆の声をあげた

「これが海…本や資料で見た写真とかとは全然違うわね！何て綺麗なのかしら!!」

夕日が、海一面をキラキラの輝かせ、広大な大自然が目の前に広がる。

そんな風景を見て、感動をしたメアリーは、目を輝かせた

まるで子供の様にはしゃぎ、海へとかけていくメアリーを見て、テッドは思っ

「なあ、ひょっとしてあいつ海初めてなのか？」

テッドの問い掛けに対し、ライタは複雑そうな顔を見ると、遠い目をして波と鬼ごっこをする幼なじみを見つめた

「メアリーの奴、あまり外へ出して貰ってなかったみたいだし…あの様子じゃ、おそらく初めてなのかもしれねーな」

「……………そうか」

テッドは夢中になって貝殻を拾うメアリーを見て、もう少し海を満喫させたい気持ちになるが、あと数時間で日がくれる

そうなる前に、宿かホテルをとらないと今日の泊まる所はないだろう

「メアリー、はしゃぐ気持ちはわかるが宿をとるのが先だろ！早く行くぞー！」

「ええーっ」

メアリーの明らかに不満そうな声を聞き、テッドは苦笑をすると、空を指さした

「早く街へ行って宿を取らないと今日は野宿になるが、それでもいいのか？」

「う……」

野宿という言葉聞き、諦めたように小さくうなづくメアリーを見て、ライタは言った

「仕方ねーよ、俺達は追われてるんだ！街から近いとはいえ野宿は危険すぎる」

「う……」

宥めるようにそう言われ、メアリーはしびしび返事をすると、去り際にテッドに頭を押された

「そんな顔しなくても、また来りゃいいじゃねーか！それに今は海水浴の時期で人も多いし、人の多い昼間にくりゃ俺達も目立たねーと思うしよ」

「確かにそうね」

メアリーはテッドの言葉に納得したようにうなづき、また来るといふ言葉を聞くと嬉しそうに言った

「わかった、じゃあまた明日きましょう！今日は歩きっぱなしで疲れたし、早く宿へ行くわよ！！」

「はいはい」

隣で追われているのにも関わらず、目を輝かせながら楽しそうに笑うメアリーを見て、テッドは呟いた

「いつ追われてるって自覚はあるのかよ、おめでたい奴・・・」

.....

「はあ、そついや三人だったな……」

部屋へ入り、さびしくなった財布の中身を片手にため息をはくテッドを見て、メアリーはうるたえていた

「ご、ごめんなさい！私お金を持ってなくて！あの私、これから野宿でいいから！..」

申し訳なさそうに謝るメアリーを見て、テッドは困ったように笑うと「お前はあほか」と言った

「あのなあ、鬼や魔物が外でうろついているこの地域でお前のようなお嬢様が野宿なんてできっこねーだろ！そもそも、俺がガキ二人に野宿させて自分だけ宿に泊まるようなやつに見えろとでもいいてーのか」

ガキ二人って……

私達、ガキと言われる歳じゃないのだけど

テッドの言葉に少しムツとしてしまい、思わず「見える」と言ってしまうそうになるが、不器用ながらのテッドの気遣いを感じる事が出来て、私はお礼を言った

「ありがとうテッド、でも本当にお金は大丈夫なの？こんな調子で使い続けていたらあつという間になくなってしまっんじゃない？」

心配そうに平らになった財布を見て、心配するメアリーとは裏腹にテッドは苦笑すると

「ああ、」のくらいすぐに貯まる」

と言った

「？」

意味ありげなテッドの言葉にメアリーは首を傾けていると、突然、部屋の扉が勢いよく開かれた

「メアリー！このホテルプライベートビーチがあるみたいだぜ！」

ずかずかと入ってくるライタを見て、メアリーは「どこに行つたの？」と聞くと、ライタは楽しげに言った

「少しこの宿の中を探索してたんだ！なあ、テッド」

テッドはふと話かけられ「何だよ」というと、ライタは楽しそうな表情を一変させ、眉間にシワを寄せて言った

「本当に俺の分まで払って貰ってよかったのか？結構設備も整ってるみてーだし、プライベートビーチがあるくらいだ、かなり高いだろこの宿」

少年の言葉を聞き、テッドは「またか」と呟くと、ライタの頭をバシイと殴った

「痛ッ！？」

気持ちがいい位に、渴いた音がなり、頭をさすりながら涙目で見上げてくるライタを見てテッドは苦笑すると

「馬鹿、今日は海水浴シーズンだから宿じゃなくて高いホテルしかとれなかったんじゃないか」

と言った

（あゝ、成る程！）

その言葉に納得をする二人とはよそに、テッドは話を続けた

「さつきメアリーにもいったが、そんな事いちいち気にしなくていい！いざとなったらお前達にも仕事を手伝って貰うしな」

「「仕事？」」

テッドの言葉に、二人が首を傾けた瞬間、部屋の扉をノックされ「失礼します」という声と共に、若い青年が入ってきた

「いらっしゃいます、この度は当ホテルにお越し頂きありがとうございます
「ごぞいます」

流れるようなしぐさでお辞儀をされ、私もつられてお辞儀をすると
その人に、にこりと微笑まれドキリと胸が高鳴ってしまった

茶色の髪と目を持ち、少したれ目がちで、男の人なのに女の人に見間違えそうな位の端正な顔にメアリーは思わず見惚れてしまう

（うわぁ、男の人なのに凄く綺麗な人…）

ぼーっとその人を眺めていると、再び目がい、またにこりと微笑まれる

（ひゃー／＼／＼どうしよう、また目があっちゃった！何だか照れくさいかも）

メアリーは顔を赤くして下を向いてしまうと、その様子を見ていたライタは、面白くなさそうにぶすつとした

「で、用件は何だ？俺達は疲れてんだよ、宿の説明なら手短かに頼む」

刺のあるライタの言葉にメアリーはぎょっとするが、青年はさほど

気にしていない様子で「わかりました」と言った

.....

「.....で、入浴は朝の6時から12時までとさせていただきます。何か質問は.....」

青年の言葉を遮り、ライタは「ねーよ」と言うと、メアリーは抗議の声をあげた

「ちょ、ライタ！最後まで話を聞かないと、まだ何かあるかもしれないでしょ!？」

ライタにぶてぶてしい態度をされても、青年は顔色ひとつ変えず、

むしろ笑顔で

「わかりました、何か質問がありましたらいつでも部屋の電話でフ
ロントへご連絡下さい」

とだけ言い、部屋についてある電話を指さした

「それでは、説明は以上です。ごゆっくり……」

そいつって青年が部屋から出ていく瞬間に、メアリーが「あ……」
と声を漏らすと、青年はちらりとメアリーを見て、お辞儀をした

「失礼しました」

ガチャン……

青年は静かに扉を閉めたはずなのに何故か、その音が大きく感じ、メアリーは「はぁ」息をつくと同じにライタは不機嫌そうに眉間にシワをよせ、椅子にどかっと座った

「ちょっと、ライタ！」

そんな彼の態度を見て、ムツとしたメアリーは眉間にシワを寄せてライタに言った

「昔からあなたは人見知りだというのは知ってるけど、さっきのはいくら何でも感じが悪いと思う！どうしてあの人にあんな嫌な態度を取るの!?!」

メアリーの言葉に、ライタは更に眉間にシワを寄せると

「どっしてって……あいつの事が気に入わねーからだ」

と言った

「気に入わないうて……だからってあんな態度を取るの大人げないわよ!! テッドもそう思うでしょ!？」

「はあ!? 何で俺にふるんだよ!？」

突然自分に話をふられ、テッドは面倒くさそうな顔をすると、ベッドから起き上がり、部屋から出ていこうとした

「ちょっと、どっかにいくのよ!？」

メアリーの呼びかけに、テッドは振り返ると

「面倒くさいことに巻き込まれるのは嫌いなんだよ、自分達の喧嘩に俺を巻き込むな」

とあきれたように言った

「じ……………」

言葉を詰まらせるメアリーを見て、テッドはため息をはく

「お前らも少しは休め、さもないと、奴らが来たときにぶっ倒れる
ことになるぞ」

テッドはドアに手をかけると「散歩にいつてくるわ」と言って部屋
から出ていってしまった

「……………」

「……………」

テッドが出ていった瞬間に部屋の中が静かになり、その空気に堪え
られなくなったメアリーも外へ出ようと、ドアに手を伸ばした時だ

った

「おい、ひとりで出かけて大丈夫か？」

出ていく瞬間に声をかけられ、メアリーはうなづく

「ええ、ホテルの中を探検するだけだから平気よ」

そういつて、メアリーが部屋から出ようとした瞬間、ライタは椅子から立ちあがると、メアリーの横へ並んだ

「俺もいく、ホテルの中だとはいえ一人歩きは危険だ」

正直ライタと一緒にするのは気まずいけど、おそらく、私の身を心配してそう言ってくれているのだろう

「ありがとう」

だから私はその好意に甘え、ライタについてきて貰う事にした

.....

「.....」

「.....」

(ズンズンズンズン)

メアリーは早速ライタに来て貰ったことに後悔する

(何だか、空気が重い)

少し気分を変えたくて外に出ようとしたはずなのになあ

メアリーはため息をはくと、ふと窓の外を眺めると、そこには、限りもない大きな海が広がっていて、思わずその光景に息をのんだ

(夕方の海も素敵だったけど、夜の海も綺麗なのね)

暗闇の中、空に薄く光る満月が海に照らされ淡い光を放っていて、私はその光景に魅入ってしまう

(そういえば、このホテルってプライベートビーチがあったんだっけ…夜でも行けるのかしら)

ぼんやりとそんな事を考えている時だった

「ん？あれは何かしら…」

海を眺めていると、メアリーはふと浅瀬で水が泡だっている事に気づく

(魚…?)

そう思い、中心部をじっと見ると、ちらりと人の手のようなものが見えて、メアリーは目を凝らしてみた

(人？泳いでるのにしたら少し……いや、あれは!?)

間違いない、人が溺れている!?

「お、おい！どこにいくんだよ!?!」

突然走り出したメアリーにライタはぎょっとして呼びとめるが、一刻も争う事態に彼女は振り向きもせず、ホテルの外へ向かう

（大変、早く助けなくちゃ！）

突然置いていかれたライタは「何なんだよ」と窓の外をみると、何故メアリーが慌てて走っていったのかを理解した

「ちっ、メアリーのやつ、一人で何とか出来るとでも思ってたのか……」

おそらく、メアリーのことだ

溺れている人を放っておくような奴ではないし

考えるよりもまず行動に移す性格だということは、幼なじみである彼はよく知っていた

「とりあえず、助けを呼ばないとな！」

もしあの場所が深い所ならメアリーまで溺れかねない

ライタは小さく舌打ちをすると、急いでフロントへ向かった

-
-
-
-
-
-

「はあ、はあ…や、やっとついた…」

溺れてた人は無事なのかしら

あれからここまで来るのに結構時間かかったし、もしかすると……

そう思いメアリーの顔が青くなると、近くから水が跳ねる音がした

「……………！近くにいます！！！」

その音の場所をたよりに海の中へ入っていくと、メアリーはかすかに水の中で金色に光る物体と肌色の手らしきものを発見した

バシャバシャ

「いた、あそこだ！！！」

水圧のせいで、なかなか前に進まない身体を無理矢理動かしてその場所へ向かう

「待ってて、今助けるから!!」

とうとうその場所までたどり着いた時には、水は自分の胸下位の深さでメアリーはホツとした

（よかった、足がつく位置で……それにしても、この深さで溺れるだなんて、子供かしら……？）

そう思いながらも手探りで水の中に手を入れると、手に何かが触れて、私は勢いよく、両手を掴みその人物を引き上げようとすると、後ろから誰かに手を掴まれる

「……………っ!?!?」

メアリーは驚き、振り返るった瞬間、頭上からあきれたような声が聞こえた

「やめとけ、お前まで濡れたらどうするつもりなんだ」

その声とどろじにザバーツという音と水しぶきが辺りに舞い、メアリーは目を見開くと、引き上げられてぐったりとした人物を横抱きにした青年がメアリーを見下ろしていた

「…デッドド…?」

「まったく…何で人を呼ばず自分で何とかしようと思ったんだ、浅い所でも特に夜は高波がくるから危ねーだろ」

「ご、ごめん！私、とっさに身体が動いちゃって」

確かにテッドのいう通り、夜の海は危険だ

何も考えずとっさに行動を起こしたが、彼のいう通り高波でも来たら私まで溺れていただろう

その事を想像して、ぞっとしていると、テッドは引き上げた人物の口元に頬を持っていくと、チツと舌打ちした

「まずい、息をしてないみたいだ！とりあえず俺達も岸へあがるぞ、潮が満ちてきている」

テッドの言葉を聞いて私はハツとする

さっきまで胸下あたりに水があったのに、今は首元まで水が上がってきていた

このままでは、私達まで溺れることになる！

メアリーは「わかったわ」とうなづくと、テッドと共に急いで岸へと向かった

【次回予告】語り：メアリー

『ありがとう、あなたたちは命の恩人だよ！』

私達が助けたのは、金色に輝く絹糸のような長い髪に、青い瞳をもつ少女

その少女との出会いが、お互いの人生を大きく変えてしまうことになるなんて

今の私達には知るよしもなかった

第2話 【新たな出会い】

水の都ウィンディーネ

その時の私はその街に忍びよる脅威に気づけずにいた

第1話 海が見える街（後書き）

海で思い出した話・・・

小さい頃、白浜で生きてるウニをくれたあのタンクトップの少年は、
元気なのだろうか（初恋）

第2話 新たな出会い

「まったく、あいつらがいると一人でのんびりすらできねーな」

ホテルから出てすぐ近くにある木の上で、俺はウィンディーネの景色を眺めていた

(今日は何だかもの凄く疲れたような気がするぜ)

テッドは目をつぶると、今日の出来事が頭の中でフラッシュバックした

本当に今日は緊張続きの一日だった…

ウィンディーネに来てからのあいつらの態度を見ると、帝国騎士達をまいたことにホッとしているのか、気が緩みっぱなしだ

俺はあの親父さんを見てると、一度や二度まいた所で諦めたりはしないだろう

おそらくあのイオスという男もまた俺達を追ってくるはずだ

動きを封じられ喉元に刀を突き付けられても、顔色ひとつ変えず挑むような青い瞳で睨み返してくるイオスの目を、俺は不覚にも恐ろしいと思った

今回は運がよかったから逃げきれたものの、次は逃げきれぬのか……

おそらくメアリーは論外、ライタも戦いにおいては全くの素人

こんな戦えないやつらをれて旅を続けると、俺まで危険な目にあつ

正直メアリーを軍人共に引き渡して、逃げようと何度も考えた

メアリーはわがままでうるせーし、ライタときたらガキの癖に可愛
いげのかけらもねえ

おまけに目つきだけで人を殺せる位の殺人フェイスときた！

そんな奴らと一緒にいても、いいことなんてない

頭の中ではわかっているのに……

「何だかあいつら憎めないんだよな……」

二人ともあまりにも世間知らずで、放っておけないっつーか

それに……

「生きてたら、あいつもメアリーやライタ位の年になってるんだよな……」

テッドは消え入りそうな声でそう呟くと、ホテルの扉ががらりと開いた

「ん？あれは……」

テッドはふと木の下に視線を落とすと、何だか慌てた様子のメアリーが下を横ぎっていった

「あいつ、追われてるって自覚があるのかよ！一人でこんな時間にどこへ……」

テッドはシュタツと木から飛び降りた瞬間、次のメアリーの行動を見て目を丸くした

「な、海の中にツ！？何やってんだあいつ！！」

テッドはメアリーの行動を見てあぜんとしていたが、気がつくと自分もメアリーを追って海の中に入っていた

「くそ、夏とはいえ冷てえな！あいつ、一体何がしたいんだよ！？」

メアリーを追って海へ入り、そして近くまで来た瞬間なぜあいつがそんな行動をとったかを理解した

（誰か溺れて！？まさか人を助けに！！）

メアリーの奴、馬鹿か！？

確かに海なら、水の力でメアリー位の体格でも人一人位なら引き上げられるかも知れねえが、岸まで運ぶとなれば話は別だ

それに、高波でも来たらどうするつもりなんだ！？

俺はメアリーが腕を掴み引き上げる前に、自分が海へ潜ると、そいつを抱えて勢いよく海から飛び出した

第2話

【新たな出会い】

「どっしょよう、この人息してないよ!？」

二人は改めて引き上げられた人物を見ると、子供ではなく、おそらくメアリーと同年代位であろう少女が顔を真っ青にさせて横たわっていた

「落ちつけ、うろたえるな!まだ脈はある!こいつは俺の出番だな
!!!」

そういつて腕まくりをするテッドを見て、メアリーは

（よかった、テッドなら何とかしてくれるかもしれない！）

と思っていた矛先だった

（あれ？テッド、何顔を近づけて……………）

だんだんと二人の顔の距離が近くなっていき、メアリーは疑問に思っていたが

少女とテッドの口がくっつくぎりぎりの所で、メアリーは彼が何を
実行しようとしているのかようやく理解することが出来た

「ちょ、ちょっと！何しようとしてるのよ！？」

二人の口がくつつく前に、メアリーはテッドのマフラーを引っ張ることで、何とか魔の手から少女を護ることは出来たが、引っ張られた張本人は不機嫌そうに顔をしかめると

「何しやがる……」

と恐ろしく低い声で言った

「何って、こっちの台詞よ！どさくさに紛れてこの子に何をする気だったの！？」

顔を真っ赤にしてうるたえるメアリーをちらりと見ると、テッドは面倒くさそうに息をはき、横たわる少女を指さして言った

「あのなあ、俺はただこの子に人口呼吸をしようと思っただけじゃねーか…何顔を赤くしてるんだ、お前…」

「人口…呼吸？」

その言葉を聞いて、メアリーは一瞬「何だそういうことが、びつくりしたあ！」と納得しそうになるが、頬を少し赤らめたテッドの顔を見て、ピンときたメアリーは再び少女に迫るテッドのマフラーを引っ張った

「やっぱり駄目、この子から離れなさい！」

「ぐえっ…離せ…早くしねえとこいつの命が危ねーだろ!？」

口をタコのようにして少女に迫ろうとするテッドを見て、メアリーは叫んだ

「何が人口呼吸よ！？そんなこと言って本当はただこの子とちゅー
したいだけなんでしょ！？」

「はあっ！？」

おそらく凶星なのかテッドは顔を赤くすると、ムキになって否定を
した

「ガ、ガキの癖に何ませたことを言っでやがる！？別に俺はやまし
い気持ちがあつたわけじゃなくて、純粹にこいつを助けたくてだな
……」

明らかに動揺するテッドを見て、メアリーはビシッと彼の顔を指を
指す

「嘘！じゃあ何でそんなに顔が赤いのよ！？最低っ！テッドの馬鹿、
スケベっ！！」

「何だと……?」

さすがにここまで罵られ腹を立てたテッドはクワツと瞳孔を開かせると、その眼力にメアリーは少し怯んでしまう

「誰がスケベだ!?!?・・・たく、こんなつまらねーこと言ってくずぐずしてっと助かるもんも助からねーぞ!」

「う……」

彼の最もな反論にメアリーはたじろいでいる隙に、いつの間にかテッドはメアリーの手を振りほどくと少女の顎に手をかけた

「ま、そういうことだ!安心しろ、俺は人工呼吸をするのであって、やましい気持ちがあるわけじゃないからな!」

「……」

そういつて再びメアリーに念を押しした後、テッドが少女の唇に自分のを重ねようとした時だった

「ぶはっ、げほっげほっ！おええええええッ」

ぶふーーーーーッ

と盛大な勢いで少女の口から水が発射し、当然至近距離まで顔を近づけていたテッドはそれを顔面で浴びることになる

「テッド!？」

突然の事態に驚いたメアリーはテッドの名を呼ぶと、当の本人は目に海水が入り、その場所をおさえて悶えていた

「いたたたッ、目がしみる! 一体何が起こったんだ!？」

テッドは目を擦り目を開けると、先ほど自分が人工呼吸をしようとした少女が4つ這いになって口から水をはきながら苦しそうにむせていた

「げほげほッ」

「うおッ、こいつ自力で復活しやがったぞ!!」

少し残念そうに言うテッドをメアリーは一睨みすると、少女のそばへと駆け寄った

「よかった、気がついて!大丈夫ですか!?!」

おそらく、大量の水を飲んだのだろう

メアリーはとっさに涙目になって未だに苦しそうにむせる少女の背中をさすると、彼女は青く虚ろな瞳でメアリーを見た

「……天使がいる」

「え?」

少女の言った言葉の意味がわからずメアリーは首をかしげた瞬間、もの凄い力で腕が掴まれメアリーは思わず小さく悲鳴をあげた

「天使がいるってことは、私の人生もここで終わりか……リボン
を落として海に入ったものの、まさか溺れ死ぬなんて……短い
人生だったなあ」

「ちょッ」

まるで何かを悟り、諦めたような少女の瞳を見てメアリーはぎょつ
とすると、少女の身体をゆさぶった

「何をいつてるの！？天使なんてどこにもいないわ！大丈夫、あな
たは助かったのよ！！」

「おい、今にも死にそんな人をゆさぶるなよ・・・」

テッドは、慌ててメアリーを止めようとした瞬間だった

少女は「ふふふ」と薄く口元に笑みを宿すと、焦点の合わない瞳を再びメアリーへ向けた

「天使って案外過激なんだね・・・で、私はこれからどこへいくの？天国？それとも地獄？」

「だから、あなたは生きてるってさっきから言ってるでしょ！？しつかりしなさい！！」

メアリーは少女を正気にさせようと揺さぶっているところ、みるみるうちに少女の顔色が青くなっていき「う……」と声を漏らした

「おいメアリー、そろそろ……」

それを見かねたテッドはさすがにヤバイと思い、メアリーに制止をかけた瞬間だった

「き、気持ち悪っ……」

「え……」

少女は今にも脳天しそうな顔色でそう言うと、メアリーはハッとして慌てて手を離す

「ごめんなさい！私、つい……」

あれから少し落ち着いた様子なのでメアリーは話かけると、俯いていた少女は顔をあげ、メアリーを見た

さっきまで少女は気絶をしていた上に、メアリーも取り乱していたから、あらためて少女の顔を見ることになる

(うわぁ、凄く綺麗な瞳…ガラス玉みたい)

テッドよりも色素の薄く、上に束ねた金色の髪に、青くて大きな瞳

私は思わず、まるで見ると吸い込まれそうになるような青い瞳に魅入ってしまったと、少女は困ったように笑った

「そんなに謝らなくても……私は全然大丈夫だし気にしないで！それより、助けてくれて本当にありがとう！あなた達は命の恩人だよ！！」

「え…命の恩人だなんて、そんな大袈裟な」

お礼を言われた上、命の恩人だと言われたメアリーは戸惑っている
と、少女は眩しい笑顔を向けて言った

「命の恩人だよ！あの時、本当に死を覚悟した位だし、あなた達が
助けてくれなかったら今頃あの世行きだったし」

あの世行きって…

もしあの時、私とテッドが気がついてなかったら……

メアリーはその時の事を考えてぞっとする

「ん、どうしたの？顔青いけど大丈夫？」

青い顔をするメアリーの顔を見て、少女は首を傾げる

「ひょっとして寒いのお嬢さんせつかく綺麗な服着てるのに、濡らさせてしまってごめんね」

「えっと……」

確かに服は濡れちゃったけど、乾かせば何とかなるし、けして寒い訳ではない

少女の問いに、戸惑っていると、横からテッドの腕がのびてきて、無理矢理私と自分の位置をチェンジして、少女の前へと立った

「さっきから二人の世界を作りやがって……俺のこと忘れてるだろ」

テッドは少し不満げにちらりと私を見ると、今度はキリッとした表情で少女を見た

「お嬢さん！事情とかは後で聞くからよ、とりあえず今は身体を拭かないと濡れたまんまじゃ風邪ひくぞ。俺達が泊まっているホテルがすぐ近くにあるんだ、是非寄っていかな……………」

「ホテル……………そうだ！私！！」

テッドの言葉を遮り、少女は勢いよく立ち上がると、ペこりとこちらへ向かってお辞儀をした

「ごめん、せつかくだけど私急いでたんだ！助けてくれて本当にありがとうね！それじゃあ！！」

用事を思い出し、よほど慌ててたのか少女は早口でそう言うと、メアリー達に背を向け走り出そうとした

「待って!!」

今にも走り出しそうな少女に向かってメアリーは叫ぶと、少女は申し訳なさそうに眉をへの字に下げた

「ごめん、私すぐに行かなくちゃいけない所があるんだ!お礼は、また会った時にあらためて」

「そうじゃなくて…」

別にお礼が欲しいわけじゃない

ただ……

「引き止めてごめんなさい、せつかく何かの縁で会ったのだから、せめて名前だけでも知りたいなと思っただけなの……」

「名前？」

メアリーの言葉に少女は一瞬面くらった顔を見ると、今度は苦笑してメアリーを見た

「お嬢さんさ、運命や占いを信じるタイプ？」

「え……」

なんでわかったの？

その言葉に驚きを隠せず、メアリーは少女を見ると、青い瞳が細められ「やっぱり?」と微笑まれた

「何かの縁……か………わかった、私はヒナ。お嬢さん達の名前は?」

「ヒナちゃんか……可愛い名前ね、私はメアリー」

「俺はテッドだ、こちらこそよろしくな」

メアリーとテッドが自己紹介をすると、ヒナは人なつっこい笑顔を見せると「わかった」と言った

「それじゃあテッド、メアリー、私そろそろ行くね!今日は本当にありがとう、それじゃー!」

ヒナちゃんが手を振った瞬間、辺りに強い風が吹く

「……………」

メアリーは一瞬目をつぶり、ヒナに手を振ろうと再び目を開け辺りを見回すが、そこにはテッドしかいなくてメアリーは首を傾げた

「あれ？いつの間に……ヒナちゃんは？」

「さあ、俺も目をつぶったからわからねーよ」

ヒナちゃん、一瞬の間にどこへ消えたのだろう…

メアリーは「うーん」と首を捻っていると、向こうから人の声が聞こえた

「おい、メアリー！」

「ライター!？」

名前を呼ばれ、メアリーは声が出た方向を見ると、ライターはホテルの従業員を引きつれて、ロープや浮輪を片手にこちらへ走ってきた

「大丈夫か!？溺れている人はどこだ!？」

辺りをキョロキョロと見渡すライターを見て、テッドは苦笑すると「遅えよ」と言った

「安心しな、その子は俺達が助けたから心配いらねーよ」

「は?」

テッドの言葉にライタはぽかんとすると、再び何かを探すように辺りを見回した

「で、溺れてた人は!？」

「もう行っちゃった…」

メアリーは少し寂しそうに海を見ると、ライタは「そうか」と言った

「俺が来るまでの僅かな時間で、歩けるようだったら心配いらねーな!くそ、焦って損したぜ」

そういいながらも、ホツとした表情をするライタを見て、メアリーは微笑むと、静かに波だつ海を再び見

つめた

第2話 新たな出会い（後書き）

テッド・正統派には程遠い主人公

第3話 接触

「凄い、このホテルのプライベートビーチって人が多いのね……」

まわりにいる海水浴目的の人達を見てメアリーは驚いているのに対し、ライタは手で内輪を仰ぎながら眉間にシワをよせると「そうだな」と言った

「ねえ、さっきから怖い顔してるけど、何か怒ってる？」

「別に……」

ライタはそういって辺りを見回すと

「テッドのやつ遅いな、どこへいきやがったんだ」

と呟いた

第3話

【接触】

「やべ、ひよっとして俺迷った!？」

ライターやメアリーに飲み物を買ってくると言っておれから20分

いつのまにか見知らぬ場所へと来ていた俺は途方にくれていた

やべーな、大体ここの宿泊施設は街へ入ってすぐの所にあるから迷わずにすんだが

自分の方向音痴のせいで、広い街の中いつまでも宿が見つからなくて、近くにあった公園で野宿した経験がある位だ……

見知らぬ土地にガキ二人置いて何やってんだ俺は……

「そんなことになるならどっちか片方…いや、二人についてきて貰えばよかった」

ずーん

と道端で自己嫌悪に陥っていると、誰かに後ろから肩を叩かれた

旅人になってからよく人に絡まれてきた為、俺は警戒しながら振り向くと

そこには、笑顔で手を振る少女がいて俺はホッとした

「ヒナ！」

「あ、やっぱりテッドだ！こんな道端で立ち止まって何してるの？」

「えっとだな……」

助かったー

と思いながらヒナに、事情を話そうと口が動きかけるものの、何故か俺のプライドや理性が働き、咄嗟にあべこべな事を言ってしまった

「メアリーともうひとり連れがいるんだけど、そいつらが迷子になったんだ！この街は広いし、心配で探しにきたんだけどよ……」

「メアリーが？」

その話を聞いて深刻な顔をするヒナを見て、俺は

(やべ、格好つけて嘘ついてしまった)

と思っていると、突然ガシッと両手を掴んできて彼女は俺を真っ直ぐ見てきた

「それは大変！ここの街観光地なんだけど、意外に危ない通りとかあるんだよ！！ほら、ここから真っ直ぐに進んだ所もそう」

「マジかよ！？今まさに俺がこうとしてた道じゃねーか！」

危なかった…と呟くテッドを見て、ヒナは苦笑すると

「この辺り、宿泊施設もないし、海の近く付近や観光場所とは雰囲気違うでしょ」

と複雑そうな顔をして言った

「確かに…」

いわれてみれば、この辺りは人通りが少なそうだし、薄暗い

その上、薄暗くそこらに落書きがあるわゴミが落ちているわけでヒナのいう通り、あまり治安のよくなさげな場所だった

「メアリーって子、そんな所に迷いこんでなきゃいいのだけど…」

ヒナは「うーん、仕方ない」と呟くと、ポケットからコンパクトな四角い箱のようなものを取り出した

「？」

テッドは

(何をしてるんだ?)

とヒナの行動に首を傾けていると、彼女はその箱に耳をあてながら何かを話し出す

「申し訳ありません、少し急用が出来てしまって……明日ですか？大丈夫です」

「誰かと話をしているのか？」

ふと疑問に思い俺は声をかけてみると「シッ」と言われる

「はい、わかりました。それでは……」

話が終わったのかヒナはそれを再び懐にしまおうとすると、俺はその箱を指さした

「これは、無線のようなものなのか？」

「え……？」

よほど俺が言った事がおかしかったのか、ヒナはぽかんとして俺を見たが、すぐにいつもの笑顔で「はい」とそれを差し出してきた

「……………」

差し出されても、それが何かわからない俺は、じっとその箱を眺めていると、ヒナは苦笑する

「実の所、私も持ちたてであまり使い方はわからないのだけど、これはケータイ電話といって、電話と同じ役割をするものだよ」

「電話？これが！？」

こんな小さなものが電話なのかよ！？

俺はマジマジとそれを見ると、確かに普通の電話のように、数字のついたボタンが並んでいる

ヒナは「うん」「とうなづくと

」テッドの言う無線とほぼ役割は同じようなものかな」

と言った

「凄いな…なあヒナ、この街は観光地の他にも機械も生産しているのか？」

「え！？違うよ！」

ヒナはとんでもないとばかりに首を横にふると少しあきれたように言う

「何いつてんのさ！？ここで機械なんかつくったら海が汚れるじゃん！輸入だよ、輸入！！！」

「成る程、輸入ねえ」

「…！」

ヒナは「そういうこと」というと、懐にケータイをなおした

なるほど、俺がぶらぶらと旅をしているうちにそんな便利なものが出来ていたのか……

俺達もひとつずつ持ってりゃ便利だろうな

ぼんやりとそんな事を考えていると、ヒナは俺の肩をガシッと掴んで眉間にシワを寄せた

「話はこれで終わりだよ！そんなことより、早くメアリー達を探さないで！私も手伝うからさー！」

「……………！？」

おそらくヒナは親切心でそう言ってくれているのだろう

しかし、今の俺にとってヒナとメアリーの所へ帰るのはマズイことだった

(やべー、迷ってたのが俺の方だったって……嘘をついたのがばれちまう！)

「別に大丈夫だ、これは俺達の問題………」

「全然大丈夫じゃない!!」

何とかして、ヒナを連れていくまいと俺は口を開くが、あっさりヒナは俺の言葉を遮り、クワツと瞳孔を開かせて睨みつけてきた

「この辺り、別名ナンパスポートだって知らないの!? 治安の悪い所へ行かなかつたとしても、あんなに可愛い子を放っておいておいたら大変!! ナンパされまくりだよ!!」

「ナンパされまくりって大袈裟な……」

テッドはあきれたように言うと、ヒナは「本当だよ」と言った

「この前だって、ナンパ被害が多くて大変だったみたいだし、注意するのにこしたことはないよ！」

あまりにも必死になって力説するヒナに、テッドはため息をはくためんどくさそうに言った

「はいはい、そのことならメアリーだけならともかくもう一人おっかない顔の奴がいるからだいじょうぶだ！てか、何で会ってまもないお前が首をつつこんでくるんだよ・・・そもそもお前には関係な・・・」

「……………は？」

テッドが喋り終わる前に突風が走ったと思えば、左横で凄まじい破壊音がした！

「な、何が起こったんだ！？」

おそるおそる顔を横へ向けると粉碎した壁に白くて綺麗な手がめり込んでいて、テッドの顔に青筋が浮かぶ

「！？」

まさか目の前の可憐な少女が、壁を素手で粉碎するなんて夢にも思

ってなかったテッドは、しばらくの間ぼーゼんとしたが

ヒナに顔を近づけられハツとすると、胸倉を掴まれた

「つべこべいわず人の好意に甘えておけや、何かあってからでは遅いというのが分からねーのか？ テメー、何の為にさっき私が仕事をキャンセルしたんだと思ってんだよ」

「……………」

怖えええッ！？

先程の天使のようなヒナちゃんはどこに!?!という程の彼女の豹変ぶりに、テッドは冷や汗をかく

「仕事をキャンセルしたって……まさかさっきの電話でか？」

彼女を刺激しないように恐る恐る聞くと、ヒナは更に眉間にシワを寄せて言った

「おうよ…それなのに、私には関係ないから引っ込めっか?冗談じゃない!命を助けて貰っておいといて、逆にその人が困っていたら助けるに決まってるだろ!?!」

それが命を助けて貰った人がとる態度かよ……

テッドは心の中で呟いていると、ヒナはテッドの胸倉を掴んだままどすの効かせた声で言った

「ほら、遠慮すんなって！私とあなたの仲だろお？」

誰だよお前！？

つか私とあなたの仲って、どんな仲だよ！？

まるでチンピラのように成り果てた少女に心の中でそう突っ込むものの、あまりにも目の前にいるヒナが恐ろしく、何も言うことができなかつた

すると、すっかり黙ってしまった俺を見て肯定だと受け取ったらしい

さっきのおっかない面はどこへ消えたのか、ヒナは元の調子に戻って言った

「で、これからどの辺りを探すつもりだったの？メアリー達の行きそうな場所とかわかる？」

すっかり肯定と勘違いをしたヒナにメアリー達を探す気満々な態度でそう言われ、俺はぎょっとすると慌ててそうではないと否定をしようとしたが

「ちょっと待て！俺は一言も手伝ってくれとは……………」

「メアリー達の行きそうな所はどこだって聞いてんだよ、ちっせと
はげや！」

「…すみません、いいますので拳をしまつて下さい」

拳を握りしめながら天使のような笑顔で詰めよってくるヒナを見て、
何故だか命の危険の予感がした俺は

小さな声で「ハイ」と言うことしかできなかった

-
-
-
-
-

「なるほど、じゃあテッドとメアリーは出会ってまだ間もないんだね」

「ああ、だからあいつが行きそうな所なんて予測もつかねーよ」

何でこうなっちまったんだ……

確かに嘘をついた俺が悪いが、事態は悪化しちまったじゃねーか！

今更嘘だと言えなくなってしまった状況に、俺はため息をはくと

おそらく、メアリー達を案じてついたため息だと勘違いしたらしい
ヒナは、労るように俺の肩をポンと叩く

「心配なのはわかるけど、ため息についても幸せが逃げるだけで何も始まらないよ！もしものことがあれば私もついてるんだし、大丈夫！だから安心して！ね？」

安心できるか！？

そもそもため息の原因はお前だよ！

出来ることならそう言ってやりたいが、その言葉を飲み込み、しばらくヒナと路地裏を歩いていると
俺達は分かれ道に差し掛かる

「ここは分かれて探した方が効率がいいね！右の道は商店街に続い

てで、左はホテルや海水浴場に続いてるけど…どっちへ行きたい？」

来たー！ー！！

海水浴場という言葉に俺は大きく反応する

まさしくそこは俺が降りたかった場所！

その上、ヒナは手分けして探そうという有り難い案を出してくれてる

これはチャンスじゃねーか！

俺は迷わず左を選ぶと、ヒナも

「そうだね、私も海の方面は仕事仲間に出くわす可能性が高いから助かるよ！それじゃあまた後でね！」

と言うと、商店街方面へと去って行った

よし！！

俺は心の中でガッツポーズを取ると、左の道へ歩き出す

もちろん、ヒナに咄嗟とはいえ嘘をつき、仕事をキャンセルさせてしまったことに罪悪感はある

だが………

テッドは先程の粉碎した壁を思い出すと今でも背筋が凍りつく

悪い、ヒナ！

俺が助かる為だ！！

お前が恐ろしかったとはいえ、嘘だと言い出せなかった俺を許してくれ！！

テッドは心の中でヒナに手を合わせると、海へと続く道を全速力で駆け抜けて言った

-
-
-
-
-
-

「遅い！テッドの奴どこをほっつき歩いているんだ！？」

「本当ね、ひよっとすると方向音痴だし迷ってるのかも……」

スカートをまくり、しばらく水遊びをしていたメアリーは、パラソルの下にいるライタの元へ戻ると隣に座った

「……ったく、しょうがねー奴だな！もう昼になっちまったじゃねーか！」

ライタはすっかり高くなった太陽を見上げると、メアリーは苦笑する

「そろそろお昼の時間だし、先にホテルに戻る？ご飯の用意も出来ると思うし」

「そうだな、ここに俺達がいなかったらホテルに戻ってくるだろ！」

よいしょと、ライタは重い腰をあげるとメアリーに手を差し出した

「行くぞ」

「うん」

ライタの手を掴み、メアリーが立ち上がろうとした瞬間

ライタはよからぬ視線を感じ、ぱつと勢いよくその先を見ると
いかにも柄の悪そうな三人組の男がメアリーを見てニヤニヤと笑っ
ていた

「ッ！」

その視線に気付いたライタは、慌ててメアリーの手を引き

ホテルへ戻ろうとするが

「ねえ、そこの嬢ちゃん」

と声をかけられる

「こいつに何か用かよ」

ライタはメアリーを自分の近くに引き寄せ、男を睨みつけると

「うわっ、彼氏の顔恐っ！」

と男達は次々に言い出した

「あの、ライタ？」

険悪な雰囲気を出すライタを見て、イマイチ状況を理解出来ないメアリーは不安げな表情でライタの手を握ると
大丈夫だともいうように、手を握り返してくれる

その事にメアリーは少しホツとしていると、目の前の男達はライタをちらちら見ながら話しあっていた

「いや、でもこいつ顔は怖いけど体格は俺達の方が上だぜ、いけんじゃねーの？」

「いや、騙されちゃいけないぜ！あれは絶対10人は殺ったつて顔してんじゃねーか！…でも女の子の方、凄くタイプなんだよなあ」

「待て、向こうは1人じゃねーか！なんとかなるんじゃねーの？でも顔恐いなあ……」

自分達から声をかけてきておいて、ひそひそとライタの事を話す三人組にだんだんと苛立ちを覚えたメアリーは、いつの間にか、ライタの前に出てきて男達を睨みつけていた

「ちょっと、さっきからひそひそと感じが悪いわよ！私達に用があるならハッキリいなさいよー！」

「よせ、メアリー！」

今にも男達に食ってかかりそうな勢いのメアリーをライタは制止を
すると

メアリーはキツとライタを見た

「だってこの人達、ライタの悪口をいったじゃない！」

そう言つてメアリーはライタの腕を振り払うと、男達の前に立ちき
つと三人を睨みつけるが
それが逆効果だったのか、体格がいい金髪の男が「ひゅう」と口笛
を吹く

「お、近くで見たらマジでかわいいー」

「そんな恐いかおした彼氏なんて放っておいて、俺達と遊ぼうよ」

「ふざけないでー!!」

三人のうちの一番体格のいい男はメアリーに触れようとする、メアリーはバシッツと音をたてて手を振り払う

「何のつもり!?人が怒ってるのが分からないの!?あなた達はライタの事を悪くいうけど、少なくともあなた達よりは常識はあるわよ!」

「んだと、この女!少し可愛いからって調子に乗りやがって!」

メアリーの言葉に腹を立てたのか、ガタイの大きい男はメアリーに掴みかかるようにすると

その間にライタが入り込み、男の腕を掴み、捻りあげた

「おい、メアリーに触るな……」

「いっただだッ!?くそ、このガキ!」

男はライタの腕を振り払い、仲間の所へ戻ると捻られた腕を大袈裟にさすりながら叫んだ

「痛ってええ！？このガキ腕を捻りやがった！！」

「テメー、何しやがんだ！？」

大柄の男がライタの胸倉を掴むのを始め

残りの二人がかりでライタを羽織いじめにすると

先程腕を捻られた男は、瞳に怒りを宿らせ、力いっぱい身動きの出来ないライタを殴りつけた

「か…はっ」

両腕を二人がかりで拘束され、身動きが取れないライタは大柄な男の拳をまともにくらい、口の端から血を流すと、その光景を見たメアリーが悲鳴をあげる

「ライターっ!？」

「何だ、こいつ顔が恐いだけで強くねーじゃん」

ガタイのでかい男がそういつて再びライターの頬を殴りつけると

我慢の限界だともいうように、メアリーは男の腕を掴んだ

「ちょっと、三人がかりで卑怯だと思わないの!？ライターを放しなさい!！」

「痛っ!？この女、捻られた箇所を!！」

もちろん、メアリーにはそんなつもりは微塵ともなかったが、どうやら捻られた腕を掴んでしまったらしい

痛さで顔を歪めた男は勢いよくメアリーをつき飛ばす

「う……」

運悪く突き飛ばされた先に岩があり、それに背中をぶつけたメアリーは痛みで顔を歪めると

男は鋭い眼力でメアリーを睨みながら

「女は引っ込んでろ、後でお前も可愛がってやるからよ」といい放った

「……………ッ」

男にそう言われ私は悪寒が走る
するとライタはハツとした表情でこちらを見ると、顔を青くして叫んだ

「メアリー！？ テメーッ、よくも……！」

「女の事よりまず自分を心配したらどうだ？」

ドゴオッ

「ぐあああっ！！」

(どどどどど！！?)

メアリーは殴り続けられるライタを見て拳を握りしめた

周りの観光客は私達がもめてから逃げるようにどこかに行ってしまうたし、こういつ時テッドがいれば……

メアリーは今だに帰ってこないテッドに苛立ちを感じ唇を噛み締めるが、自分がこうしている間にもライタは酷い目に会っている

どうにもならない今の状況で、私の出来る事といえば

ダッ

「あ、あの女…！男を置いて逃げやがったぞ」

「追え、逃がすな…！」

メアリーはちらりと後ろを振り向くと
ガタイは大きくないが、三人の中で一番長身で糸目の男が追っ
てきた

「とにかく、助けを呼ばないと…！」

早くしないとライタが！

確かホテルはオートロックでライタとテッドが鍵を管理している
外から中へ入るならインターホンで係の人を呼ばなければいけない
でも、そうしているうちに掴まってしまっ

そういえば、ホテルのひとがホテルの横の坂を上がれば商店街があ
ると言ってたような・・・

そこなら人がいるかも！

人を呼ぶ為にメアリーは無我夢中で走っていると、商店街のような
小さな店が並ぶ通りに差し掛かる

「だ、誰かッ…助けて!!」

とりあえず人の多い所へ差し掛かったメアリーは助けを呼びながら走り続けるが、通り過ぎていくものは好奇の目でメアリーを見たり、ちらりと一瞬だけこちらを見た後見て何事もなかったように目を背けたりするものはいたが

誰もメアリーの声に応えようとする人はいなかった

「な…んで、誰も…助けて…くれな」

とうとう体力を限界まで使い果たしたメアリーは、息も絶え絶えにそう呟くと

後ろから思いきり髪を引っ張られ、その痛みでメアリーは「きゃあ
あ」と悲鳴をあげる

「やつ、やつと…追い付いた…手間かけさせやが…て」

男は息切れを起こし鋭い視線をメアリーへと向けると、もの凄い力でメアリーの腕を掴む

「さ、ついてこい！」

「嫌ああああっ、誰かーッ!?」

メアリーは近くを通る人に助けを求めるがちらりと一瞬だけこちらを見ると、まるで何も見ていないようにすたすたと去っていく

「な、なん…で?」

誰も助けようとしてくれないことにメアリーは顔を青くすると、男はそれを嘲笑うかのようにメアリーに更なる絶望を与える

「ふん、いくら叫んでも誰も助けてはくれんさ！人間なんて皆、自分がよければそれでいいと思ってるんだよ」

「…そんな」

その言葉を聞き、顔を青くした瞬間メアリーは男に担ぎ上げられた事に気づき「ひ…」と悲鳴をあげる

「甘い考えを持ちやがって、今の世の中皆そんなもんさ」

男はぼそりと呟くと、メアリーを担いだまま、商店街を歩き出そうとするが

何とか連れていかれまいとメアリーは必死に暴れまくり、抵抗を試みた

「うわ、暴れるな!？」

「違う……」

メアリーは男の背中を思いきり叩くと、男は小さく呻き声をあげる

「ふざけないで!世の中は、皆そんな人ばかりなんかじゃないわ!

「！」

確かに、誰かが困っていても見て見ぬふりをする人もいる

でも、少なくともテッドとライタは違う

確かにテッドはめんどくさがりで、頼りないけど
旅に出たいといった私を外の世界へ出してくれたし

ライタは、自分の身が危険にさらされようとも、私を助けようとしてくれた！

少なくとも、あの二人は困ってる人を見捨てるような事はしない

だから私は今、こうして屋敷へ戻らずに済んでいる

それなのに…

「あなた達の観念なんて知ったこっちゃないわよ、世の中の人をひとくくりにしないで！迷惑なのよ！…！」

「んー、確かに迷惑だね」

「!?!」

近くから聞き覚えのある声が出て、メアリーは首を横へ向けると金色の髪を高い位置で束ね、青い瞳を持った少女がやれやれといった表情で立っていた

「ヒナちゃん!?!」

ヒナはちらりとメアリーの顔を見ると、「よっ」とでも言っつよつて手を上にあげる

「お兄さん、この子私の知り合いなんだよね…悪いけど手、離してくれないかな？」

「な……」

臆する事なく長身の男に話かけるヒナを見て、メアリーはぎよっとすると、慌てて制止の声をかけた

「ヒ、ヒナちゃん！危ないわよ！？私の事はいいからこの場から離れて…！早く…！」

誰か助けると叫んで、走り続けた結果
その呼びかけに応えやってきたのは、昨日海で溺れ私達が助けた少女だった

メアリーの制止の声を聞きヒナは一瞬驚いたような表情をすると、ふと目元を優しく緩めてからメアリーに向かって微笑んだ

「ありがとう、メアリーって優しいんだね！私の事は心配しなくて大丈夫だよ」

そして、さつきメアリーに向けていた表情とは違ってかわって、ヒナは少し冷めたような目をして男の方に向きなおると

長身の男は「ひッ！」と声をあげる

「す、すみません！まさかこのガキ……いえ、このお譲さんが貴女と知り合いだなんてちつとも……」

先ほどメアリーやライタに見せていた威勢はどこへいったのか男は急におどおどし始めると、その態度が勘にさわったのか、ヒナの目が更に冷たく細められる

「ごたくはいいから早くその子を離しなって、それとも何？また私とやりあおうとでもいうの？」

「め、めっそうもごいません！」

（一体どうなってるの!?!?）

ヒナという少女が来てから明らかに男の様子が変わりメアリーは不思議に思っていると

動揺した男が突然手を離し、担がれていたメアリーは頭から地面に落ちそうになるが
いつのまにか近くまで来ていたヒナに受け止められるとぐいっと自分の方へと引き寄せられた

「!?!」

この少女の細い腕のどこにそんな力があるのかとメアリーはぽかんとしている間に、ヒナは男の胸倉を掴むとメアリーに聞こえない程の小さな声で囁いた

「今回は見逃してあげるけど、今度一切この子に何かしようものなら……」

「？」

何を話しているのかしら？

メアリーはそう疑問に思っていると、みるみる内に男の顔が青くなりヒナが胸倉を離れた頃には男の顔は完全に恐怖で歪み、後ずさりながら何かを口にしていた

「は、はい・・・も、今後一切・・・この方に・・・ひいひいひいひいひいひいッ!?」

「えッ!?」

一体何が起こったのか状況が理解できずメアリーは一目散に逃げていく男をぼかんと眺めていると、ヒナはほっとしたようにため息をはいた

「聞き覚えのある声が聞こえたからまさかとは思ってたけど、やっぱりメアリーだったんだね！大丈夫？何もされてない？」

「えっと・・・」

さっきのは一体何だったの!?

メアリーはじつとヒナの顔を見ると、言いたいことを察してくれたのか「ああ、さっきの?」と言い苦笑しながら答えてくれた

「あいつはここらでは有名なたちの悪いナンパ野郎だよ、そういやさっきテッドがメアリーを探して海の方へいったよ!ここから海まで近いし今からでも合流できると思うから私についてきて」

(海・・・そうだ!)

さっきのことがあまりにも衝撃的でメアリーはハッとすると今、海辺でライタが!!

「ヒナちゃん!待って!!」

「ん?」

海へ向かおうと歩きだすヒナを呼びとめると、メアリーは首を横にふった

「今、海辺で私の友達が酷い目にあってるの!相手は2人だし、私達だけでいくのは危ないわ!誰か人を・・・」

「ああ、海辺のこと？それなら心配いらないよ」

心配いらないという言葉にメアリーは首を傾けると、ヒナは苦笑しながら答えた

「誰かが海辺で喧嘩をしていることを通報してくれたみたいだから大丈夫だよ、ほらここから海が見えるでしょ」

「あ……」

今まで周りの景色を見る余裕がなかった為、メアリーはヒナに言われて気づいた

(ここから海辺が見えるんだ……)

遠目だけと海辺に4、5人程青い服を着た人達がきているのを見て、メアリーはほっとすると消え入りそうな声で呟いた

「よかった……ライタが無事で」

遠目だけと黒髪の少年が警察の人に肩を貸して貰いながら歩いているのがわかり、メアリーは気が抜けたのか足の力が抜け地面にへたりこむ

その様子を見ていたヒナは、メアリーの前で後ろ向きにしゃがむと「首に腕を回して」と言った

「？」

とりあえず言われた通りヒナの首に腕を回すと、ぐいっつと身体が浮遊した感覚がしたと思えば
足に腕を回されおんぶをされていた

「ちよ・・・」

まさかおんぶされるとは思ってもいなかったメアリーは抗議の声をあげると、ヒナは「うわ、軽ッ」と驚いたように呟いた

「ちよ、悪いわよ！それに私軽くなかないし、むしろ重いと思う」

その言葉を聞き、ヒナは「何だって!？」と言う

「どこが!?!全然軽いよ、普段何食べて生活してんのって位!同じ女としてうらやましい位だよ!」

「そ、そんな・・・それより下ろして、私一人でも歩けるから」

何だか恥ずかしくなってきたメアリーは、ヒナに下ろして貰うようにたのんだがあっさりその意見は却下あされる

「駄目、今下ろしたらまた地面にへたりこむでしょ？メアリーが自分で歩けるっていうなら話は別だけど」

「う・・・」

確かに足が震えて力が入らないのは事実だった為、メアリーは黙ってしまつと

その様子を見たヒナはおかしそうに笑った

「でしょ？だからおとなしくおんぶされときなさい！心配しなくてもちゃんと海までおくるからさ」

「う、うん」

助けてもらった上にここまでしてもらっているのだからかと思うとメアリーは罪悪感がわき、ヒナの高くあげている髪をくいっと引っ張ると「ごめんなさい」と言う

「何でメアリーが謝るの？何も悪いことしてないのに」

ヒナは不思議そうに首を横へと向けると、メアリーは腕にぎゅっと力を込める

「だって助けて貰った上に、ここまでして貰って・・・悪いよ」

「何だ、そういうことが」

ヒナは納得したのが再び首を前へ向ける

「メアリーってなんか人に気をつかいすぎっていうか、律儀っていうか・・・何だろう・・・そこまで気にする程のことじゃないと思うんだけどなあ」

「でも・・・」

それでもまだ申し訳なさそうにするメアリーに苦笑すると、ヒナは困ったように言った

「私なんてメアリーには一生かけても返せない位の借りがあるんだよ？命を助けて貰っておいてこの位のことしかできないけど、でも少しはメアリーの助けになれて嬉しいと思ってる！だからそんなこと気にしないで」

「そんな・・・」

一生の借りだなんて、そんなたいそうなことなんてしていないのに

私はただ・・・

メアリーは慌ててそう言おうとするが、タイミングが悪く急に眠気が襲ってきて目の前がぼやけてきた

「・・・・・・・・う」

あまりの睡魔に、メアリーは意識が朦朧としていて、それに気づいたヒナはメアリーが後ろに倒れないようにかがむような体制になる

「疲れたんだね、別に眠っても大丈夫だよ！テッドが迎えにきたらちゃんと起こすから」

まるで子守唄のように穏やかな声でいわれ、私は昔お母様の背中であとあつとしたことを思い出した

（お母様・・・）

メアリーは懐かしい感覚にぎゅっと腕の力を込めると、ヒナは苦笑する

「大丈夫、さつきみたいに变なのが出来てもおっぱらっておくからさ
安心して」

おそらくまた、さつきみたいな事にならないか不安に思っ腕に力
を込めたと勘違いをしたのだろう

「違う」と否定をしたくても、意識を保つのが限界で私はヒナちゃ
んの背中にうなだれた

まだ寝てはいけない・・・ヒナちゃんに言ってなかったことがある

メアリーは必死に睡魔と戦いながら、重たい眉を上げるとヒナの名
を呼んだ

「ヒナちゃ・・・」

「ん？」

メアリーの呼びかけに気づき、ヒナは耳をすますとメアリーは耳元
で何かを呟いた

「まだ……お礼、言えてなか……ありがと……う」

「……」

消え入りそうな声だったが、その声はヒナの耳にとどき
それと同時にずしりと背中が重くなった

「す……」

すっかり背中の上で寝てしまったメアリーを横目で見て、ヒナは苦

笑すと

まるで独りごとのように呟いた

「どういたしまして」

【次回予告】「語り・ライター、メアリー」

俺の傷が癒えるまでこの街に滞在することになり、あれから3日が過ぎた

それにしても、テッドとメアリーの奴さつきから誰の話をしているんだ？

「ヒナ」って誰だよ!？」

そんなことより次話から俺の出番が少なくなるって一体どういってなんだ!？」

迫りくる幼馴染の危機に、メアリーは再び選択を迫られる

第4章 【帰らずの洞窟】

「メアリー……やめろ!」

ごめんなさい、ライタ

私は大切な人を守る為に、あなたとの約束を破ります

第3話 接触（後書き）

カノンです。

やっと出したいメインキャラクター【ヒナ】が出てきました！

ここまで読んで下さって本当にありがとうございます！

これから、長い話になりますが頑張って書いていこうと思います！

第1話 忍びよる魔の手

「あ、やっと来た！ここまで一本道のはずなのに随分と遅かったね、途中で何かあったの？」

「えっと……」

途中で自分のいる場所が分からなくなって迷ってました……

テッドはその言葉を飲み込み、咳ばらいをすると

「ああ、ちよつとな」

と言った

とりあえず鼻の方はいい為、テッドにとって海へ辿り着くのはたやすう事だった

しかしあまりにも海辺が広く、メアリー達の居場所が分からなかった上に

ヒナが陰の多い岩の所で待機をしていた為、姿が見えなくて今まで

必死に探していた結果

今の状況に陥っていた

「詳しいことは帰ってからこの子に聞くといいよ、でも少し疲れるみたいだからしばらく寝かせといてあげて」

「あ、ああ……」

テッドはヒナからメアリーを受け取ると、少し顔を引き攣らせながら「なあ、ヒナ」と呼んだ

「ん、何？」

「その、メアリーから何か聞いたか？」

予定が狂い、俺より先にヒナがメアリーを見つけてしまった

もしかすると、迷子になったのがメアリーではなく俺だったということがバレてるかもしれない…もしそうなら非常にまずい！

テッドは先程の壁の状態を思い出し、青くなっている
そんな彼の様子を不思議に思ったヒナは首を傾げる

「特に何も……何か聞かれちゃまずいことでもあるの？」

「い、いや…別に、何でもねーよ！ただ聞いてみただけだ」

よし、この様子ならバレてねーみたいだ！

テッドは心の中でホッとため息をつくとき、ヒナはあきれたように苦笑をする

「心配しなくても、今日はバタバタしててあまりメアリーと話す時間はないよ、聞いたらまずそんな話は何も聞いていないよ！それじゃ、探し人が見つかった訳だから私はこれで失礼するね」

そう言ってヒナは、「よいしょ」といいながら立ち上がると、思い出したかのように「あ！」と声をあげた

「そういや、もうひとり連れがいるんだっけ？確かその人さっきあそここの病院に運ばれていったよ！ホテルに戻ってもいなかったら多分そこにいるんじゃないかな」

「あ、ああ…いろいろとサンキューな、ヒナ」

ヒナはどうぞ致しましてとでもいうように、背中を向けながらひらひらと手を振ると、去り際に何かを呟いた

「もうメアリーを置いて迷子になっちゃ駄目だよ……」

「ん？何かいったか？」

「ううん、何も言っていないよ！じゃあねテッド」

ヒナはそういって最後ににこりと笑顔を見せると、再び商店街の通りへと消えていった

第4話 【忍びよる魔の手】

「くそ、誰だか知らねーが警察を呼びやがって……今回は上手く逃げられたものの捕まったらまた豚箱行きじゃねーか」

先程、海辺でライターともめていたガタイのでかい男はチツと舌打ちをすると

糸目の男は顔を青くしてガタイのでかい男に詰めよった

「あんたたちはまだマシだよ！俺なんて警察よりおっかない奴にあつたんだぜ！？」

ああ恐ろしい！とぶつぶつ言う糸目の男を見たガタイのでかい男は「ふん」と鼻で笑う

「どうせ【ヒナ】だろ？あんな小娘一人にびびってんじゃねーよ」

「あんたはヒナの恐ろしさを知らねーからそんな風に言えるんだ！あいつはあんな姿をしているが、中身はとんでもねー【化け物】だぜ！？さつきも危うく殺されかけたんだよ！！」

怯えた顔をして訴える糸目の男を見て、ガタイのでかい男はあきれたように糸目の男を見ると

「そんなに恐いならその化け物退治すりゃいいじゃねーか」と呟いた

「それが出来るならとっくにそうしてるさ！だがあの女、刃物を目の前にしても顔色ひとつ変えないんだぜ、そんなやつをどうやって……………」

「おい、確かお前の話ではメアリーとかいう女、ヒナの知り合いとかどうとか言ってたよな」

二人の話を静かに聞いていた三人のうち一番小柄な男は糸目の男の言葉を遮るようにして会話に入ってくると

ニヤリと口の端を歪ませてた

「そいつ、お前の見た感じヒナと親しそうだったか？」

糸目の男は先程の状況を思いだそうと頭を捻ると、一瞬の間だった
がヒナがメアリーに向ける視線はとても穏やかで

刃物をちらつかせても顔色ひとつ変えなかった少女とは思えない程
の優しい笑顔を向けていた事を思い出す

「知るか！そんなこと！！だが……」

「だが？」

糸目の男はその笑顔を思いだし、顔を青くさせると気味の悪そうに
言う

「あいつ、メアリーとかいうガキを見る時の視線だけは穏やかだっ
たよ。うな気がするぜ……あの化け物があんな表情をするなんてな、
初めて見たぜ」

「なるほどな……」

その言葉を聞き小柄な男はいやらしく笑うと、ガタイのでかい男は何かを思いついたような顔をして、ニヤリと笑った

「それなら話は早いじゃねーか、思ったよりも簡単にあれを始末出来るかもしれないぜ」

「どういう意味だ？」

首をかしげる糸目の男に小柄な男はため息をはくと「察しろよ」と言う

「あのメアリーとかいうガキを使ってヒナをおびき出すんだよ、いくら化け物といえど人数集めて束になってかかりゃいけんじゃねーの？」

「それで、危なっただ時はガキを人質にすりゃ、あいつも手出しは出来んだろ！」

「ああ、成る程！でもそれはかなりまずいんじゃないのか？このことがばれたら俺達殺されてしまうんじゃない………」

細目の男は先程威抜かれたヒナの冷たい瞳を思いだし、身震いをすると

ガタイのでかい男は馬鹿にしたように笑う

「ばれる前にメアリーとかいうガキを拉致ればいい話じゃねーかなーに大丈夫だ！彼氏は顔が怖いだけがとりえのガキみたいだし、その位簡単に………」

「へえ、なかなか面白そうな話をしているね…私もませてよ」

「っ…誰だ!？」

ガタイのデカイ男が得意気に話終える前に
頭上から身体が底冷えするような静かな声が聞こえ、三人は慌てて
上を見上げると

そこにはにこにこしながら屋根の上で胡座をかいて座っているヒナ
の姿があった

「ひ、ヒナっ!？」

いつからそこに!？」

糸目の男が言う前にヒナはストンと地へ着地すると、挑戦的な笑み
を浮かべながらゆっくりと三人に近づいてきた

「随分と物騒な事を話してたみたいだけど、もう少し声を抑えて話さないと誰かに聞かれちゃうよ?」

(例えば私とかにね…) ヒナはぼそりと呟き細目の男をちらり見ると、男はびくつと肩を震わしてヒナから目を逸らした

「おい、この娘が化け物と噂されてるヒナかよ!?!」

ガタイのデカイ男は、ヒナと呼ばれた少女を見て驚いたように目を見開くと、小柄な男も同じようにあぜんとした顔で目の前の少女を見た

「全然想像してたのとは違うじゃねーか、こんなガキのどこが化け物だっていうんだよ!」

「よせ、むやみに近づかない方がいい!ぶっ殺されるぞ!」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべ、ヒナに近づこうとするガタイのデカイ男を細目の男が制止した瞬間

ヒナは苦笑したように笑う

「ぶっ殺されるだなんて人ぎきの悪い！化け物といえどちゃんと心がある訳なんだし、いくら私でもその言い草は傷つくなあ……」

眉をしゅんと下げてしょんぼりするような仕種のヒナを見て小柄な男は鼻で笑うと、挑発するような言葉を言い放つ

「ぶ、ふん、白々しい……俺にはお前が傷ついているようには見えないんだがな……それよりさっきの話、聞いてたんだろ？」

その言葉を聞いてヒナの笑顔が更に深くなったとどろじに、細目の男の顔はみるみるうちに青くなっていく

「い、いつから聞いていたんだ!？」

「んー、化け物の表情がどうのとかいってる辺り・・・かな？」

ゾクッ・・・

そういつてにこりと微笑むヒナを見て

細目の男だけでなくさっきまで馬鹿にしていたように笑っていた2人も、少女の宿す氷のような凍てつく瞳に思わず悪寒が走る

目が笑っていない・・・

本能的にこいつはやばいと察知をした2人はさっきまでの余裕の笑みが消え、冷や汗をかくと

ヒナは後ずさる3人の元へゆっくりと近づき、糸目の男を見て静かに言った

「ねえ、さっきメアリーに2度と近づくなっていったよね・・・もう一度忠告をしないと駄目かなあ？」

「ひいっ!?!」

ぴりぴりと痛いほどの空気や威圧に糸目の男はたえられなくなると、冷や汗をかきながら乾いた口で言った

「お、俺は関係ないからな！メアリーって子に、ちょっかいをかけようといったのも、今の話だって二人が勝手に始めたんだ!!」

糸目の男は悲鳴に近い声でそう言った後、大きく息を吸い込むと

「人を勝手に巻き込まないでくれ！お前らだけで勝手にやってる！？」

と言い放ち、その場から立ち去ろうと走り出した

「おい、待てよ！自分だけ逃げるつもりかよ！？」

ガタイのデカイ男はひとりで逃げ出す糸目を見て、驚いたように目を見開くと

ヒナは「やれやれ」といわんばかりに首を横に振り呪文のような言葉を呟いた

「糸目のお兄さん、どこへ行くの？」

「ひッ……」

逃げようとした瞬間、後ろからヒナの声が聞こえ糸目の男が肩を震わせる

すると足元から冷気が漂ってきたかと思えば、パキパキという音と共に自分の足が鉛のように動かなくなってしまった

「な、何だ!？」

糸目の男は咄嗟に自分の足元を見ると、そこら一面に氷が張りつめていて

靴の周りに氷が張りついていた

(くそ、化け物め！妙な技を！んなもん靴さえ脱げば！！)

糸目の男が靴を脱ぎ捨てようとかかたとを上げた瞬間、ヒナは「あ！」と声を出すと、少し困った顔で言った

「そうそう、この氷ね、触れたものを引っ付ける作用があるから素足で踏んだら皮膚に張りついて危ないよ？」

その言葉を聞いて男は冷や汗をあくと、慌てて足を靴の中へと納めたその様子を見たヒナは、今の状況には似つかない程の笑顔で更に恐ろしいことを言い放つ

「うん！剥がす時皮膚が裂けてかなり痛いし、大人しくしてた方がいいと思うー！」

にこりと笑って物騒な事をいうヒナに、糸目の男は身震いすると小さな声で「能力者【化け物】め…」と呟く

「化け物……か」

ヒナは自分の掌をじっと見つめると「確かにそうかもしれないね」と苦笑する

「ひ、ひいいいいいいいいッ！」

「だ、誰か助けてくれ！！化け物に殺される！？」

その様子を見ていた2人の男も、目の前の少女に恐怖を感じ逃げようとする

ヒナは眉をへんの字に下げる

「ひどいなあ……こんな物騒な通りに女の子を残して去っていくなんて」

「ッ!？」

一瞬横に冷たい風が走ったと思えば、後ろにいたはずの少女が目の前に立っていて2人はあぜんとすると、ヒナはにこりと笑ってこう

言い放った

「これが最後のちゅうごくだから、耳の穴をかつばじってよく胸に叩き込むんだよ？」

今回は傷害罪と暴行罪での警察おくりで勘弁してあげるけど、今度メアリーに危害を加えようなら、警察があんた達を裁く前に……私^ががてめーらを殺しに行くからな」

「ひひひひひッ!？」

暗い路地裏に男の叫び声が聞こえ、何事かと警察が駆けつけた時にはよほど恐ろしいものを見たのか、顔面蒼白にして気絶をしている。人の男の姿があったというらしい……

-
-
-
-
-

【次の朝】

「なあ、知ってるか？昨日のニュース」

「ああ、あの有名な三人組とうとう捕まったらしいぜ」

「マジで！？まあいつかは捕まるとは思ってたんだけどな…」

ライタの傷薬を買う為にメアリーはテッドと共に商店街を歩いていると、通りすがりに妙な噂を耳にして、隣にいるテッドのマフラーを引っ張った

「ねえ、さっきから街の人達は何を話しているのかな？」

メアリーの問いにテッドは頭を捻ると、ぶっきらぼうに「さあ？」
と言う

三人組と聞いた瞬間、メアリーの頭の中に昨日自分達を襲った男達の顔が浮かぶが、おそらく街中が噂になる程の人物ならナンパ連中ではなく凶悪犯か何かだろう

「観光地といっても、意外に物騒なのね……」

メアリーが街の様子を見渡して、そう呟いた時だった

「おや、偶然ですね！今日は黒髪の少年は一緒じゃないのですか？」

「？」

突然後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、2人は振り返ると茶色い髪の愛想がよさそうな青年が立っていた

「あ！」

その青年を見てメアリーは声をあげるのに対し、テッドは首を傾げると

「誰だこいつ、知り合いか？」と呟く

「ちょっと、昨日お世話になった人じゃない！もう忘れたの!？」

「うーん………忘れた!」

きっぱりとそう言い放つテッドに、メアリーはぎよっとすると耳元でひそひそと言った

「忘れたのなら仕方ないけど……とにかく昨日お世話になった人なんだから、失礼な態度を取っちゃ駄目よ!」

「はいはい……」

全く面倒くさいな

美人の女将さんや可愛い仲居さんの顔を覚えるのはともかくとして、
何で野郎しかもイケメンの顔なんて覚えなきゃならないんだ!？

テッドはそう思ったが、それを口に出すとめんどくさいことになることは目に見えている

(それに、世話になったならまず礼をするのが筋だしよ)

そう思いテッドは心中でため息をはくと、青年の顔をちらりとみた

「(うお！女みてーに顔が整ってやがるな、コイツ)あの、さっきは悪かった！昨日は世話になったのにあんないい方をしちゃってよ！確か観光案内をしてくれたんだよな？あの時は本当に助かった……」

バシッ

「違っわよー！テッドの馬鹿っ……」

メアリーに肩を叩かれ、テッドは「痛ッ」と小さく悲鳴をあげると「何すんだ？痛えじゃねーか！」と喋ってメアリーを横目で睨んだ

「何って…テッドがデタラメなことをいうからでしょ！？昨日ホテルの説明に来てくれた人じゃない！！本当に忘れてるのね！しかもそれを思い出したかのように知ったかをするなんて、何て人なの！？最低！！」

メアリーの言葉を聞きテッドはびっくりと顔を引き攣らせると、開き直ったように青年の顔をじっと見ながら叫んだ

「うるせー！俺は男で特にイケメンの顔を覚えるのが苦手なんだよ、一般的に顔が整ってるやつらって皆ほぼ顔が同じようなものじゃねーか！！いちいち個人との区別なんてつくかッ！！」

自分に反省をするどころか開き直るテッドを見て、メアリーは「まあっ」とあきれたような声をあげると
可哀相な者を見るような目をしてテッドを見た

「テッド、もしかしてカツコイイ人に対して嫉妬してるの？もしそうならみっともないからやめた方がいいわ！大丈夫、人間は中身っていつでしょ？」

「あ、でもテッドは中身も捻くれてるわね…」とぶつくさいうメアリーの様子を、テッドは顔に青筋をたてるながら見下ろすと、どす黒いオーラを放つ

「お前：人が黙ってりゃ好き放題いいやがって、俺が嫉妬？笑わせてくれる！俺のつぶらな瞳と愛嬌のある顔つきに比べりゃ、イケメンなんてどうってことないぜ！それに、男前の顔は3日見りゃ飽きるというもんな！男はやっぱ誠実さと愛嬌だろ！！」

ふふんと鼻で笑うテッドを見て、メアリーはため息をはくと

「何が愛嬌と誠実さよ…テッドの場合、誠実さも愛嬌もないじゃないかい」

とあきれたように呟いた

「あ、あのー…」

すっかり話に取り残された青年は、遠慮がちに話しかけると

ハツとしたメアリーは慌てて青年の方を見る

「ご、ごめんなさい！話しかけて下さったのに……あなたは確かホテルの説明をしてくれた人ですよ？あの時はお世話になりました！」

「いえいえ、あれは仕事ですから……私こそ顔を覚えて下さった上に、改めてお礼まで頂けて光栄です」

にこりと綺麗な顔で微笑まれ、メアリーが顔を赤くした瞬間
テッドは「ふーん」と言っつて不敵に笑うと、軽くメアリーの背中を
押した

「ッ!？」

何するのよ！

そう言っつてメアリーが振り返ろうとすると、テッドは手をひらひら
と振りながら含み笑いをしながら言った

「そういう事なら早く言えよ、俺そこの店で傷薬買ってくるわ」

「ちよ、ちよっと!」

メアリーは慌ててテッドの後を追いかけてよつとすると、青年に「あの…」と声をかけられ立ち止まる

「え……?」

声をかけられメアリーは振り返ると、青年はハツとした様子で「いや、すみません…何でもないです!」と言って目を背けた

「(どづかしたのかしら…)」

メアリーは彼の行動を不思議に思い、首を傾げていると青年は少し気まずそうに言う

「えっと・・・呼び止めた私がこんな事を言うのもなんですが、もうお連れの方は店の方へ向かわれたようですよ。行かなくて大丈夫ですか？」

青年は向こうで買い物するテッドにちらりと視線を向けると申し訳なさそうな顔をする

「そうね……………」

青年につられ、メアリーも振り返りテッドの方を見ると彼は店の人と話し込んでいて、しばらくはこちらへ戻ってこないだろうとメアリーは判断した

（この街の人達は私の事を知らない、だからリアンス家の長女として振る舞う必要もないし、ひよっとするとヒナちゃんの時のように仲良くなれるかもしれない！）

そう思い、メアリーは青年に話しかけようと顔を上げると、再び端正な顔で微笑まれ

思わず顔が赤くなってしまう

「だ、大丈夫です！テッドはあそこで店の人と話していますし！！あなたこそ、私と話をしている大丈夫なんですか？何か用事があるから商店街にいるんじゃない？」

「それなら大丈夫です、今日は仕事は休みですし息抜きに散歩していただけですから」

その言葉を聞いてメアリーはほっとすると、青年は向こうで必死に値引きをするよう頼んでいるテッドを見ながら呟いた

「それにしても最近、薬を買う人が増えてきましたね…誰か怪我をなさったのですか？」

「えっと……」

メアリーは大体のいきさつを青年に話すと、納得したようにうなづくところじに、青年は心配そうな顔をして呟いた

「成るほど、昨日そんなことが…大変でしたね」

「ええ、あの時はヒナちゃんがいなければどうなっていたか……」

昨日のことを思い出し顔を青くするメアリーを見て、青年は優しく笑うと穏やかな声で言った

「でも安心して下さい、街の人達の噂はもう聞いたかもしれませんが昨日の夜にその三人は捕まりました」

「……………え？」

思いのよらない青年の言葉に、メアリーはぽかんとすると、先ほどの街の人達の噂を思い出す

（そうなんだ、あの人達捕まったのね…）

その言葉を聞いてほっとしているメアリーを見て、青年は更に話を続けた

「噂では、昨日現場へ向かった警察が見失うほど彼らの逃げ足は速かったそうです……………しかし」

「……………？」

メアリーは次に出る青年の言葉を待つと、青年は難しそうな顔をして口を開いた

「そんな彼らが昨日の晩、誰かに襲われたらしいんです。路地裏で男の声らしき悲鳴が続き、街の人の通報で警察が駆け付けた所、気絶をして倒れていたと聞きました」

「え…警察が捕まえたんじゃないのですか？」

警察が駆け付けた所、気絶をしていたって……でもそのおかげであの三人は逮捕されたのだけど

一体誰がそんな事を……

すっかり考え込んでしまうメアリーを見て、青年は苦笑しながら

「あなた達が来る前からあの人達の行動は目に余っていました、だからいきさつが何にせよ、私はあの三人が捕まってよかったと思っていますよ。」と言った

(よかったのかな、これで)

青年の言葉を聞き、メアリーは少し納得が出来ない顔をして

「確かにそうですけど…」と呟いた瞬間、後ろから人の気配がしてメアリーはハッとした

「話はすんだか？」

いつの間に買い物を買ったのか、ポンと後ろから肩を叩かれ、振り返ると

両手に袋をぶら下げたテッドが立っていた

「う、うん！とりあえずひと段落…」

「そうか」

テッドはうなづく、再び青年の方を見て苦笑した

「悪いな！メアリーを相手すんの疲れただろ」

「ちょっと！それどついう意味！？」

聞き捨てならないと、メアリーはテッドに食ってかかるうとした瞬間
青年は少し嬉しそうな顔をして、メアリーを見た

「成るほど、メアリーさんって言うのですね！今更ですがあなたの
名前、知りたかったのですよー！」

「ッ／＼／」

あまりにも青年が素直に感情をあらわにするので、メアリーは恥ず
かしくなって思わず下を向くが、青年は更に言葉を続けた

「それに、メアリーさんは全然面倒くさくありませんよ！少しの
間で話が話せる機会があつてよかったと思つています！」

「おおっ！」

その言葉を聞き、テッドは感心したように声をあげると
肘でメアリーを突つきながらぼそりと呟いた

「ストレートな奴だな！こいつお前に好意があるっばいぞ！よかつ
たな、メアリー！！！」

「何言ってるのよ！？別に彼はそんなこと・・・！！！」

やりきれなくなったメアリーがてれ隠しにテッドのマフラーを引っ
張ると
それを見た青年は苦笑する

「やはり仲がいいんですね」

メアリーは気づいてはいなかったが青年の瞳が一瞬伏せられると、
それを見たテッドはめんどくさそうにため息をはくと

「あー、何を勘違いしてんのかは知らねーが・・・これを見てその言葉が言えるなんて、兄ちゃんスゲーわ」と呟いた

「おい、いいかげん離せ！苦しいだろ！？」

ようやくマフラーからメアリーを引きはがす事に成功したテッドは「ぜーぜー」と息をはくとくるりと2人に背を向けて言った

「それじゃあメアリー、少し名残惜しいかもしれないがライタが待ってる！そろそろ日もくれるし帰るぞ」

「わかったわ」

メアリーは青年にお辞儀をすると、お別れの言葉を言う

「ごめんなさい、ホテルに人を待たせているのでこれで失礼します。私もあなたとお話する機会があつてよかったです！それでは・・・」

再びお辞儀をして、メアリーは先に歩くテッドを追いかけようとするが
自分は大事なことを聞き逃していることに気づき、ぴたりと立ち止まる

「あの……」

「何ですか？」

今更なのでかなり聞きに行くいが、彼もヒナちゃんの時のようにまた何か縁があるのかもしれない
そう思い、メアリーは振り返ると少し気まずそうな顔をして呟いた

「今更ですが、あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「え、私のですか？」

こくん

とメアリーはうなづく、青年は少し照れくさそうに口を開く

「確かに今更ですね…わかりました、私の名前はジークと申します。また機会があれば話をしましょうね、メアリーさん」

ジークさんって言うんだ！

凄く礼儀正しくて、優しそうで、しかもカッコいいし

テッドも少しはジークさんのことを見習って欲しいわ

メアリーは今までのテッドの素行を思い出し苦笑するとジークに笑顔に向けて言った

「はい、ジークさん！あの、幼なじみの傷が治るまでこの街にいる予定なのでまた見かけたら声をかけて下さいね！」

「わかりました、それではまた…一日でも早く幼馴染の彼が早く回復するようお祈りしています」

そういつてジークさんと別れを告げた私は、先を歩くテッドの後を追いかけた

あれから5分

メアリーはジークと別れをすまししばらく歩いてみると、横からの視線が気になってメアリーはじろりとテッドを睨む

「何？」

「いや、何でも！ただジークには礼儀正しいんだなーって思ってよ」

「どつという意味？」

言葉の意味がわからずメアリーは首を傾げると、テッドは言葉を続ける

「態度や言葉使いの話だよ、お前ジークの前だと女の子らしいっつか素直ってどうか……とりあえず、いつもメアリーがああいう風になればなーって思っていただけだ」

「何ですって！？？ということは、普段私のことをどつという風に見てるのよ！！遠回しに素直じゃないとでもいいたいの？」

ぱーっとフグのようにパンパンに頬を膨らませるメアリーを見て、テッドは「スゲー顔……」と言って苦笑する

「ま、お前がヒナやジークと仲良くなるのは勝手だが、リアンス家

の話は禁句だということはわかってるよな?」

テッドの問いに、メアリーは下を向くと「わかってるわよ……」と
呟いた

「それならいいんだが……」

テッドはちらりと後ろを振り返ると、ホテルにひとりまつライタの
顔を思い浮かべ苦笑する

「さ、早く帰らねーと顔の怖い幼馴染の顔がさらに恐ろしくなるぞ
!ま、何か言われたらメアリーのせいにするから別にいいんだけど
な!」

「な……!」

その言葉を聞いて、目を吊り上げるメアリーをテッドは面白そうに
見下ろすと小さく笑った

「ちょっと、待ちなさいよ!」

後ろから必死に追いかけてくるメアリーを見てテッドは

「よお、遅かったじゃねーか！」

ホテルへ戻ると、大分傷は回復したらしい
ライタが自分の力でベッドから起き上がるのを見て、テッドは苦笑
すると

買ってきた薬をライタに向かって投げた

「悪い、ちとメアリーの知り合いにあったんだ。ほらよ、安物の薬
や湿布で悪いな」

「サンキュー」

ライタは薬をキャッチすると、さっそくズボンの裾をめくり包帯を
外す

「ッ!？」

よほど強く殴られたのか、ライタの脚は青く腫れ上がっていて
メアリーは思わず目を背けそうになるとどろじに、昨日の出来事が
頭の中でフラッシュバックした

「ライタ……」

「何だ？」

「ごめんなさい、私のせいで……」

突然しおらしくなるメアリーを見てライタはギョツとすると

「何だよ突然!？」と言う

「だって……」

あの時私があの人達に突っ掛からなければ、ライタは喧嘩しなくてすんだのかもしれない……
それに自分が巻いた種なのに、助けを呼ぶとはいえ、私はライタを追いて逃げてしまった………

何も言うことができず、下を向いてしまうメアリーを見てライタはため息をはくと、乱暴にメアリーの頭を撫でる

「…そんな顔すんな、確かにお前があいつらに喧嘩を売ったことは驚いたが、初めからやつらからは殺気が出ていた……どっちみちこうなることには変わりはない」

「でも!」

私はライタを追いて……

そう言おうとする前に、ライタはメアリーの言葉を遮って話を続ける

「またお前の悪い癖が出る前に言わせて貰うがよ……俺は嬉しかったぜ」

「……………は？」

思いがけないライタの言葉に声をあげたのは、メアリーではなくてテッドの方だった

「お前、あれか？殴られたりいたぶられると喜ぶ類の……………」

「うるせえ！違えよ、お前空気読めねー奴だな！！今メアリーと会話してんだよ！入ってくんな、この方向音痴が！！」

方向音痴という言葉にテッドは大きく反応すると、ギロリとライタを睨みつける

「なんだ？このクソガキ！お前こそ年上に向かってその口の聞き方

は何だ！？俺は方向音痴じゃねーし、空気も読めるぞ！大人を見くびるなよ？」

先程の雰囲気とは打って変わって、部屋の中は二人の怒声で賑やかになり

メアリーはぼかんとしていると、今まさにテッドの胸倉を掴んでいたライタと目が合い、ドキリとする

「…おい、メアリー！違うからな、こいつのいうことを間に受けるなよ！？」

「う、うん……」

メアリーはライタの剣幕に思わず視線をそらすと、胸倉を捕まれたテッドはライタの腕をガシッと掴み、苦しげに言った

「おい、首しまってるって！ほんとマジ苦しい…つか服のびるから！！ライター！そうなたら弁償して貰うからな！！あと、俺の威厳と名誉と心を深く傷つけた感謝料もちゃんと含んでいつかまとめて

…おい、聞いてるのか!?!ちっとは返事をしたら…」

ぶちんッ

「ぶちん?」

ライタの頭から何かが切れる音がしてテッドは首を傾げると、ライタはクワッと瞳孔を開かせると、血走った目でテッドを睨みつけた

無理矢理テッドを部屋の外へ追い出しドアを閉めた後、ライタは長いため息をはくと、再びメアリーの方を見る

「……………」

そして短い沈黙が続いた後、ライタは頭をガシガシかくと「ったくと呟く

「テッドの言うことは気にすんな、あいつの言う事はほとんどデタラメだ……」

「う、うん」

ライタの言葉にメアリーを小さくうなづくと「あの……」と言う

「何だ？」

「さっき、嬉しかったって言ってたよね、あれはどっいっの意味？」

メアリーの問いに、ライタは「あー、あれか」と呟く

「お前は、自分があいつらに喧嘩を吹っかけたせいで俺がこうなっ
たと思ってるだろ」

「うん……」

メアリーはうなづく、ライタは眉間にシワを寄せる

「さつきもいったが、あいつらは初めから喧嘩を吹っかける気だっ
た！お前が気にする必要はねえ！！それに……」

「？」

メアリーは次に出るライタの言葉を待つ

「それに、あの時俺の悪口をかばってくれただろ！確かにそれが原
因で喧嘩になったかもしれないが、俺は嬉しかった」

「ライタ……」

メアリーはライタの言葉を聞いて、申し訳なさで下を向くと

頭をガシガシと撫でられ、涙が出そうになる

ライタは怒ると思つてた…

自分のせいでこんな目にあつて、その上助けを呼ぶとはいえ私はあの場から立ち去つた

「ごめんなさい、あの時立ち去つてしまつて」

それなら怒られて罵倒された方がマシかもしれない
許して貰つことがこんなにもつらいことがあるなんて今まで知らなかつた……

下を向いて、溢れでる涙を隠そうとするメアリーを見て、ライタは複雑そうな顔をする

メアリーの顔を両手ではさみ、自分の方へ向かせた

「これでいいんだよ！」

「!？」

突然のライタの行動に、メアリーは目を見開く

「お前は喧嘩もロクにした事もねーし、あの場に残っていたらお前まで怪我してたかもしれないねーだろ！」

「……………」

確かにそう、私があの場合に残っていてもあの人達を止めることができなかつた
いつもライタに偉そうなことを言ってる癖に、いざという時の私は

無力だ……………

「だからメアリー……………」

それでも何かを言おうとするメアリーをライタは真剣な表情をして見つめると、静かな声で言った

「ひとつ約束しろ……」

「？」

何故今の状況でその言葉が出て来るのかメアリーは疑問に思っていると、ライタは言葉を続ける

「俺達のような世間知らずが旅をするんだ、これからも危ない目にあつかもしれないし、また昨日のようなことが起こるかもしれない」

昨日みたいな事が……

メアリーは昨日の出来事を思い出し、顔を青くすると、その様子を見たライタは少し表情を和らげて言った

「お前の性格上、俺の言うことに不満を感じるかもしれないがこれ

だけは言っておく……」

次の言葉を待ち、メアリーはごくりと唾を飲み込むと
ライタはとんでもないことをいい放った

「もしこの先、昨日みたいなことがあったとしたら、例え仲間が傷つこうとも迷うことはねえ！自分が少しでも危険だと感じれば【すぐに逃げる】」

「!?!?」

その言葉にあぜんとするメアリーを見て、ライタは苦笑すると更に言葉を続ける

「正直昨日はお前があの場合から去ってくれて助かった！だからその

「ことで気に病むこともないし、俺を心配する必要もない」

「そんな……」

メアリーはライタが言う約束というものに納得出来ず、否定の言葉を言おうと口を開きかけるが

ライタの否定の言葉を許さないような強い瞳に、メアリーは思わず息をのんでしまう

黙り込むメアリーを見て、ライタは複雑そうな顔をする

「お前は闘いはおろか、喧嘩すらしたことねーだろ！俺達を気づかって一緒にやられるよりはそっちの方が随分マシだ」と呟く

「……………ッ」

ライタの言葉に、メアリーは唇を噛み締めるとギョツと拳を握りしめる

確かにあの時私が残っていても、あの人達を止められなかった

ライタが私を心配してそう言ってくれていることはわかる

自分が皆の脚を引っ張る存在なんだって、この旅で思い知らされた

(それでも私は……)

下を見て何も言わなくなったメアリーを見て、ライタは肯定だと受けとったのか再びベッドに寝転がると

「そういうことだ、薬も効いてきて眠くなったしそろそろ寝るわ！メアリーもあまり夜更かしするんじゃないぞ」と言って大きく欠伸をした

「……………」

「……………」

「—す」

「……………」

しばらくするとライタの寝息が聞こえ、メアリーはホッとすると
ライタが散らかした湿布のクズを回収する

(よかった、テッドが買った薬が効いてきたみたいね)

すやすやと気持ちよさそうに寝るライタの寝顔を見て、メアリーは苦笑をすること
ぼつりと呟いた

「ごめんなさい、さっきは返事ができなかつたけど、その約束…守れるという保証は出来ないわ」

消え入りそうな声でメアリーはそう呟くと、その声に反応したライタが小さく身じろぐ

「起こしたらマズイわね、私もそろそろ寝ようかしら……」

メアリーはガチャリと部屋の扉を開けると、そこには追い出された
筈のテッドの姿はなく
人気のない廊下が延々と続いていた

(そういえば、テッドが鍵を持ってるんだっけ……)

じゃあ鍵を閉めて寝ても大丈夫だね……

ガチャッ

そう思ったメアリーは用心の為、部屋の鍵を閉めると
ベッドの中へ入る

「その頃」

「へえ…それはなかなか傑作な話だね、まさか彼にそのような弱点があるなんて…」

「はい、間違いありません！【彼女】からの情報ですから………」

「くく…面白い」

セントリアより更に北部にある【帝国参謀本部基地】

その中にある、うす暗い資料室で【壊滅都市ヘルズ王国】と書かれた本を読んでいた人物は
黒の混じった青い髪をなびかせると、仮面越しにくすりと笑った

「僕と違ってイオス隊長は真面目だからなあ………」

仮面の男はパタンと分厚い本を閉じると、部下の少年の方を見た

「彼、メアリー様の保護の為頑張ってるみたいだけど、僕の方はすぐに追い詰めるよりも今は様子を見た方がいいんじゃないかと考えているんだ」

「様子見…ですか」

「うんー」

部下の言葉に仮面の男は楽しそうにうなづくと、持っていたコップにビシッとヒビが入る

「だつてさ……」

少しずつ、ガラスのコップにヒビ入っていく過程を男は静かに見つめると、静かな声で言った

「ある程度信頼関係を築かせてから、引きはがした方が面白そうじゃないか…」

ミシミシッ

パリンッ

ガラスのコップが割れるとどろろに、掌から自分の血が混じった紅い液体が流れ、

それを男はゆっくりと舐め取ると、紅くなった口を袖で拭った

その姿を見て部下の男は、目の前で口を歪めて笑う上司の姿に恐怖を感じ、目を逸らす

「ですが、私はイオス隊長に応援を呼ぶよう命を受けています！確かにあなたは参謀で、イオス隊長より位が上かもしれませんが・・・」

部下の男はごくりと唾を飲み込むと、まっすぐに仮面の男を見て言った

「私の上司はあなたではない、イオス隊長だ！」

「イオス隊長…ねえ」

部下の言葉に仮面の男は目を細めると、部下はしまったとでも言うように手で口を覆う

「成る程！君、確かフウヤ君だけ？噂以上にたいした忠誠心だ・・・僕に対してここまで言える人は珍しい……」

椅子から立ち上がり、ゆっくりと近づいてくる仮面の男にフウヤは恐怖を感じ、思わず後ずさると

その様子を見た仮面の男はニヤリと口角をあげる

「でも、まずその震える足を何とかしないとね？大丈夫、別に怒ってないからさ！気にしないで」

「……………ッ」

自分が怯えていたのを悟られ、フウヤはぎゅっと唇を噛み締めると、仮面の男はくすりと笑った

「わかった、君のイオス隊長に対する誠意に免じて今回は援軍をお

くるよ！そのかわりと言ったら何なのだけど………」

ぐいたと腕を掴まれフウヤは慌てて身を引こうとすると、仮面の男は更に顔をフウヤに近付け、至近距離で囁いた

「僕からの伝言をイオスに伝えてくれないかな？たいした内容ではないのだけど、あいにく僕から彼には伝えられない状況だね」

「……………わかりました」

「ちょっと待ってて、伝言をまとめるから」といって紙を取り出す
仮面の男を見てフウヤはぎゅっと拳を握りしめ

「隊長の皮を被った悪魔め……」と誰にも聞こえない声量でぼそりと呟いた

その時の私達は、自分達に迫る脅威に気づかず

ウンディーネの街の中で、平和な夜を過ごしていた

第1話 忍びよる魔の手（後書き）

ウンディーネは、ドイツ語で水の精霊という意味があります

第2話 つかの間の休息

ザザーンッ

「あれ、テッドじゃん！こんな夜中にひとりで散歩？」

「ヒナ…か」

夜中の12時

ひとり淋しく岩辺で佇むテッドを見かけたヒナは、首を傾げると
「散歩…ではなさそうだね、背中から哀愁が漂ってるし、何かあった？」と言ってテッドの隣にちょこんと座った

「ああ、ちょっといろいろあつてな…話すとき少し長くなるんだが」

「うんうん」

テッドはライタから部屋を追い出された過程をヒナに話すと
「成る程：それでライタという人に部屋を追い出された訳だ」と言
って苦笑された

「笑い事じゃねーよ！」

テッドは苦笑するヒナを見て、勢いよく立ち上がると拳を握りしめ
て、クワツと瞳孔を開かせた

「それでよ、あれから時間が経ったから部屋へ戻ったんだ！そしたら……」

「そしたら？」

何故かワクワクした様子でヒナは次の言葉を待つと、テッドは顔に青筋を立てて呟いた

「鍵が閉められてたんだよ！しかも、運悪く部屋に鍵を忘れちまうしよ……俺に帰ってくるなどでもいいのわ！あいつら！」

「あちゃあ……」

その言葉を聞いて、流石に同情したヒナはテッドの肩をポンと叩くと「お互い大変だね」と言って立ち上がった

「もう少しテッドの話を知りたい所だけど、これから用事があるからそろそろ行かなきゃ！でも最後にいいことを教えてあげる」

(いいことって何だ?)

テッドは首を傾けると、ヒナは何故か得意げな顔をしてニヤリと笑う

「方向音痴のテッドでもわかる所だから安心してね！あの階段を10段程登った後、上を見てみる？いいものが見つかるから」

「いいもの……?」

テッドは「そこに何があるんだよ」呟き、再びヒナの方を見た瞬間だった……

「あれ？あいつ、どこに消えて……」

テッドはまわりを見渡すがヒナの姿はどこにもなく、ただ静かに波の音が聞こえているだけだった

「本当、変な奴……海で溺れていたわ、突然いなくなるわ、俺が方向音痴なのを知っているわ……って！？何であいつ、そんなこと知ってるんだ！？」

『方向音痴のテッドでもわかる所だから安心してね！あの階段を10段階登った後、上を見てみ？いいものが見つかるから』

先程ヒナに言われた言葉を思い出し、テッドは顔を青くするが階段を10段階上がった話が気になり、テッドはその場所へ向かうと小さく悪態をついた

「……たく、あいつは何者なんだ！？前は助けて貰ったりつい愚痴をこぼしてしまっただとはいえ、かなり怪しいしよ……信用してもいいのか？」

初めはヒナに対しては警戒心がなく、ただの少女なのかと思っていた

しかし……

「あの壁破壊といい、瞬時に姿をくramsといい……ただものではないことは確かだよな……」

テッドは「うーん」と小さく唸ると、階段を上がり始めた

「ま、悪い奴ではなさそうだし信用してもいつか！たしか10段目だったよな」

テッドは階段を上がり、10段目にさしかかった所でヒナの言うつ通り上を見上げると「なるほど、こつという訳か」と呟く

「たしかにこれはいい……この場所なら人からも見つかりにくいし、野宿には持ってこいの場所だな」

テッドはひょいっと素早く木の上に登ると、おそらく人口的に造られたのだろう、人が1人寝ころべる程のスペースがある木で出来た家・・・いや、秘密基地のような隠れ家があり、ほっと息をつく

「あいつ（ヒナ）が造ったのか？それにしてもよくできてんな、俺にはちと狭いがこれなら安心して野宿ができる」

「今度あったら礼をいわなきゃな」とテッドは呟くと、ごろんと横になり

穏やかな海の音をききながら、静かに目を閉じた

【ガンジス村宿】

「イオス隊長、昨晩は何処へ行かれてたのですか？皆あなたのこと捜していましたよ」

グランに迎えいれられイオスはガンジス村の宿の中へ入ると、自分の荷物をドサリと置く

「いくら隊長が強いとはいえ、最近は何事かですよ！出かけるなら一言かけて下さい」

「すまない、心配をかけたな……」

イオスはそういつて懐から地図を取り出すと、たんとんと言う

「メアリー様の搜索の為、一晩中ここらを探索したものの姿はおるか心配すら感じられなかった」

「隊長、仕事で出かけてたのですか!？」

「相変わらず仕事熱心ですね」というグランの声を聞き流し、イオスは話を続ける

「おそらくメアリー様はウンディーネという街で滞在をされている、ここから近い街といえばそこしか心辺りがない」

「なるほど……」

グランは地図を広げるイオスの手を見て「ん？」と目を凝らした

グランが地図から目をはなしたのに気づき、イオスは「何だ？」と問いかける

「イオス隊長！それは！？」

「？」

イオスはグランの視線が自分の手に注がれていることに気づき「ああ、これか」と呟くと
何事もないように再び地図に視線をおとす

「馴れない道の探索だったからな、途中木などで切ったのだろう」

「切ったのだろうって…掌から血が出てますよ！手当をしますので、じっとしていて下さい！！」

救急箱を開け、手際よく手に包帯を巻くグランを眺めながらイオスは「大袈裟だ」と呟く

「そつえば！」

包帯を巻き終える頃に、グランは思い出したように呟くとイオスは「何だ？」と言う

「実は隊長と入れ違いにフウヤが帰ってきたのですが【隊長に報告がある】と言って出ていきましたよ、おそらくここで待っていてれば彼も戻ってくるでしょう」

「そうか…：そういうえば無線でも大事な報告があると言ってたな」

イオスはフウヤに連絡する為懐から無線を取り出すと、グランに向かって言い放つ

「フウヤが戻ってきて次第、ウンディーネに出発する！ それまでここで待機をしてもらう」

「わかりました！ それでは私が他の隊員にも伝えてきます、隊長は休んでいて下さい」

そういって、部屋から出ていくグランを見てイオスはため息をはくと

結局あの場所で野宿をしたテッドは、ジンジンと傷む背中を手で抑えながらジロリとライタを睨んだ

「お前も俺に何か言うことあるだろ！ふて腐れてないでメアリーみたいに素直に誤ったらどうなんだ！？」

その言葉にライタはぴくりと目元をひくつかせると、テッドのもとへと歩いてきた

「悪かったよ、だがお前にも非はあっただろ……鍵を持たずに出歩くか？普通」

「だからお前に追い出されたから鍵を持つ暇もなかったんじゃないか！？開きなおってんじゃないぞ、クソガキッ！！」

テッドはその場で立ち上がり突然上の服を脱ぎ出すと、メアリーは顔を赤くして「きゃあ！？」と叫んだ

「お前、メアリーの前で何をやってるんだよ！？」

突然のテッドの行動にライタとメアリーは目を見開くと、テッドは青くなった背中を指をさして言った

「昨日木の上で寝ててから落ちたんだよ！見てみる、この痛々しい背中を！！」

「木から落ちた？何でまた……」

ライタは意味がわからんと首を傾げるのとは対象に、メアリーは顔を青くすると

「大変！？青くなってるわ！！すぐに手当を……いや、病院に連絡しないと！」と叫び、慌てて部屋の電話に手をかける

「ストップ！電話しなくていいから、つかお前大袈裟すぎ！？んなもんほっとけば治るし……」

電源に手をかけるメアリーを阻止しようとテッドはメアリーの手首を掴む

「離しなさい！？ライタ、何が何でもテッド病院へ連れていくわよ、早く彼を取り押さえて！！」

「マジかよ！？」

テッドはその言葉を聞いて、顔に青筋を浮かべると

「くそ、病院に連れていかれてたまるか！？」と叫び、窓から飛び降りる

「あ、逃げた！？」

「あいつ、上半身裸で外に出やがったぞ！？」

メアリーとライタはテッドの行動にあぜんとしていたが、いち早く正気に戻ったライタがぼつりと咳く

「あ、そついやこころ3階……」

ガッシャーーーーン

「ぎゃあああッ!?!」

「うわああああッ!?!」

ライタがそう言ったとどろじにテッドと誰かの悲鳴が聞こえメアリーは慌てて窓から身を乗り出すと、窓の外で起こった光景にメアリーはギョツとする!

「ちょっと、ライタ!大変よ!?!」

「そりゃ3階から飛び降りたら大変なことになるだろうよ」

「そうじゃなくて!」

メアリーに腕を引っ張られライタもしぶしぶ外を見ると、その光景にライタもギョツとして思わず窓から身を乗り出して叫んだ

「あんの馬鹿!?!何をやって・・・おい、今すぐ下へ降りるぞ!?!」

「う、うん!!」

メアリーは顔を青くしながら返事をする。すぐに走り去っていくライタの後を追いかけた

.....

「本当にすみませんでした!!ほら、テッドも謝りなさい!!」

メアリーは目の前の金色の髪の毛を鷲掴みにして無理やり頭を下げ
さすと

テッドは「痛い痛い、ちょ・・・抜ける抜ける!マジで禿げるって
!?ライタくん、助けて〜!!」と叫び、ライタに助けを求める

「さつき、俺にクソガキといったくせに調子いいぜ……人様に迷惑をかけたんだ、しばらく反省してろ」

「そんな冷たいこといわずに助けてくれよ！こいつ、お前の幼馴染だろ！？」

ぎゃーぎゃーとテッドとライタが揉めている中、テッドの髪を掴みながら頭を下げるメアリーを見てジークは

「確かに驚きましたが、怪我もないですし大丈夫ですよ！そろそろ許してあげたらどうですか」

と言って苦笑した

「本当に悪かったな！怪我がなくてよかったが、運んでたグラスを台無しにしてしまっただろ」

ようやく解放されたテッドはちらりと粉々になったグラスを見ると、ライタはため息をはく

「まったくだ、弁償ものだけこりゃ……」

その言葉を聞き、ジークはいち早く反応すると「とんでもない！？」とでもいうように手を横に振った

「いッ．．．!?」

軽く触れられただけでも腕に激痛が走り、テッドは冷や汗をかくとジークは「成るほど．．．」といって納得したように呟く

「3階から飛び降りてこの程度の怪我ですむだなんて、すごいですね．．．これなら完治とまでは無理ですが、一時的に痛みを取ることはできます!おこがましい話かもしれませんが私にも手伝わせて下さい!」

「一時的につて．．．できるのかよ」

疑わしい目でジークを見るライタに対し、ジークはにこりと笑いかけると

再びテッドの腕に触れた

「．．．．．ッ」

痛さで顔を歪めるテッドにジークが「すみません」と謝ると、もう片方の自分の手をテッドの負傷した手にかざし
何かを唱え出した

「おい、メアリー」

「何？」

メアリーは、ジークの行動を見て首を傾げていると
ライタに耳打ちされる

「あいつ、本当に信用できるのか？テッドを任せて大丈夫なのかよ．
．．．」

何故だか異様にジークを警戒するような発言に、メアリーはため息
をほく

「ライタ．．．人見知りなのはわかるけど、いくらなんでもそれは
失礼なんじゃないの？」

注意をされ、ライタは「うっ」と声をあげると
メアリーは困ったように笑うとライタに言った

「でも、テッドを心配してそう言ってくれたんだよね．．．大丈夫、
ジークさんは悪い人じゃないわ！だからそんなに構えなくても大丈夫
だよ」

「はあ！？俺は別に、テッドのことなんか．．．」

少し顔を赤くして反論するライタを見て、メアリーはくすりと笑うと再びテッドとジークに目を写す

「あ、テッドの顔色が！それに背中の中の腫れも少し引いて・・・」

ジークはテッドの腕から手を離すと

テッドは「おおッ」と歓声をあげて、負傷した腕や背中をぺたぺたと触ってみる

「お前すげーな、治療術が使えるのかよ!？」

「はい、ですがやはり完治とまではいきませんでした・・・すみません」

悔しそうに謝るジークにテッドは「いや、たいしたもんだ」と笑いかける

「何を謝る必要があるんだよ、痛みを取って貰えただけでも十分だ！ありがとな、ジーク！」

「いえ、お礼を言われるようなことは・・・」と言って頬を掻くジークの前にメアリーとライタも立ち、それぞれお礼の言葉を言うと

ジークは顔を赤くしてごほん咳払いをした

「ただ、痛みを取っただけなので安静にしていして下さいね！私はここを清掃する準備を致しますので、失礼します！」

「あ……………」

すたすたと逃げるようにして去っていくジークを見て、メアリーは残念そうな声をあげると
テッドはにやりと笑ってメアリーに耳打ちをした

「残念そうな顔をしゃがって、お前ってわかりやすいんだな」

「はああああ!?!」

メアリーが素っ頓狂な声をあげるのを聞き、テッドはおかしそうにくくつと笑つと

今度はちらりとライタを見た

「そついやお前さ、すげージークに対して警戒してたよな」

「別に……………」

ライタはぶつきらばうに返事を返すと、未だに顔を赤くして一人ぶつぶつ言うメアリーをちらりと見る

「あいつが信用してるんだ！それにあなたの怪我を治したりするくらいだ、だから悪い奴ではないんだろ」

「ははーん、成るほどー」

テッドはライタの肩に腕を回すと、メアリーには聞こえないくらいの声でぼそりと言った

「お前さ、前から思ってたんだけどよ……メアリーのこと好きだろ？」

「なッ！な、な、何を言ってる／＼／＼／＼！？」

明らかに動揺するライタを見て、テッドは新しいおもちゃを見つけたように、にやりと悪そうな顔をして笑うと「ビンゴー！」と呟いた

「テメー、何がビンゴだ……」

ギロリとライタに至近距離で睨まれ、テッドは「顔怖ッ」というと、がしがしとライタの頭をなでる

「前から気になってたんだよなー！お前メアリーに対して【だけ】は優しいし、ただの幼馴染がこんな危険な旅に文句も言わずについてこねーだろ」

「ぐ……」

核心に触れられ、ライタは冷や汗を流すと
テッドはとどめの一発をお見舞いする

「それによ、お前あの時言ってただろ？（ライタの声真似をしながら）
【言っただろ：俺はお前の味方だって！どっちを取っても怒
ったりしねーよ】てよ！やっさしく、普通気のない女にそんなこと
言わな……ぐほおッ!？」

「言っつな!！」

ライタは至近距離にあったテッドの顔面に頭突きを喰らわせると
鼻血をたらしながらテッドは起き上がり、すぐさまライタに抗議を
する

「痛えな！俺のビューティフルフェイスに何てことをするんだ!？」

鼻血をぼたぼたと垂らしながら瞳孔を開かせて詰め寄ってくるテッ
ドに

ライタはため息をはくと、白けた顔をしてテッドを見た

「お前さ、自分でそんなこと言っつてむなしくな……」

「だまれ小僧」

ライタの言葉を遮りテッドは低い声で言っつと

さすがに自分の世界に入っていたメアリーも2人の異変に気付き、

ハツとする

「ちよ、何でそんなに険悪な雰囲気になってるのよ!? それにテッド、何で鼻血を垂らしているの!?!」

突然間に入ってきたメアリーに、テッドはぎよつとしつつも「おう、聞いてくれよ!」と言って、メアリーの肩をがしつと掴む

「ライタのやつ、いきなり俺の顔面に頭突きをしたんだぜ! ひでよな、お前からも何か言って・・・」

「テメー・・・もう一発喰らわせてやるうか! ちようど頭も太陽で焼けて温まってきたところだぜ・・・」

「わ、悪い! そんな怒んなって・・・今はジョークだってジョーク!」

テッドは頭突きをされないよう、ライタの頭をがしつと掴むとライタはムキになって自分の頭からテッドの手を離そうとする

「くそっ! はなせ、テッド!?!」

「はん、やなこった! お前なんてこうしてくれるわ!」

「ぎゃーッ!? 上半身裸で抱きついてくんな、暑苦しい! そして気持ち悪い! メアリー、この馬鹿をどうにかしてくれッ!?!」

顔を赤くして、ライタはテッドの腕から逃れようともかくライタを見て

メアリーはあぜんとしていたが、ふとライタに違和感を感じメアリ

「は「あれ……」と眩く

(ライター初めて出会った時とは違って、テッドを見る目に敵対心がない……)

ライターのテッドに対する態度ははじめと全く変わってないし、はたから見れば中が悪そうに見えるけど……

「なるほど、そういうことが」

メアリーは、テッドから逃げ回るライターを見てくすりと笑うと

「あーあ、心配して損した」と呟いた

確かにさっきはまた険悪な雰囲気で心配したけど

なんだかんだ言ってテッドはライターが怪我した時は薬を買いにいってたし

ライターもライターでさっきテッドの事を心配してたし……(本人は否定してたけど)

初めはどうなるかと思ってたけど、結局私よりテッドに懐いてるじゃない

2人のやり取りを見て、メアリーは「くすくす」笑っているとテッドは「何笑ってんだよ」と言ってメアリーを睨んだ

「何でもないわ」

「全く・・・」

テッドはふう・・・と息をはき「とりあえず暑いし、ホテルに戻るか」と言つと、賛成したメアリーは何故かノリノリで2人の前を歩きます

「どうしたんだ、あいつ？」

ライタの問いに

「さあ、暑さにやられたんじゃないの？」とテッドがいつと、ライタは無言でテッドの横腹に攻撃をしかける

「痛ッ、お前怪我人に・・・」

「なあテッド、さっきの話の続きだけだよ」

「おい、俺の話は無視かよ!？」

テッドはライタにくっつかかろうとするが、あまりにも今の状況とは似つかない程

真剣な表情をするライタを見て「なるほどな・・・」とって苦笑する

「大丈夫、お前がメアリーを好きって話誰にも言わねーよ!本人も気づいてねーみたいだしな」

「ああ、頼む!秘密にして・・・ってち、違うッノノノその話じゃねーよ!」

ライタはごほんと気を取り直すように咳払いをすると、ひそつとテッドに耳打ちをする

「さっき、あんたの怪我を治した男・・・確かジークつつたけな」

「ああ、そうだけど・・・ジークがどうかしたのか？」

テッドは首を傾げると、ライタは更に小さな声でテッドに言った

「確かにあいつは感じがよくて、あんたの怪我を治すくらいだ・・・お前達の言う通り悪い奴ではないのかもしい・・・だが俺は」

「なるほどな、メアリーの言う人見知りスキルが発動した訳だ」

テッドは、ライタの頭をがしつと掴むと
わしゃわしゃと頭を撫でた

「それにメアリーのやつ、ジークに懐いちゃまってるもんな！そりゃ惚れてる女に近づいてくる男を好きになれっていうのは無理な話だ」

「……………」

テッドは黙りこくるライタを見て苦笑すると
苦笑をしながら言った

「それに、初めからお前ジークのこと苦手ばかったしな！人それぞれ会う会わないがあるんだし、仕方ねーよ！！」

「いや、俺は……………」

「ちょっと、何2人で喋ってるの？早く鍵あけてよ！！」

ライタが何かを話そうとした瞬間、メアリーに声をかけられ
テッドは「悪い」と言うと、ライタのポケットから鍵を抜き取りメアリーと共に部屋へ入る

「ライタ、入らないのか？早くしねーとお前の分まで飲むぞ？」

ひょこつとドアから顔を出すテッドを見て、ライタは苦笑すると

「別にいい、少しホテルを散歩しにいつてくるわ俺」

と行ってその場から去って行ってしまった

「ちょっと、怪我だって治ってないのに一人で何処に！？それにまた、前みたいに絡まれたらどうす……あれ、いない」

メアリーはきよろきよろと辺りを見回すが、ライタの姿は何処にもなく

左右に廊下のみが続いており、メアリーはため息をはいた

「ま、あいつの場合顔が怖いから、絡まれる前に相手も逃げ出すだろ！それにこの前ライタをぼこつた犯人も掴まったいてーだし、大丈夫だろ」

予告した通り、ライタの分のお茶を飲むテッドをメアリーは呆れたように見ると

「もう、2人ともしょうがないんだから！何かあってからでは遅いんだからね」

と言って、テッドからライタのお茶を引きはがした

「ライタの分、取っておきなさいよ……！」

ライタはジークの笑った顔を思い出すとぞつと背筋が凍りつく

「でも多分、俺の気のせいだよな・・・昔からよく警戒心が強いってメアリーに言われるし、いつもの悪い病気だ！」

ライタは誰にも聞こえない声で自分に言い聞かせるようにそう呟いたあと

ぐつと自分の拳を握り絞めた

第2話 つかの間の休息 (後書き)

主人公の扱いが酷い件・・・

第3話 異変（前書き）

初めに

事故により投稿した小説を消去してしまった為、覚えている範囲で第3話【異変】を書きなおしました！

物語が進む上での変化はあまりありませんが、作者の暴走でライタとテッドの会話が前回よりもだいぶ長くなっています（<―>）
作者の勝手にこのような事態になったことを深くお詫び申しあげます！！

第3話 異変

「さてと、頭もいい具合に冷えてきたとしたしそろそろ戻るか・・・」

「ライタがそう言って、岩から腰を上げた時には日が暮れかけていて「もうこんな時間か」と呟くと、岩から重い腰をあげた

「ジークに関してはあまり考えなくてもいいか、この街を出たら【関わりがなくなるんだ】あまり深く考えるのはよそう」

ライタはぼそりと呟いて、ホテルに戻ろうとした時だった

「!?!」

後ろから何やら殺気のもののような気配を感じバツと振り返ると

「確か、ライタさん・・・でしたっけ? こんばんは」

「ジ・・・ジーク!」

両手に果物を持ったジークが満面の笑みを浮かべ、今まさしくそこに立っていた……

第3話 【異変】

「はあ、はあ……」

「こら、あなた達！？病院内で走られては他の患者に迷惑ですよ！？」

病院関係者の注意の声すら全く耳に入っていない様子でメアリーは病院内を走りまわりながら隣にいたテッドに話かけた

「テッド……どうしよう！？ライタが刺されたって……」

「落ち着け、ジークからの連絡じゃ死んではないって言ってただろ！？このまま走りまわるのも時間の無駄だ！誰かに聞いた方がい

いんじゃないか？」

テッドとメアリーは息を整え、近くにいた治療師に聞くと、ライタは【診察室】にいるらしい

「よし、診察室だな！行くぞメアリー！！」

「ええ！ありがとうございます！！」

そう言って走り去っていく2人を見て、治療師は「廊下は走らないで下さい！」と注意をした後・・・「あれ、そういえばあの子・・・どこかで見たとような気が」と首を傾けた

「ライター!？」

メアリーとテッドがライターの元へたどりついた時にはすでに診察は終了し、個室に運ばれていた

「ジークさん、一体何があったのですか!?ライターは助かるの!？」

「落ち着け、メアリー!」

ベッドへ横たわるライターを見て慌てて駆け寄ろうとするメアリーをテッドはなだめると、下を向いて黙りこんでいるジークに向かって言った

「なあ、ジーク!お前も顔真っ青だぞ・・・大丈夫か？」

「テッドさん・・・」

ジークは真っ青な顔をしながらテッドの方を見ると「すみません・・・私のせいで・・・こんな」とうわごとのようにぶつぶつと呟き出した

「一体何があったんだ、話してくれ」

テッドはジークの肩に手を置いた瞬間、彼の肩が怯えたようにびくりと震えると、まるで錯乱したように叫び出した

「すみません！ライタさんがこんなことになったのは全て私のせいなんです！？ライタさんが刺されたのも、こうなってしまったのもみんな私が・・・」

「お、おい！ジーク・・・落ち着け！？」

「ねえ、ジークさんどうしちゃったの！？」

突然錯乱するジークにテッドとメアリーはギョツとすると、なんとか彼をなだめようと声をかけるが、全く彼の耳には届いておらず、テッドは「くそ、一体どうなってるんだ」と呟く

「あの時刺されるべきだったのは、私だったんです！それなのにライタさんが私を庇ってくださってこんなことに・・・」

「・・・がう・・・だろ・・・別に、お前のせいじゃ・・・ねーよ」

「くく!?」「く」

ジークの声を遮りベッドの方からかすかに声が聞こえ3人はいつせいにその方向を見ると、今にもベッドから起き上がるうとしていているライタの姿があり、メアリーは目に涙を溜めて叫んだ

「ライタ！意識が戻ったのね!？」

メアリーは、ライタの所へかけよりそのまま抱きつき「よかった・・・ライタが刺されたってきいたから、私・・・」と言うと、ライタは少し照れたように「ああ、心配かけて悪かった・・・」と呟いた

「お?」

ライタの顔が少し赤くなっているのに気付いたテッドはにやりと笑い「俺達はお邪魔だったかな?」と軽口をたたくと、それを聞いたライタは顔に青筋を立て「うるせえッ!」とテッドを睨みつける

「おお、怖い怖い!でもこんだけ力強く怒鳴れるなら、安心だな・・・」

・全く心配かけやがって！つか、お前ここへきてから災難つづきじやねーか！！」

「悪いな、あんたにも心配かけて……っておい！頭をなでるな！？」

ライタが無事でほつとしたのか、いつものようにテッドに憎まれ口を叩くライタにメアリーはほつとして「でも本当によかった……これならすぐに退院できそうね」と呟くと、それを聞いたジークの顔が一瞬曇った

「あの、メアリーさん……そのことに関してなんですけど、実は……」

「「？」「」

ジークの言葉にテッドとメアリーが首を傾げた瞬間ライタはぎょつとした表情をする

「おい、ジーク！余計な事をいうな！？」と突然怒鳴り出した

「「「！？」」」

ライタのどなり声でさっきまでにぎやかだった病室は静まりかえると、その沈黙に耐えられなくなったメアリーは「余計なこと？」とライタにたずねると、彼は気まずそうにメアリーから目を逸らす

「おい、何だよそれ・・・それは俺たちに聞かれちゃまずいことなのかよ・・・」

テッドの問いかけに対しライタは何も言わず黙ると、ジークはおろしたように言った

「あの・・・ライタさん、本当に言わなくていいのですか？確かにこの件は・・・」

「うるせえ！余計な事をいうなって言っただろ！？」

「ッ！？」

ライタのどなり声にジークはびくりと肩を震わせると、それを見たメアリーは「ちよつと、ライタ！一体何に対してそんなに怒ってるのよ！？」と叫んだ

「別に怒ってねーよ・・・」

「な・・・！？」

そう言っ て目を逸らすくライタを見て、メアリーは「でもさっきいきなりジークさんを怒鳴りつけたじゃない！それにさっきから何か様子がおかしいわよ！一体どうしちゃったの！？」と問いかけると

彼はめんどくさそうにため息をついて一言こつ言った・・・

「別に何でもない話だ、あんた達には関係ない」

「!?!」

その言葉にメアリーは少なからずショックを受け、その場に立ちすくんでいると・・・

「ぶざけんな・・・」と地の這うような声が部屋に響いた

「!?!」

その声がテッドだと2人が認識した瞬間、ライタだけでなくその場

にいたメアリーも背中が凍りつくような感覚に陥り思わず身震いをする

「お前、メアリーがどれだけ心配してたのかわかってそう言ってるのか・・・？何を必死になって隠しているのかは知らねーが、言っていることと悪いことがあんだろ」

「・・・ッ!？」

その冷たさを含むテッドの声には、いつものふざけた彼の面影はなくライタは「ごくり」と唾を飲み込むと、彼はそんなライタを見下ろしながら言った

「それに【何でもない話】だあ？はッ、笑わせてくれるぜ・・・別に何でもねー話なら俺たちに聞かれても差障りのない話なんじゃねーのか・・・」

「・・・・・・・・・・ぐ」

テッドの言葉を聞きライタは下を向いてはぐつと唇を噛み締めると、その様子をしばらく冷静に観察していたテッドはライタの手が震えていることに気が付き「なるほどな」と呟く

「なあ、メアリー、今から席を外・・・いや、先に部屋に帰っててくれねーか？俺、少しこいつと話をしたい」

「・・・・・・・・・・え？」

突然のテッドの言葉にメアリーはぼかんとするが、すぐに我に帰り「それなら私も残るわ」と言う。テッドは「大丈夫だ！別にライタをいじめたりするわけじゃねーよ！ただ2人で話をしたいだけなんだ」と苦笑をした

「それに、早く戻らねーと晩飯を他の奴に取られちまうぜ・・・だからよ、俺の飯の確保を頼む」

「・・・別にバイキングなんだから、なくなったりしないわよ」

メアリーは少し不服そうな顔をするが、小さくため息をはき「わかった・・・先に部屋に戻るわよ」と言うと、隣で顔を青くするジークに「それじゃあ、戻りましょう」と言うと、扉へと歩き出した

「それじゃあライタ、また明日もお見舞いに行くから！今日はゆっくりやすんでね」

「ああ、サンキュー・・・そしてさっきは悪かった・・・」

下を向いたままそう呟くライタを見てメアリーは、少しさびしそうな顔をして病室から出ていくとどつじに、ジークも部屋から出ていく前にお辞儀をして

「ライタさん・・・さっきは本当にすみませんでした！私も明日お見舞いに来ます！..!」

と言いつと、メアリーの後を追うようにして部屋から出て言った・・・

.....

「.....」

「行ったな.....」

テッドは完全にメアリーとジークの気配が消えたのを確認してそう
呟くと、ライタは「いいのかよ、ジークにメアリーを任せても」と
呟く

「ああ、確かにあいつはメアリーに気はある感じはするが、別に妙な真似はしないだろ・・・それより」

テッドはメアリーの心配をするライタの頭をぽんと叩くと「さっきは頑張ったな・・・」と穏やかな声で言った

「何のことだ・・・？」

そう言ってそっぽを向くライタを見てテッドは「俺たちに心配をさせたくなってあんな事をいったんだろ？」と言って苦笑すると「本当にお前素直じゃねーな」と呟いた

「うるせえ！別にそんなんじゃないよ！？」

ライタはテッドの手を振り払い「キツ」と睨みつけると「お前も早く晩飯を食いに戻れ、俺のことはほっといてくれよ！！」と怒鳴る

それに対し、テッドはふつと困ったように苦笑すると「ほつとけか・・・」と呟く

「まあ、俺にしちゃあお前とは数日間との付き合いで、お前がどんな生活をしてきて何を考えて生きてきたなんて知ったこっちゃねーけどよ・・・この数日間【ライタ】という人間と旅してわかったことがある・・・」

「何がいいたい・・・」

ライタは話の先が見えず不可解な顔を見ると、テッドは一瞬さびしそうな表情をするとライタに背を向けて言った

481

「お前、凶星をつかれるとムキになるだろ・・・?」

「!?!?」

テッドの言葉にライタは目を見開き「そんなこと・・・」と言うと、テッドは再びライタの方を見て言った

「お前、おそらく根が素直なんだな・・・メアリーからの話しでは軍人に囲まれた時、フウヤを出し抜いたらしいが本当は嘘をつくの

も苦手だろ」

「……黙れ！」

ライタは何もかも見透かしているようなテッドの透き通った緑色の瞳があうと、ぎりつと唇を噛み締めて噛みつくような瞳で睨みついても消え入りそうな声で呟く

「あんたに俺の何がわかる……」

ライタに睨まれても、テッドは顔色ひとつ変えず「やっと俺の顔を見たな……」と呟くと、その態度が勘に触ったライタはぐいつとテッドの胸倉を掴んで叫ぶと、今までの気持ちが爆発したように叫んだ

「ふざけるな！さっきから黙ってきいてりゃ好き勝手俺の事わかった口ききやがって!?!」

「……」

そう言って叫ぶライタをテッドは冷静に見つめると、ライタは更に悔しそうな顔をして怒鳴り続けた

「さっきから見透かした目で俺を見やがって！いいたいことがあるならはつきり言えよ！？さっきも言ったがあんたに俺の何がわかる！？人の気持ちも知らねー癖にわかったような口を聞くな！！」

「ライタ・・・お前」

テッドはライタの瞳を見ると、今にも泣きそうでさびしそうな少年の顔があり、複雑な気持ちになる

（そうやって、お前はひとりでも抱え込んで・・・そのたびにそんな顔をして生きてきたのか・・・）

『もの心がついた頃には両親はいかなくなった、だからそんなことわかりっこねーよ』

テッドは以前、ライタの家族の中で能力者がいるかどうかたずねた時に返ってきた言葉がふと耳によぎり、ぎゅっと拳を握りしめると「数日間のつきあいだ、お前のことなんざ何もわかつちやいねーよ」と呟く

「……………ッ!」

再びテッドが口を開き（今度は何をいうつもりだ!？）とライタは構えると、思いもよらない言葉が返ってきて彼はぼかんとする

484

「だから、ちゃんとお前の事が知りたい!そうやって泣きそつな顔をしてまで、俺だけでなく幼馴染のメアリーに嘘をつく理由も、お前が今何を抱え込んでいるのかも……」

「……………はッ?」

テッドの言葉を聞き、ライタはしばらく口をあけてぼーぜんとしていたが

「……………」

突然ライタは小さく声をあげるとわなわなと肩を震わせると、テッドは優しい表情でライタを見ながら「ぼん」と頭に手を置いた

「見た所何者かに刺された痕跡もねーし、どこか怪我をしているようには見えねえ！だが、ジークの尋常じゃない慌てっぷりを見てるとただごとじゃねーことがお前に起こっているのは確かだ！頼む、何があつたのか教えてくれ！お前の力になりたいんだ！」

「テッド……お前……」

ライタはぐつと顔に手を当てると、唇をぎゅっと噛み締める

「頼む、ライタッ！！」

「ぶっ……」

「ぶ？」

突然ライタが息を吹き出し、テッドは首を傾けると、ライタは何かを堪えるように「やべー、テッド悪い……俺ちよっと我慢できねーかも……」と言っ

（何をだ？）

そう言ってテッドがライタに問おうとした瞬間だった

「ええい、笑うな！貴様、せつかく俺から歩み寄ろうと勇氣を出したのに！そのいいぐさは何だー！」

「うわっ、離せッ！頭をぐちゃぐちゃにすんなよッ！」

テッドは（このガキ、やっぱむかつく）と思い、ライタの頭をぼさぼさにしてやるうと首に手を回した瞬間だった

ぼた・・・ぼた

「！？」

突然腕に温かい水のようなものが落ちてきたと思いテッドはぎよつとすると「あのーライタ君？」と声をかける

「ひよっとして、泣いてる？」

ライタは慌てて、ごしごしと目元を擦ると「ば、馬鹿言っな！？笑すぎて涙がただけだ！！」と叫ぶとテッドの腕を振り払う

「あー、なるほどね・・・確かに笑ったら涙がでてくるよな」

(そういうことにしといてやるか)とテッドは苦笑をすると、ライタは少し赤くなった目を擦りながらテッドに言った

「そっぴやさつき、あんたは俺の力になりたいっていつてくれたよな・・・ありがとよ、その気持ちだけで十分だ」

「!?!」

ライタはぶつと自嘲したように笑うと「デスキラ【黒毒蜂】って知ってるか

？」とテッドに質問をする

「ああ、知ってる・・・確かスズメバチと猛毒を持った蜘蛛を合成して造られた【キメラ】で、刺された当初に違和感を感じないものの、時間がたつたびにどんどんと命が削られ・・・！？刺される・・・まさか・・・」

「ああ、刺されるとはそつちの意味だ」

ライタはTシャツをめくり、背中を見せると、見事その生物にさされた【刻印】のようなものがあり「まるで呪いのようだろ？」と苦笑した

「実は診察の時1度目が覚めて、医者のお話をきいたんだ・・・そして1年・・・いや、半年持たないらしい」

「ッ!？」

あまりにも衝撃的な話にテッドは目を見開くと、ライタはTシャツを直しながら呟いた

「まあ、俺が刺された後、その生き物は捕縛されたみてーだからもう心配はないらしいけどよ」

テッドは黙ってライタの話聞き、ぐっと拳を握りしめると「そうか・・・」と短く返事をする

「だが、刺されたらもう最後・・・後は死を待つしかないそうだ」

ライタはぎゅっと拳を握りしめ、唇を噛み締めると消え入りそうな声で

「俺・・・まだ死にたくねえよ」

と呟くと、諦めの混ざった声でそう言い放った

「ライタ……」

静かに言ったライタの声が、テッドには悲痛な叫び声に聞こえざり
つと血が滲むまで拳を握りしめると「畜生ッ！」と叫んだ

.....

【その頃】

「ジークさん」

メアリーはロビーで後片付けをしているジークを呼び出すと、きよるきよると人がいないのを確認してから言った

「テッドがまだ帰っていないの・・・」

「おかしいですね・・・もう病院の面会時間は終わっているはずですよ」

そう言っつて首をひねるジークを見てメアリーは「嫌な予感がする・・・」と呟くと、ジークの両手を掴んで叫んだ

「お願いします！ライタに何があったのか教えて下さい！それまで私、この手を離しませんから！！」

ウンディーネ・・・別名【水の都】とよばれるこの街で

それぞれの思いが交錯する中、嵐の前の静けさともいっつよつに

海の水だけは穏やかに流れていた・・・

第3話 異変（後書き）

こんにちは、カノンです！

第1章で漢字間違いを発見し、訂正させてもらいました！

なるべく注意をして読み返しをしておりますが、読んでいるうちに、漢字間違えやおかしな点がございましたら、お手数かも知れませんが知らせて頂けると助かります（<|>）

また、シビアな感想も是非お待ちしております！！

最後になりましたが、後書きまで読んでくださりありがとうございます！
ました！

第4話 死へのカウントダウン（前書き）

【初めに】

事故により、前回の話【第3話】で投稿した小説を誤って消去してしまつた為、覚えている範囲で第3話【異変】を書きなおしました！物語が進む上での変化はあまりありませんが、作者の暴走でライタとテッドの会話が前回よりもだいぶ長くなってしまいました（<—>）

作者の都合でこのような事態になったことを深くお詫び申しあげます！！

第4話 死へのカウントダウン

「はあ・・・何でこんな所にこんな物騒な虫が繁殖してるんだろう！これじゃあ危なくて散歩にいけやしない」

少女は一つに束ねられた金色の髪をなびかせると、小さくため息を
はく

「こりゃ、囲まれてるっばいね！しかもすっごい殺気・・・これは
ピンチの予感!？」

「ギ・・・ギイイイイイッ」

ヒナがそう呟いた瞬間、暗闇の中から大人の握りこぶし一個分程の
赤黒い蜂の形をした生物が飛び出してくると「やっぱりデスキラ
か」と呟く

「確かこの虫は【術者が命令した人意外は刺さない】って噂だけど・
・私もそうとう恨まれたもんだ」

ヒナはそう言って懐から刀を取り出した瞬間、目の前まで飛びかか
つてきていた生物は、真つ二つに切り刻まれ、その周りを飛んでい
たデスキラーも少女のかざす風圧で吹き飛ばされていった

すると、この人物には勝てないと本能で判断したのか残りのデスキ
ラーはその場から一目散に逃げていくと、ヒナは「やれやれ・・・」
と息をつく

「ギ・・・ギギギ」

「ん?」

息をついた瞬間、突然足元から「ギ……ギギ」と音がなり、ヒナはふと自分の足元を見た

すると、先ほど自分が切り刻んだデスキラーがか細い声をあげ、びくんびくんと苦しげにうごめいている

それを見たヒナは眉間にしわを寄せ

「大した生命力……真つ二つになってもまだ生きているなんてね」

と呟き、容赦なくとどめをさすとデスキラーは「ギ……」と短い悲鳴をあげて絶滅していった……

「……ごめん、君も好きでこんな生き物になったわけじゃないん

だよね」

ヒナは絶滅して動かなくなった生き物を見て、そう呟いた後

「あいかわらず生き物を弄びやがって・・・命を何だと思ってやがる」

と怒りを隠した静かな声で言うときりつと拳を握りしめた

「例えば法律があつたとしても、私は絶対あつた男を許さない！証拠を見つけた暁には必ずあつたの元に辿りつき、いつか喉元に喰らいついてやる！！」

ヒナはぎゅっと自分の手首に巻いている赤いリボンを握り、ぎりつと唇を噛み締めると

「ジョン・リアンスめ・・・」

と呟いた

第4話 【死へのカウントダウン】

「.....」

「・・・眠ったか」

テッドは疲れて無防備に眠るライタの顔を見下ろし、「こうして見ると年相応の顔をしたガキなんだけどな」と呟いた

(それにしても、デスクライか・・・何でそんなやつかいな奴が觀光地にいるんだ！自然界では普通、繁殖ができないとされている・・・どこかの研究所から逃げてきたのか・・・それとも)

テッドは寝ているライタを除き、病室でひとり頭をひねったその時だった・・・

「申し訳ありませんが、面会時間はとっくに終了しています」

ガラリと部屋の扉が開き、ひとりのナースが入ってくるとどうじにテッドは「お！」と声をあげると

「悪いな、少し話こんじまった」と椅子から立ち上がった

そしてすれ違い様に「なあ、看護婦さん！帰る前にひとつ聞いておきたいことがあるんだ」とナースに声をかけると、彼女は「何ですか？」とテッドの方を見る

するとテッドは「ふっ」と不敵に笑い、懐に挿している剣に手をかけると、威圧をするように低い声で言った

「あなた、こんな殺気まみれで部屋に入ってきて、病人のこいつに何しようってんだ・・・」

「!?!」

テッドの言葉にナースは一瞬驚いたような顔をするが、みるみるうちに美しい顔が歪んだ笑みになっていき、そのぞつとするような狂気を含んだ彼女の笑みにテッドは冷や汗をかく

「剣を突き付けられて顔色ひとつ変えないたあ、とんでもねー根性してんな、あんた・・・何者だ?」

「私・・・? そうね、挨拶するなら本当の姿のほうがいいかな・・・」

ナースはそう言ってにやりと笑みを浮かべると、その瞬間強い風が吹き、テッドは思わず目を閉じる

(くそ、何で部屋の中で風が・・・！？目を閉じたら殺られる！！)

そう思い再びナースを睨みつけようと目を開けるが、次の瞬間目の前にナース服が脱ぎ捨ててあり、テッドは、「あの女、何処に消えた！？」と警戒するように辺りを見渡した

「ここだよ・・・」

「！？」

突然背後から幼い女の子のような声がして慌てて振りかえると、そこには年端のいかない少女が自分の後ろに立っていて、テッドは思わず目を見開いた

「子……ども？」

「子どもって……あなた、失礼ね！見た目は子どもかもしれないけど、中身はちゃんとして16歳なんだから！！」

「嘘だろ！？お前、こんなナリで16歳！？シヨタにも程があるぞ！？」

黒の混じったさらさらの青い髪のツインテイルに透き通るような青色の瞳が印象的で、その少女の容姿や体型からして、どう見ても16歳には見えずテッドはあせんとする

「……どう見ても12歳、いや……多く見積もって14歳位に見える……！」

まじまじとテッドに上から下まで見渡されたのが不快だったのか、少女はムツとした表情で

「ちょっと、じろじろ見るのやめてほしいな！何かいやらしいし、気持ち悪い！」

と言うと、その言葉でカチンときたテッドもぴくりと顔に青筋を浮かべる

「いやらしい？ふん、大丈夫だ！俺はどっちかっていうとお前のような口り顔娘より、色気のある女性の方が好みでな！！お前のような【お子様】をそんな目で見るかってんだ」

「な・・・」

その言葉を聞いてあせんとする少女にむかい「16歳つっても俺から見たらまだガキなんだよ、あと10年程たってから出直してきな・・・この、小娘が！」と容赦ない・・・いや、大人げない言葉をはくと、少女は顔を真っ赤にさせてわなわなと拳を震わせ

「さっきから黙って聞いていれば・・・！」と呟く

そして悔しそうな顔をしてテッドを睨みつけ、少女は大きく息を吸い込むと、彼にとって一番痛手の言葉をはきだした

「あなた、大人の癖にデリカシーという言葉を知らないのね！そんな精神年齢が子どもじゃ彼女すらいないのでしょ、可哀想に！！！」

「・・・な!？」

くすくすと笑いながら凶星をつかれ、今度はテッドが顔を真っ赤にする。「やかましい!?!つか大人って、まだこう見えても18歳だっつーの!」と叫ぶ

すると、その声に反応したライタが「一体何の騒ぎだ・・・」「目を覚ますと、ぼんやりとテッドと、向こうであぜんとする少女が虚ろな目にうつった

「18歳って、てっきり20歳を過ぎてると思ってたわ・・・」

少女はテッドの顔をまじまじと見つめ、ぼそりと「老け顔・・・」
と言うと、その言葉に敏感に反応を示したテッドは、完全にライタが寝ていることを忘れ

「おい、聞こえてんぞ！誰が老け顔だ！？さっきから人の気に触ることばかりいいやがって！？」

と叫び出す

すると、その声で完全に意識が覚醒したライタはハツとした表情を
して

「なあ、テッド・・・お取り込み中悪いが、誰だこいつ？」

と先ほどからの疑問を口にした瞬間だった・・・

「ふーん、やっぱりあなたがテッドなんだ・・・」

少女はライターが起きたのを見て「ちっ」と舌打ちをすると、開いていた窓に足をかけ、テッドに言った

「なるほど、【彼女】の報告通り厄介そうな男・・・こんな嫌な思いをするなら、様子見でくるんじゃないかなかった・・・」

「様子見だあ？あんな殺気を振りまいておいてよく言っぜ・・・」

テッドの言葉を聞いて少女はにこりと可愛らしい笑みを浮かべるが、

その様子を見たライタはぶるりと身震いすると「テッド・・・見た目に騙されるなよ、この女かなりやベーぞ」と耳打ちした

「わかってる・・・」

テッドは窓に足をかけ、ほほ笑む少女に「あんた、さっき様子見つたよな！それに俺のことを知ってる口ぶりだったし・・・一体何者だ！？」叫ぶと、少女は「私・・・？」と言ってくすりと笑う

「そうね・・・今はあなたたちと殺り合うつもりはないけど、いずれはそうなる運命だし、名前くらいなら教えてあげてもいいよ？」

そう言って少女は口を開くと、可愛らしい笑みを浮かべて言った

「私の名前は【アリス】！帝国騎士参謀補佐をしています！よろしくね」

「帝国騎士……イオスの差し金でメアリーを連れ戻してきたのか！？」

帝国騎士という言葉にライタは反応すると、アリスは「心外ね……」と呟くと、困ったように笑う

「私は彼の部隊とは全く無関係な人間よ！それに、メアリー様とやらを連れ戻す任務は主に【イオス隊長】の部隊に依頼された任務だし、私達の隊長は【まだメアリー様を、屋敷に連れ戻す時期ではない】と言ってるわ」

「なるほどな……確かにあんたがメアリー狙いなら、俺たちに関わるより先にあいつの所へ行くはずだ」

テッドは目をつぶりメアリーの気配を読み取っているのを見て、ライタは「メアリーが病室から去る前に結界をかけたのか」と呟く

「なら、あんたの目的は何だ！？さっきは様子見をしにきたと言っていたが、その様子じゃまだ何かあるようだな」

「へえ、なかなか鋭いのね・・・教えてほしい？」

そう言っただけでちらりとライタの方を見る少女にテッドは嫌な予感がして、ライタを庇うように前に立つと、アリスはくすりと笑って「そうよ・・・」と言った

「私は【あなた】を迎えに来た・・・ただ、それだけよ」

アリスに指をさされ、ライタは「な・・・！？」と声をあげると、テッドは

「ライタを！？何でまた！？」

とアリスに問いかける

「そうね・・・簡単に言うと、あなたの能力に興味があるの！」

「俺の能力・・・？さっきから何をいつてるんだ」

そう言っつて警戒するようにライタはアリスを睨むが、彼女はその殺人フェイスに物怖ともしないで「そうよ」と言った

「あなたは気づいてないようね・・・自分の潜在能力を、でも安心して！その能力、私達が目覚めさせてしてあげる」

「ふざけるな！何を目覚めさせてくれるか知らねーが、誰がお前みたいなのばそうなの女についていくかよ！？」

ライタはそう言っつてアリスを睨みつけると、彼女は「そう・・・残念」と言っつと、

「私達の隊長だったら、あなたの毒・・・なんとかできるかもしれないのに・・・」

とまるでひとり「とのように呟いた

「!?!」

「おい、今何だった!?!」

「毒をなんとかできるって、デスキラーの毒のことか!?!」

食いついてくるテッドを見てアリスはにやりと笑うと「そうよ・・・治療不可能と言われているデスキラーの毒も例外ではないわ」と言った

「私達はあなたの能力の事を知りたい、そしてあなたはこれから待ち受ける【死】への運命から逃れたい・・・お互い悪い話ではないと思うの」

「ぐ・・・」

アリスは動揺するライタの顔を見て、くすりと笑うととどめの言葉を言い放った

「さあ、選んで？私と共に来て助かる道を選ぶか、このまま死んでいくのか……強制はしないわ、決めるのはあなたよ」

まるで、悪魔の誘惑のような囁きにライタはぐっと手を握りしめると、覚悟を決めたようにテッドの顔を真っ直ぐに見て、口を開ける

「悪い、テッド！俺は……」

.....

「全く・・・アリスの奴、ひとりで何処にいったかと思えば」

帝国参謀本部基地のうす暗い資料室で男はゆっくりと目を開けると、
仮面越しにくすりと笑う

「なるほど・・・確かに僕は【毒を吸い出す能力】はあるけど、それをダシにされるなんて全く考えもしなかったよ・・・」

仮面の男は「やれやれ」と息をはくと、その近くで待機をしていた部下の一人が

「彼、アリスさんの案に乗るでしょうか」と呟く

「うーん、どうだろうね」

仮面の男はふつと仮面越しに青色の目を細め「アリスもやってくれるね・・・」と呟いた

そう言つて仮面からかすかに見える、冷たい青の瞳にその場にいた部下全員がぞつとすると、「彼女の悪知恵はいつたい誰に似たのやら」と仮面の男はため息をはく

「でも、死へのカウントダウンを間近に、あの人間がどんな決断を下すのか・・・楽しみで仕方ないよ、流星は僕の妹だ・・・」

「くくつ」と形の整った唇を歪ませて仮面の男は不気味に笑い

「ここまで舞台が整えば、そろそろ彼女も動き出す所だよね」と呟くと

人知れず、誰にも聞こえない程の声でその人物の名前を呼んだ・・・

【次回予告】語り：テッド・メアリー

『さあ、ライタさん・・・私を選んで？』

突如「自分を迎えにきた」と言っ
て現れた謎のロリ顔の美少女（1
6歳！）

『ライタ・・・』

脳内に浮かぶは16歳にして、かなりませてる幼馴染・・・

全くタイプが正反対な姉系の【メアリー】と、妹系の【アリス】

同じ16歳の可憐な少女に迫られ、果たして彼が選ぶのはどっちの少女か！？

【帰らずの洞窟第5話：悪魔の囁き】

「姉系の【メアリー】と、妹系の【アリス】かあ・・・くそ！あんな可愛い女の子からお誘いを受けるたあ、やるじゃねーか！ライタ
！！

え？ちなみに俺ならどっちを選ぶって・・・？

うーん、2人とも性格で癖が強そうだから勘弁だが、そういうのを

抜きにするとやはり………」

「ちょっと、これのどこが次回予告なのよ!? テッド、ふざけるのも大概にしなさい!？」

続く……

第4話 死へのカウントダウン（後書き）

・・・えーっと、次回予告がぐだぐだになりました（<ー>）
おそらく、暑い中で書いたせいだと思います（汗）

第5話 悪魔の囁き

「あー、久々に身体を動かしたから疲れた・・・仕事帰りにデスクライに襲われるとか、マジ最悪！気分直しに甘いものでも食べて帰るか！」

ヒナは海岸沿いを歩いていると、何やら聞き覚えのある声が出て「ん？」とその声がある方向を向いた

「そ、そんな！じゃあライタはどうなるのですか!？」

「・・・」

「何か言っして下さい！ジークさん!？」

(あれ?・・・メアリー?何かあったのかな)

ヒナはメアリーの尋常じゃない様子を見て首を傾げると、ホテルの3階の窓が開いていることに気づく

(たく・・・デスクライが出たっつてのになんて物騒な!それにメア

リーの様子も気になるし・・・)

ヒナはちらりと玄関を見るとその扉がオートロックだったことを思い出し、ため息をはくと「よし、登るか!」と決心する

「えーっと、ここからなら登れそうかも・・・」

ヒナがそう言ってホテルのパイプに手をかけ、いざ登ろうとしたその時だった

「何をしている?」

「ギャツ!?!」

突然後ろから声をかけられヒナは小さく悲鳴をあげてしまう

(やばい、変質者だと間違われた!?!早く誤解をとかないと、警察

を呼ばれる！？)

ヒナはとりあえず誤解を解こうとあそるおそる振り返ると、そこには銀色の髪を持つ青い瞳の少年が後ろに立っていて、その少年の着ている隊服を見たヒナは更に目を見開いた

(この隊服・・・帝国軍人！？何でこんな所に・・・くそ！メアリの様子も気になるのに！)

ヒナはそう思いちらりとメアリーがいる方向を見ると、何故か青い顔をしたメアリーと窓越しに目が合った

「？」

そして、慌てた様子で一緒にいた茶髪のホテルマンの腕を引き、部屋の中へと入っていくメアリーを見てヒナは疑問に思っていると、「おい、どうかしたのか！？」と少年・・・いや、フウヤに懐中電灯を当てられヒナは眩しさに目を細める

「眩し・・・いや、何でも！ちょっと知り合いがいたから会いに行こうとしただけです！だから決して怪しいものじゃありません！？」

そう言つて必死に弁解するヒナを見て、フウヤは目を細めると「怪しいやつに限つてそう言い訳するんだ！まだ子どもとはいえ、不法侵入は犯罪になる！！注意されているうちにやめておけ！！」と注意をした

「全く……とりあえずそこから降りるんだ！話なら後で聞いてやる」

(げ……これって説教される感じ！？冗談じゃない！？)

ヒナはどうにかしてその場から逃げようと必死に策を練っている内に、フウヤは更にヒナとの距離を詰めてきて、至近距離で目があったそのときだ

「……」

「……あの、人の顔じろじろ見て一体何ですか？」

まるで時間が止まったかのようにフウヤに見つめられヒナは首を傾け

てると、フウヤは「お前・・・」と口を開く

一体何を言われるのか、とヒナはじろりとフウヤを見返したその時
だった

「お前・・・どこかで会ったことはないか？」

「・・・・・・・・・・は？」

「突然何を言い出すんだ」とヒナはため息をはき、未だ自分の顔を
凝視してくるフウヤに向かって「あの・・・ナンパですか？それな
ら私、いいスポット知ってるのでよそでやって下さい」と言うと、
するりとフウヤの横をすり抜けた

「な・・・！違う、そうじゃない！？君こそ、一体何を言いだすん
だ！？」

ヒナの言葉に動揺していたせいか、あっさり自分の背後へと移動した少女を見てフウヤは目を見開くと「待て、話は終わってない！逃げるな!？」と叫ぶ

「・・・何ですか？」

ヒナは（これ以上、無駄な話をするようなら逃げるか・・・）とため息をはくと、フウヤは「さっきは悪かった・・・それよりこの写真を見せてくれ」と懐から写真を取り出してヒナに見せた

「この少女を探しているのだが、情報によるとこの街のどこかにいるらしい・・・見かけなかっただろうか？」

（・・・人探しですか、それはたいそうご苦労なこった）

フウヤに言われ、ヒナはしゅしゅその写真を見た瞬間目を見開いた

（メアリー!?!）

ヒナは思わずその写真の人物の名前を呼びそうになるが、フウヤが

腰にさしてある刀がちらりと見えて、慌てて口を閉ざした

「知っているようだな」

ヒナの様子を見てフウヤは目を細めると、「見たのはこの街か？」と問いかけてきた

「……………ッ！」

ヒナはさっきのメアリーの様子を思い出す

（そうか、メアリーが慌てて部屋に入っていったのはこういうことか！？）

ヒナはフウヤの腰にさしてある刀と、先ほどの尋常じゃない慌て方をしたメアリーの態度を思い出し、ごくりと唾を飲み込むと「教えてもいいけど、何でその子を探しているのか聞かせてくれない？」とフウヤに尋ねた

「……………悪いが任務上の話、この件については話すことができない

「だが、何故そのような事を聞く!?!」

(ふーん……)

ヒナはフウヤの言葉に目を細めると「極秘任務……て訳か」と呟くことになり笑う

「いや、ただ気になっただけ!それより軍人さんはこの子を何処で見かけたか知りたいっていったよね」

「!?!」

その言葉を聞き、大きく反応を見せるフウヤを見て、ヒナは不敵な笑みを浮かべると「あっちだよ……」と言ってその方向を指さした

【第5話 悪魔の囁き】

「・・・なあアリス、お前の隊長は本当にデスキラーの毒をなんとかできるのか？」

「しつこいわね、老け顔！さっきから出来るっていつてるじゃない！？」

もうとっくに面会時間を過ぎている病室で、ぼーぜんとしているライタをよそに、テッドとアリスは口論をしていると、ライタは「なんとか出来る・・・か」と口を開く

「!?!」

ライタの言葉に目を見開くテッドとは対象に、アリスはにやりと笑うと「さあ、ライタさん・・・私を選んで？」と手を差し伸べ、ライタへと近づいた

「……………」

その様子を見たテッドはぐっと唇を噛み締めると「畜生………」と悪態をつく

（俺達にはこいつを助けてやれる力もねーから、文句はいえねえ……
・だが、こいつの言ってる話も根拠があるわけじゃねーだろ！！）

おそらくライタはこの案に乗る……！もし自分がこの立場になれば、間違いなくアリスの手を取り生きる道を選ぶだろう！

（【溺れるものは、藁をも掴む】ってのはまさしくこのことだな……
・だが、こんなヤバそうな女の隊長だろ！？信用していいのか！？）

（くそ、どうすりゃいいんだ……）とテッドが拳を握りしめたその時だった

「悪い、テッド！俺は……どうせ死ぬなら、もう少しあなたたちと旅がしたい」

「！？」
「」

ライタの言葉にテッドだけでなく、アリスも目を見開くと」「どうして・・・？」と手を震わせた

「どうして！？私ならあなたを助けてあげれるって言ってるのよ！？どうせ死ぬならって・・・それじゃあ私が嘘をついているようにじやない!？」

わなわなと震えるアリスをライタは冷静に見つめ「確かにお前はやっぱりそんな雰囲気はあるが、嘘をついているとは思わねえ!」「と言つと、アリスは「それなら何故!？」と叫ぶ

「なんでだろうな・・・」

ライタは頑固でどうしようもない幼馴染の事を思い、「でも昔、あいつと約束したんだ・・・」と呟く

.....

『ライタ!』

記憶に残るは、幼かったころの自分と泣いているメアリー・・・

『どうした?』

『ぐす・・・あのね、皆私と遊んでくれないの!【リアンス家の娘】と遊んだら私のお父様に睨まれるって・・・』

『ああ、あのおっさん・・・確かに怖いな』

『ねえ、ライタもいつか私から離れるの!?!?!?!?! やだよ、それじゃあ私ひとりぼっちになっちゃう』

『ひとりにしないで……』そう泣きつくメアリーの手を握り、俺は約束した

『わかった……周りが何て言おうと、俺は決してメアリーを裏切らない! お前が俺を必要としなくなるまで何があっても傍にいる……』

『本当? 何があっても?』

『ああ、何があってもだ!』

『わかった! ライタを信じる!?!?!?!?!』

.....

「もうメアリーはそんな約束なんて覚えてないかもしれねーし、今のあいつからすりゃはた迷惑な話かもしれねえ・・・だがよ」

ライタはふと苦笑したように笑うと、目の前であぜんとしているアリスをまっすぐに見て、きっぱりといい放った

「俺は何があってもあいつを裏切れねえ！側にいると約束した！・・・それに・・・」

ライタはギロリとアリスを睨み付けると、警戒するように口を開く

「確かにお前は嘘をついてない、目を見りゃわかる！だが、毒を治せるのはお前ではなくて隊長だろ！？」

「！？」

ライタの言葉にアリスは目を見開くが、彼は構わず話を続ける

「お前は、俺を助けてくれるつもりでも、隊長の方は何を考えているかもわからねえ・・・それにさっき言ったよな？【今は戦うつもりはないが、いずれは殺り合うことになる】ってよ」

「!?!?」

その言葉に、アリスだけではなくテッドも目を見開くと、「あっ!」と声をあげる

「そっぴやお前、自分の名前を名乗る前にそっぴってたよな!いきなり唐突な話をしだすからすっかり忘れてたぜ!」

先程から黙って2人の様子を見ていたテッドも、思いだしたように呟くと、警戒するようにアリスを睨み付けた

「確かにそっぴだよな、敵だとわかっている人間についていく馬鹿い

ねーよな」

先程、【俺なら迷わずアリスの手をとる】と考えていた人間とは思えない程の切り替わりである！「うんうん」とうなずくテッドにライタは内心で苦笑すると、今度は鋭い瞳でアリスを威抜き、威嚇するような静かな声で言った

「そういうことだ、悪いが俺はあんたについていくつもりはない！それに俺の能力がとうのとか言ってたが、その力を使ってメアリーやテッドを傷付けることになるならなおさらだ」

「・・・何故それを！？」

確信に触れたのか、その言葉に動揺する少女を見て、ライタは「はったりが通じる相手で良かったぜ」と呟くと、自分が嵌められたことに気付いたアリスは顔を真っ赤にして怒鳴った

「ハツタリ・・・！？だ、騙したわね！？」

顔を赤くして怒鳴るアリスを見たライタは「お前、ほんつとわかりやすいな・・・」と苦笑すると、覚悟を決めたのか、ぐつと拳を握り締めた

「なるほど、それならなおさら行けねえなあ！それにイオスの隊の人間じゃないにせよ、帝国軍人にのこのこついてっちゃ、あいつを裏切ることになる・・・」

「・・・・・・・・」

未だに顔を赤くしてこちらを睨むアリスへお構いなしにライタは口を開き「自分が助かる為に、メアリーとテッドを傷つけることにならぬなら・・・」と言って、一瞬ふとさびしそうな表情をする

その後、その表情を隠すようにライタは自嘲したように笑うと「・・・死んだ方がマシだ」と呟いた

(この人・・・本気で言ってる!?)

アリスはライタの真意を確かめる為にじつと水色の瞳でライタを見るが、彼の力強い瞳に思わず唇を噛み締める

「なるほど・・・【彼女】の言う通り、六感能力だけでなく頭も切れるのね!その上度胸もある・・・あの人が貴方を【注意の対象】として見る理由がようやくわかった気がするわ」

自分の死を目の前にした時、大半の人間は絶望に明け暮れ、助かる途があるなら迷わずそれにしがみつくだろう

でも、ライタという少年は違った

自分の死を間近にしつつ今の状況を冷静に判断し、アリスを拒んだのだ

その上はったりをかまし、自分から情報を聞き出したライタに少し動揺を覚えたアリスは「それに、あなたの瞳には全くの迷いがない・・・死ぬことが怖くないの？」と問いかけると

ライタは「怖えよ！」と苦笑した

そして、ライタは再び力強い瞳で「だが俺は自分を信じると約束してくれたメアリーや、俺を知りたいといってくれたテッドを裏切つて、嫌われる方が恐い！」と言い放つと

その言葉を聞いたアリスは「・・・ふう」っとため息をはき「・・・仕方がない」と呟いた

(これ以上、彼には何を言っても無駄みたいね)

そう思ったアリスは、「さすが【彼女】が目をつけるだけのことはあるわね・・・一筋縄ではいかないか」と言うと、腰にさしてあった刀に手をかける

そして再び放たれるアリスの殺気に、「こいつぁ、やべーな」と呟くと、テッドも自分の刀に手をかけた

「なるほど、力づくでもライタを連れていくつもりか！・・・勘弁してくれよ、俺は女子供と戦う趣味なんざもっちゃいねーよ」

「あら、意外に優しいのね・・・でも、言ってることと行動が一致しないのは私の気のせいなのかしら？」

警戒するように剣に手をかけるテッドを見て、アリスも「私も、戦

いが苦手だからあまりこういうことは避けたかったのだけど・・・
と呟き、すっと手に剣を握ったその瞬間だった・・・

「・・・っ!？」

突然テッドの頬から血が伝い、彼らはハッとする

「な、一体何が起こった!？」

テッドはじわりと刺すような頬の痛みで顔を歪めると、いつの間に
剣を抜いたのか、アリスの剣には真っ赤な鮮血が伝っていて、その
血が自分のものだとわかるまでに少しの間時間がかかった・・・

(っ、こいつ!いつの間にか剣を抜いたんだ!?)

ぼたぼたと頬を伝う血をテッドは手で拭い「なるほど、流石帝国軍人の参謀補佐だけのことはあるな」と呟くと、アリスはくすりと笑う

「本当は穏便な話し会いで、事をすましたかっただけで、仕方がないか・・・悪いけど、私こう見えてかなり短気なの！だから間違えて殺しちゃったらごめんね？」

そう言っただけで笑いかける少女にテッドは悪寒を感じつつ、「ハッ、言ってくれるじゃねーか！あんたこそ、怪我しても知らねーぞ」と憎まれ口を叩くと、ライタを庇うように前に立ち、剣を構えた

「悪いが、本気でやらせてもらっからな！いくぞっ！！」

【その頃】

(どうしよう・・・ついジークさんを引っ張って部屋に入れちゃったけど)

メアリーは先程、窓の外で見た光景を思い出すと、顔を真っ青にさせた

(さっきの2人、一瞬見間違えかと思っただけど、ヒナちゃんと、イオスさんの部下のフウヤさんだよね!?)

「あの、大丈夫ですか？」

顔を真っ青にさせるメアリーを気付い、声をかけるジークを見て、メアリーは思う

(ヒナちゃんは、私達の事情を知らない!だからフウヤさんにこの居場所をバラされたら、一緒にいるジークさんにまで迷惑がかかる!)

メアリーはぎゅっと唇を噛み締めると（私の馬鹿、何でジークさんを部屋に入れちゃったの!?）と心の中で嘆いた

（とりあえず、ジークさんを部屋の外に出さないと巻き込まれてしまっ！?）

そう思い、メアリーはジークに事情を話そうと口を開いたその瞬間だった

ドンドンン

「!?!」

タイミング悪く扉が叩かれ、メアリーはびくりと肩を震わせる

（どうしよう、間に合わなかった!?!）

メアリーは扉が叩かれ動揺しつつも、何とか冷静になると頭を捻る

(・・・そういえば、ジークさんはホテルマンだ！部屋の清掃作業をしていたと言えば、ライタの時のように犯人という誤解は免れるはず・・・)

「よし、これで行こうー！」とぶつぶつ言いだすメアリーを見て、ジークは「あの・・・メアリーさん？」と言って首を横に傾けると

「一体何が起っているのでしょうか・・・」

と呟いた

.....
.....

【次回予告】：テッド

『なるほど・・・流石帝国騎士参謀補佐だけのことはあるな!』

「面会時間を過ぎた病室でぶつかり合う2人

『ねえ、メアリーはこんな話を聞いたことがある?』

その場所に入れば最後、生きては出られないといわれる【帰らずの洞窟】の伝説・・・

呪われた身体、幼い頃の約束・・・死へのカウントダウンとの戦い・・・

様々な気持ちが悪く交錯する中、真実を確かめる為にテッドが取った行動とは・・・？ -

【明日へと続く物語 第6話・帰らずの洞窟】

『もしこの先毒に蝕まれ、動けなくなった俺が、あんた達の足でまといになることがあれば、かまうことはねえ！俺を残して2人で旅を続ける』

『・・・馬鹿野郎!!』

ライタが助かる可能性はほぼ皆無・・・その中で見つけた一筋の光を求めて、俺たちの新しい旅が始まった

第5話 悪魔の囁き（後書き）

今度は真面目に次回予告をしました（＾・＾；）
・・・書きたい場面まで、なかなか話が進まない（泣）

第6話 帰らずの洞窟【前編】宣誓布告

「あら、さっきまでの威勢はどこへ言ったの？女の子だからって手を抜いてると、怪我するわよ？」

「あんたの場合、怪我だけではすまないような気がするがな！悪いが本気でいかせてもらおうぜ！」

「な、何がどうなってやがる！？」

ライタは目の前で繰り広げられる戦いをぼーぜんとして見ていたが、剣のぶつかりあう音で我にかえると「テッド！」と叫ぶ

「ああ、大丈夫だ！確かにこいつはスピードはあるが、力負けすることはねえ！」

いつもの余裕がなく、息を切らせるテッドを見て、ライタは「やめろ！お前、腕怪我してるだろ！？こいつは俺に用があるっていったんだ！テッドが戦う必要はねえ！」と叫んだ

「ジークも言ってただろ、今は痛みを取ることにしかできねーって！悪化したらどうするんだ!？」

「悪化？知らねーよ、んなこと気にして戦ってたらこっちがやられちまう!！」

痛みは取ったものの負担が激しいのか、額に汗をかきながら戦うテッドを見て、耐えられなくなったライタは、ぐつと拳を握りしめると「俺も戦う!」とベッドから立ち上がる

「馬鹿っ!？丸腰のお前が敵う相手じゃねえ!!死にてえのか!？」

ライタの言葉にぎょっとしたテッドがそう怒鳴った瞬間、一瞬の隙をついてアリスはテッドの懐に潜り込む

「くす・・・隙だらけね」

「!？」

2人が「いつの間に!？」と叫ぶ前にアリスは、素早い動きでテッドの腹部を蹴りあげると、テッドは物凄い勢いでライタと反対側の壁に蹴り飛ばされてしまう

「が……はっ……!?!?」

怪我をした背中にとって、その威力はすさまじいものだった

「ぐ……あぁ」

あまりの衝撃にテッドの呼吸が一瞬止まり、「げほげほッ」と咳き込んでみると、アリスは意外とでもいうように驚いた顔をしてテッドを見下ろした

「驚いた……フウヤ君とイオス隊長を出し抜いた相手だと聞いたからどんな強敵なのかと思ってたけど」

アリスはつまらなさそうな顔をしてため息をはき、「参謀補佐の私……いや、戦いが専門でない私ですらこの様ね……!」と呟くと、テッドの首に剣を向けた

「……まぁ、気配隠しの結果はたいしたものだし、まだ奥の手を隠し持っている感じはするけどね!力の出し惜しみなんかしてないで、さっきの言葉通り本気で来たら?」

アリスの挑発にテッドは不敵に笑うと、首筋に向けられている剣を脚で蹴りあげる

「上等だ・・・！」

ゾク・・・

ライタはテッドの向ける殺気に背筋が凍りつくような錯覚に陥るが、それより目の前で余裕の笑みを浮かべ、可愛らしく笑う少女の方が恐ろしかった

(何なんだ、この異様な寒気は・・・！？)

テッドが体勢を整え再びアリスの元へと駆け出そうとした瞬間、ライタの頭の中で危険信号はありえない程大きく鳴り響く

「駄目だ！テッド、こいつに近寄るな！？」

何故そのような言葉が出たのかわからない・・・だが、今のアリスに近寄ってはならない！そんなような気がした

「!?!」

ライタの言葉を聞きテッドは慌ててアリスから距離をとった瞬間、彼女は口に弧を描くようにして笑うと「残念・・・」と呟く

「もうちょっと距離が近かったら、こいつを仕留めることができたのに・・・流石ライタさん、私が術を唱えようとする瞬間に気づくなんてね・・・」

「何・・・!?!」

アリスの言葉にテッドはぎょっとした瞬間、部屋の中ですさまじい程の風が吹き荒れたと思えば、自分の服の袖口が切れていることに気がついた・・・

(いや、それだけではない!?!?)

テッドはずきんと痛みが走る自分の右手に目をうつすと、そこからはとめどなく血が流れていて、「まいったね、こりゃ・・・」と呟く

「なるほどな、あのままお前の挑発に乗って突っ込んでたらバラバラになってる所だったぜ・・・おい、ライタ！お前は怪我してないだろうな？」

「ああ・・・ッて！テッド、お前血が・・・！？」

ライタはテッドの腕を見て顔を青くさせると、その様子を横目で見ているアリスがくすりと笑う

「あら・・・もう右腕は使えなさそうよ！でもよかったじゃない、もともと3階から落ちて怪我してたのでしょ？左腕だったら両腕が駄目になってるところだったよね」

「！？」

アリスの言葉を聞いて、テッドとライタは驚いたように目を見開くと、「なぜ、そのことをお前が知っているんだ・・・」と警戒するような低い声でたずねる

「何でって・・・」

テッドの問いにアリスはきょとんとした顔で答える

「これから偵察する相手の事や情報を知っていておかしいことでもあるの？」

そう言って目を丸くするアリスは、幼く可憐な少女そのものだが、そんな彼女の仕草でさえ、今のライタにとって恐怖以外の何者でもなかった

(まさか俺達を監視していたのか!?)

そんなことを思い、ライタはゾツとしていると、突然アリスの胸ポケットが振動し始めた

「!?!?」

(一体何なんだ!?)とテッドとライタは目を見開くと、アリスも驚いたような顔をして「まさか・・・」と呟く

そして、胸ポケットから無線を取りだし耳にあてた瞬間、みるみるうちにアリスの顔が真っ青になった

「!?!?」

そんなアリスの様子を二人はぽかんとしてを見ていたが、尋常ではない彼女の怯えぐあいにテッドは思わず「おい・・・」と声をかけた

しかし、アリスはテッドの声にすら気がついていない様子で、電話先の相手と話を続ける

【アリス・・・僕に黙ってどこへ出かけてるの？駄目じゃないか、勝手に外へ出歩くなといってるだろ】

（男・・・？それにこの声、何処かで聞いたことがあるような・・・）

人一倍、感がいいと言われてきたライタだが、彼は耳も人一倍良かったため、アリスと会話をしている相手の言葉が耳に入ってきた

「ごめんなさい！勝手な真似をして・・・でも私、少しでもお兄ちゃんの役に立ちたかったの！！」

（お兄ちゃん・・・？こいつの兄貴か？）

隙だらけのアリスに攻撃するのを忘れ、ぼかんとしているテッドとは対象に、ライタは更に耳を傾ける

(悪いが盗み聞きさせてもらおう！もしかすると、こいつらについて何か情報を掴めるかもしれない)

そう考えたライタが耳に全神経を集中力させ、隙だらけのアリスに近づこうとしたその時だった

【無線ごしなのに僕の声が聞き取れるなんて・・・流石ライタくん！ちょうどよかった、君とも一度話がしたかったんだよ】

ゾクッ・・・

「おい、ライタ・・・お前までどうしたんだ？何か変だぞ？」

突然肩をびくりと震わせて、真っ青な顔をするライタを見てテッドは首を傾げる

「何で、俺が聞き耳たててるってわかったんだよ・・・」

「はぁ！？何に？つーかお前ら二人揃って同じ顔色しやがって・・・
一体何だっというんだよ！？」

一人だけ状況が理解出来ないテッドはイライラした様子で「あー、もう！じれってえええっ！！」と叫ぶと、アリスの無線を食い入るように見詰めるライタに向かって叫んだ

「おい、ライター！何をぼーってしてやがる！？今がチャンスじゃねーか、早くこの生意気な小娘をどうにかするぞー！！」

「!?!」

しびれを切らしたテッドの声に、ライターとアリスはハッとするとテッドは「隙あり！」と叫びながらアリスに飛びかかった

「え……あ、ちょ……きゃあああっ!?!」

もちろん無線との会話に集中していたアリスは、飛びかかってくるテッドを見て「しまった!?!」と意識を覚醒させる

「よし、捕まえた!?!…こうしてしまえばこっちのモンだぜ!?!」

テッドに両腕を片腕で拘束され、ベッドの上で抑えつけられたアリスは真っ赤な顔をして「はなしてえ!?!」と身をよじった

しかし、テッドも一応男!

暴れるアリスの力強さに思わず力負けしそうになるが、「負けてたまるか!?!」と意地になって力を込めた

「あうっ、痛い!?!」

片手とはいえ、容赦なく大の男に無理矢理抑えつけられ、アリスは無線から手を放す

するとテッドはそれを拾うと

「おい！これはどう使うんだ？」

とライタに問いかけた

「知らねーよ、つかお前女の子供相手に容赦ねーな！たしかにこいつはやべー雰囲気はあるが、可哀想だとは思わねーのかよ？」

ライタはあきれたように眩き、「電話と同じでこいつやって使うんじゃないのか？」と言つと、テッドの耳に無線をあてる

「でかした、ライタ！このままそこで固定してる」

そう言つてテッドは不適に笑つと、無線越しに向かつて思いきり叫んだ

「おい、誰だか知らねーがあんたはこのアリスとかいうガキの仲間か!？」

「仲間って……さっきアリスが兄貴だと言ってただろ」

無線越しに叫ぶテッドに、ライタは冷静につっこみを入れると、アリスも「ちよっと、顔に唾とんできたんだけど!」と怒鳴る

【仲間……というより彼女は僕の妹だよ!なるほど、君がテッド君か……】

無線越しに特徴がある低い声が聞こえ、テッドは「ん?」と首を傾げると「あれ?お前の声、どこかで聞いたことがあるような……」と呟く

「まあ、そんなことはどうでもいい!とりあえず単刀直入に言うぞ!」

一瞬相手の声が聞き覚えのある声に思えて、テッドは疑問に思うが、今はそれよりやるべきことがある

そう思い、テッドは眉間にしわを寄せると、無線に向かって言った

「だいたいの話はアリスから聞いた！あんだ達がライタを狙っていることも、イオスとは別部隊のやつらだということもな！」

【あらら・・・】

無線の相手は少し困ったように、ため息をはき【アリスは本当に口が軽いなあ・・・もうそこまではれてんだ】と呟くと【で、用件は何？】とテッドに問いかけた

「あんたもわかってんだろ？」

テッドは、主人公とは思えない程の悪どい顔をして笑うと、ニヤリと笑う

「なぜあんたらがライタを狙うのか・・・そして、メアリーの親父が持っていた【赤黒い水】について詳しく話して貰おうか？」

「「!？」」

テッドの言葉を聞き、その言葉に反応を示したアリスは「お兄ちゃん！駄目っ!？」と叫ぶ

「何が駄目なんだ？」

テッドは必死になるアリスを見て納得したように笑うと「やっぱりそうか」と言った

「イオスやフウヤの行動を見て思ったが、メアリーの親父と帝国騎士軍はどうやら繋がってるみてーだからな！」

「っ!？」

テッドの言葉に「しまった！」と冷や汗を流すアリスを見にテッドは苦笑すると「やっぱりカマをかけてよかったぜ！お前の態度を見て、核心が持てた！」と言った

「さあ、そういう訳だ！この二つ……いや、その他もろもろお前達についての情報を吐いてもらう！……」

【……。】

無線の相手はテッドの言葉に対し、少し間をおいて「んー、困ったな」と呟くと、今度ははっきりとした口調でキツパリと言いつた

【……嫌だ！冒頭が長すぎていちいち説明するのがめんどくさい
！……！】

「・・・なっ!？」

テッドは無線の相手の出した答えに、あせんとするが、瞬間で我にかえると「お前、今の状況がわかってんのか!？」と叫んだ

「さっきのアリスの悲鳴、聞こえてたんだろ!? 普通こんな状態でその言葉が出てくるか!? 妹の自分の妹が危ない目にあうかもしれないんだぞ!!」

【んー、さっきの悲鳴は尋常じゃなさそうだし、そうかもしれないね・・・】

そう言つて無線の相手は、仮面越しにくすりどりと笑つと少し声を低くして囁くように口を開く

【確かにアリスがつかまつてる以上、どう考えても今の状況じゃ僕達の方が不利だ・・・でもさ、君も今の自分たちの状況を理解できてないんじゃないかな？】

「何がいいたい？」

遠回しな言い方をする相手にテッドは少し苛ついたように顔をしかめるのに対し、仮面の男はくすりどりと笑つと【さあ・・・今にわかるさ】と呟いた

【さてと、僕はこれから仕事があるからそろそろ話を終わらせて貰つよー！】

「お、おい!？」

テッドは無線越しに「まだ話は終わってねえ!」と叫ぶ

すると仮面の男はくすりと笑い

【大丈夫、そんなの慌てなくてもまた近いうち会えるからさ!その時にゆっくり話そうよ・・・ テッド・ウィーク・リー くん】

と一方的に話を進めると、ブチリと音をたてて無線を切ってしまった

「何なんだ、一体?・・・つか何で俺のフルネームを知ってるんだよ・・・気味が悪い!..!」

『君たちも今の自分たちの状況を理解できてないんじゃないかな？』

先程相手に言われた言葉の意味はわからないが、その言葉に不吉な予感がした

(そんなことより・・・)

テッドは(とりあえずこいつをどうするか、だ)と心の中で思うと、すっかり大人しくなったアリスを見て、ほっと息を吐いた

しかし、ライタはテッドと違いハツとしたような表情で扉を見つめると

「扉の外に誰かがいる」と威嚇するように静かな声で言った

「は？」

ライタに言われテッドは耳をすますが何も聞こえず、彼はくびを傾げると「また何か来るのか・・・勘弁してくれよ!」と言ってため息をはいた

そんなテッドにライタは苛立ちを感じると「お前、聞こえないのかよ!？ひそひそ声でちゃんとは聞き取れないが、今まさに扉の前で何かを話てるじゃねーか!！」と怒鳴る

「もしかすると、こいつの仲間がきたのかもしれない!それなのに呑気にため息をはいてる場合かよ!？」

「ああ、なら大丈夫だ」

テッドはつかまえたアリスをライタに見せると

「いざとなりや、こいつを人質に・・・いや、盾にして逃げればいい！」

そうきっぱりいい放った

「!?!」

その言葉を聞き、仮面の男との一件で、顔を青くして大人しくなっていたアリスはぎりつと唇を噛み締めると、再び暴れ出す

「何ですって!?!あなた、か弱い女の子を盾にするなんて、男・・・いや、人として最低だと思わないの!?!」

そう言つて暴れ出すアリスに、男・・・いや、人として問題があるテッドは「おい、暴れるなよ!?!」と叫ぶ

「心配すんな、アリス!お前は強い!きつとどんなピンチがおとす

れよつともお前なら乗り切れるさ!!そう、俺は信じてる!!」

「信じてるって何をよ!?意味がわからない!!」

ギヤーギヤーと言い争う2人を見て、ライタはため息をはき

「テッド、お前本当に容赦ねーよな、いくら何でもそれは可哀想だ
る・・・やることえげつねー!!」

とテッドに対してそういい放った時だった・・・

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・りました・・・』

「！？」

扉の前での声を聞き、テッドとライタはびくりと肩を震わせる

その後、ライタが「来るぞ！」と叫ぶと、部屋の扉がゆっくりと開かれた

「さあ、来るなら来いッ！こちとら準備は出来てんだ！さっさと姿を現せ！」

だんだんと扉開いていき、テッドとライタが構えた瞬間

途中で勢いよく派手に扉が開かれると、そこには……

「あの、すみません！さっきからこの病室が煩いと苦情が来ているんですけど!?!?」

「「えッ・・・!?!?」」

鬼のような形相で血管が浮き出る程怒り狂ったナースと、静かに怒りのオーラを放つ治療師の若い女性二人が仁王立ちで立っていた

「お、鬼だ！ライター！白衣の天使であるべき人物がおおお・・・
鬼にッ!?!?」

その人物を見たテッドは慌てたように口を開くと、ナースは「誰が鬼だ!？」と叫ぶ!

「もう面会時間はとくに過ぎてんのに、ここの病室からは叫び声や爆発音は聞こえるわ、部屋は荒れてるわ・・・一体どうなってるんだよ!?!ただでなくともくそ忙しいっつーのに、うちの仕事増やすなっつーの!..!」

もう敬語でも何でももない、おそらく相当怒っているのだろう
そんな彼女を目の辺りにしたテッドとライタは素直に謝ると、今度は治療術師の方がなだめるように言った

「あの、小さい子もいるのであまり怒鳴るのはどうかと・・・」

しばらく黙って様子を見ていたアリスは二人の様子を見ていたが、

(小さい子・・・これは使える)とほくそ笑むと、思い切り息を吸う

「?」

突然深く呼吸をしだすアリスを見てテッドが首を傾げた瞬間

「きゃああああっ！」

いきなりアリスが叫び出した

「うお、うるせー!？」

突然悲鳴をあげるアリスを見て、テッドとライタがぼかんとしている
と、彼女はじたばたと暴れ出す

「いやあああッ、放してッ!誰か、誰かあ、助けて下さいっ!？」

「……な、お前!何いってやがる!？」

アリスの言葉にギョツとしたテッドは慌てて否定をしようと口を開くが

「さすがのような潤んだ瞳で「助けて」と叫ぶアリスを見ると、ナースは疑いの目でテッドを睨んだ

「そういやさつきから気にはなっていたが、何であんたその子に跨っているんだい？見た感じ女の子は嫌がってるし・・・まさか!？」

「何だ、その目は!？違いよ、俺にそんな趣味はねー!！」

ナースの言葉にテッドは慌てたように否定すると、今度は治療術師の方が口を開く

「それなら何故あなたは嫌がる女の子を押し倒しているのです?しかも、面会時間が終わった病院で!！」

「う・・・」

確かにそうだ！

テッドは治癒術師の質問に言葉を詰まらせると、今度はライタが「ごほん」と咳をすると、助け船を出してくれた

「こいつは、ベッドの上ではしゃいでたこの娘が転びそうになったから助けようとしたんだ・・・別にあんたらが考えてるようななんて、こいつは何一つしじゃないねーよ」

「「「!?!?!?!」」」

ライタの言葉にホッと息をつくテッドに対し、アリスはギリッと唇を噛み締めると

「違っもんっ!」

と叫ぶ

「私、この人に痴漢されました！騙されしないで下さいッ！」

「はあああああ！？何デタラメなこと言ってるんだ！？」

アリスの言葉を遮ってテッドは思わず叫んだ

「ふざけんなクソガキ！お前のを触るくらいなら、まだそのナースの姉ちゃんのを触って・・・いや、違う！」

テッドは言い直そうと、「ごほん」と咳き込むが、現にナースと治療術師はドン引きしている

「と、とにかくだ！俺は痴漢なんてしてねーよー！！」

そう言いながら冷や汗を流すテッドをナースは睨みつけると

「嘘つけっ！痴漢したやつはみんなそう言っつて誤魔化すんだよ！！
今の言動からして変態そのものじゃねーか！？女の子に跨りながら
キリッとした顔で言われても説得力がねーんだよ！！」

と怒鳴った

「とにかくその子を放しな！警察を呼ぶのはその後だ！？」

「警察っ！？」

ナースの言葉にテッドは青筋を浮かべると「勘弁してくれよ！」と
呟いた

「おい、待てよッ！」

ナースがそう言ってケータイを取りだした瞬間、ライターもテッドを庇うべく、ナースと治療術師を真っ直ぐに見る

「こいつは痴漢なんてしてねーし、全部この女が嘘をついてるんだ！警察を呼ぶ前に話を聞いてやってくれ」

「そういわれても・・・」

テッドとは違い落ち着いた物腰のライターにナースは言葉を詰まらせた

「どう見たかって私からは女の子が襲われているようにしか見えな
いし・・・それにこの状況になった理由をどう弁解・・・あれ？」

ナースは話の途中でテッドをちらりとみた瞬間、首を傾げる

「あのご、どこへ行ったの？・・・あッ!？」

「「「!？」「「「

痴漢騒ぎでテッドがナースに抗議をしているうちにアリスはテッドの腕から抜け出していて、窓辺に座っていた

「お前、いつのまに!？」

テッドはいつの間にかアリスではなく枕を抱えていたことに気が付き、

ハツとする

「くそ、変わり身か！？油断したぜ！！」

テッドは抱えていた枕を地面に叩きつけアリスを睨むと、彼女はニヤリと笑って言った

「いい気味ね、テッドさん・・・」

「あ、あの子！いつの間に!？」

テッドと抗議をしていたナースと治療術師も、アリスの素早い身のこなしにぎょっとしている

「本当これだから人間は甘いよね・・・」

アリスは窓に身を乗りだし、くるりと振り返ると余裕な笑みを浮かべて言った

「で、さっきの話に戻るけど、ライタさんに残されたタイムリミットはまだもう少しあるし、もう少し待ってあげるよ！」

「「!?!」」

アリスの言葉に、テッドとライタは反応を示すと、「どついつの意味だ？」と問いかける

するとアリスはライタを見て、くすりと笑つと「何ってそのままの意味」と答えた

「実際の所、今日はあなたたちの実力を知りたかったただけなの・・・それにテッドさん程度の実力なら、いつでもライタさんを連れていけると思ったからよ」

「んだと・・・コラ！」

アリスの言葉にテッドは青筋を浮かべると、彼女はそんなテッドを見下したように目を細めた

「とりあえず今日の所はこれで引いてあげる・・・ライタさんが毒に侵されどしようもない事態になった時、またあなたを迎えにくわ！今は関係のない人もいるし、次会った時に決着をつけましょ？」

「おい、テメー！勝手に一人で話を完結させんじゃねーぞ！！こっちからしたら訳がわかんねーんだよ!？」

テッドは窓から逃げようとするアリスに向かって走り出すと、彼女は「馬鹿ね・・・」と呟いた

「よせ、テッド!？」

ライタはアリスが手をかざすのを見てテッドに静止をかけた瞬間、テッドの身体が吹き飛ばされた

「ぐあぁっ・・・」

壁に背中を強く打ち付けたテッドは小さく呻き声をあげると、ライタは「テッド!？」と叫ぶ

「あら、ごめんなさい？加減して射ったつもりだけど、あなたには強すぎたかしら？」

そう言つてくすくすと笑うアリスを見て、テッドは眉間にシワを寄せると「なるほど、あんた化けるだけじゃなく、風の技も使えるのか」と舌打ちする

「本当にやっかいな能力・・・特に風属性は、術の形が目に見えねーからな」

その言葉にアリスは余裕の笑みを浮かべ、窓に足を掛けると「そう？」と首を傾げた

「それじゃあ私はこれで失礼するね、今度私があなたたちの前に現れる時は、タイムリミットが近いっていうことだから」

「くっ・・・！」

その言葉にテッドとライタは顔をしかめると、アリスは青い髪をなびかせながら、不敵に笑う

「その時、いい返事を待っているから・・・ね、ライタさん？」

「・・・・・・・・ツ」

ゾクツ・・・

アリスに微笑まれライタがゾクリと背筋を凍りつかせた瞬間だった、再び辺りに強い風が吹きテッド達は思わずその衝撃で目を閉じる

「くそ、また風か・・・目が開かねーッ!？」

そうテッドが叫んだとどろじに風が止み、テッドが目を開けるとそこにはアリスの姿はなく・・・

「くそ、あいつ!どこへ消えやがった!？」

【おまけ】

しりとりをしよう！」「1回戦・テッドVSヒナ」

テッド

「ヒナ、しりとりで勝負だ！いくぞ！俺の名前を取って【テッド】」

ヒナ

「……………【鈍感！】」

テッド

「……………」

――――――終了――――

【テッドVSヒナ2】

テッド

「おい、お前わざとだろ！いいな、今度はちゃんとするんだぞ！わかったか！？」

ヒナ

(めんどくさい……)

テッド

「この前は『ど』で終わったからな、いくぞ！【ドライアイ】」

ヒナ

「【イルカ】」

テッド

「【菓子！】」

ヒナ

「【鹿！】」

テッド

「か……【買い物】」

ヒナ

「【農家】」

テッド

「おい、『か』ばっかじゃねーか!? 【カバ】」

ヒナ

「【馬鹿】」

テッド

「くそ、【か、カブトムシ】」

ヒナ

「【進化】」

テッド

「【貝!】」

ヒナ

「【イカ】」

テッド

「【カビ】!」

ヒナ

「【美化】ッ!」

テッド

「か・・・【価値】」

ヒナ

「【地下っ…!】」

テッド

「おい、ヒナ！俺を嵌めてそんなに楽しいか!？」

ヒナ

「何のこと？(しねっ)」

テッド

「ちくしょー、俺をはめやがって！今に見てる!!【カモメ】」

ヒナ

「【めだかつ!】」

テッド

「ふん、やはりそうきたか！まだまだ、【かき氷】」

ヒナ

「【理科】」

テッド

「【観光】」

ヒナ

「【宇花っ!】」

テッド

「頃合いな．．．ヒナめ！』か』返しにしてくれるわ！くらえ』
閣下【っ！！】」

ヒナ

「！？」

テッド

「クックククツ、ざまあねーな！まさか反撃を受けるとは思わなかつただろ！」

ヒナ

「．．．．．」

テッド

「どうした、ネタギレか？俺が随分と出しちまったからな！くくくく」

ヒナ

「．．．．．【蚊ッ！！】」

テッド

「．．．．．」

第6話 帰らずの洞窟【前編】宣誓布告（後書き）

テスト騒ぎで更新が遅くなりました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0425s/>

明日へと続く物語

2011年11月16日20時06分発行